

# 睦合館跡

## 発掘調査報告書

1999

財団法人 山形県埋蔵文化財センター

むつ あい たて

# 陸合館跡

## 発掘調査報告書

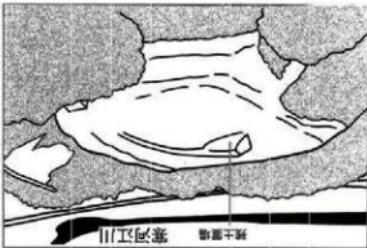
平成11年3月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター

參照圖版1



聯合調查調查區全景 (北東方)





睦合館跡全景（手前南）



SD250 空堀完掘状況（南東から）

## 序

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した、睦合館跡の調査成果をまとめたものです。

睦合館跡は、山形県のほぼ中央に位置する西川町にあります。西川町は、北に出羽三山主峰の月山、南西には朝日連峰を望み、四季の変化に富み、豊かな山の恵みをもつ所です。

この度、東北横断自動車道酒田線（寒河江～西川間）建設工事に伴い、工事に先立って睦合館跡の発掘調査を実施しました。

調査では、寒河江川左岸の段丘の地形を巧みに利用して造られた戦国時代の城館跡が明らかになりました。主郭の周りには土塁や空堀、曲輪を巡らし有事に備える一方、お茶や碁なども嗜み平時の時を過ごすという、当時の人々の生活ぶりが思いやられます。

埋蔵文化財は、祖先が長い歴史の中で創造し、育んできた貴重な国民的財産といえます。この祖先から伝えられた文化財を大切に保護するとともに、祖先の足跡を学び、子孫へと伝えていくことが、貴重な私たちの責務と考えます。その意味で、本書が文化財保護活動の啓発・普及・学術研究・教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査においてご協力いただいた関係各位に心から感謝申し上げます。

平成11年3月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター  
理事長 木場 清耕

## 例　　言

- 1 本書は、東北横断自動車道酒田線(寒河江～西川間)建設工事に係わる「睦合館跡」の発掘調査報告書である。
- 2 調査は日本道路公団仙台建設局山形工事事務所の委託により、財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 調査要項は下記の通りである。

|         |                             |             |             |
|---------|-----------------------------|-------------|-------------|
| 遺跡名     | 睦合館跡                        | 遺跡番号        | 平成4年度登録     |
| 所在地     | 山形県西村山郡西川町大字睦合              |             |             |
| 調査主体    | 財団法人山形県埋蔵文化財センター            |             |             |
| 受託期間    | 平成6年4月1日～平成7年3月31日（第1次調査）   |             |             |
| 現地調査    | 平成6年9月26日～平成6年12月2日（第1次調査）  |             |             |
| 調査研究課長  | 佐々木洋治                       |             |             |
| 主任調査研究員 | 野尻　侃                        |             |             |
| 調査研究員   | 安部　実                        | 伊藤　邦弘       | 須賀井新人(調査主任) |
|         | 水戸　弘美                       | 丸山　晶子       | 齋藤　健        |
| 嘱託職員    | 青山　崇                        |             |             |
| 受託期間    | 平成8年4月1日～平成11年3月31日(第2次調査)  |             |             |
| 現地調査    | 平成8年7月16日～平成8年11月20日(第2次調査) |             |             |
| 調査担当者   | 調査第一課長                      | 佐藤　庄一       |             |
|         | 主任調査研究員                     | 阿部　明彦       |             |
|         | 調査研究員                       | 黒坂　雅人(調査主任) | 伊藤　元        |
|         | 嘱託職員                        | 須賀井明子       |             |
| 整理担当者   | 研究課長兼調査第一課長                 | 佐藤　庄一       |             |
|         | 主任調査研究員                     | 佐藤　正俊       |             |
|         | 調査研究員                       | 伊藤　元        |             |

- 4 発掘調査及び本書を作成するにあたり、日本道路公団東北支社山形工事事務所、西川町教育委員会、東南村山教育事務所等関係機関に協力いただいた。また、資料整理にあたって鈴木聖雄氏、長澤正機氏、堀内秀樹氏、秦　昭繁氏、松井敏也氏、松岡　進氏からご教示をいただきいた。ここに記して感謝申し上げます。
- 5 本書の作成・執筆は伊藤　元が担当した。編集は丸山晶子・森谷昌央・志田純子が担当し、全体については佐藤庄一が監修した。
- 6 委託業務は次の通りである。  
　遺構の写真測量・実測はアジア空撮株式会社に委託した。  
　資料の理化学分析(土壤分析)はパリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。
- 7 出土遺物、調査記録類については財団法人山形県埋蔵文化財センターが一括保管している。

## 凡　　例

1 本書で使用した遺構・遺物の分類記号は次の通りである。

|            |            |           |            |
|------------|------------|-----------|------------|
| S T…堅穴建物跡  | S B…掘立柱建物跡 | S D…溝跡・堀跡 | S X…性格不明遺構 |
| S P…柱穴、ピット | S F…土壘     | 郭…平場・曲輪   |            |
| R Q…登録石製品  | R M…登録金属製品 | R P…登録土製品 | S…石        |

2 遺構番号は、現地調査段階での番号をそのまま報告書の番号として踏襲した。

3 報告書執筆の基準は下記の通りである。

- (1) 調査区概要図・遺構配置図・遺構実測図中の方位は磁北を示している。
- (2) グリッドの南北軸は、N-22° 30' - Eを測る。
- (3) 遺構実測図は1/40・1/50・1/80・1/100・1/200・1/300・1/400・1/500・1/1000縮尺で採録し、それぞれにスケールを付した。
- (4) 遺構実測図・土層断面図中における水糸レベル標高の単位はmである。
- (5) 土層断面図中において、遺構覆土・盛土は算用数字で表記し、地山等の基準層はローマ数字で表記した。
- (6) 遺構実測図・土層断面図中において、木製品は斜線で表示し、石製品・礫石は網目のスクリントーンで表示した。
- (7) 本文中の遺物番号は、遺物実測図・遺物図版ともに共通のものとし、「第○図△番」を「○-△」と略記した。
- (8) 遺物実測図・拓影図は、碁石・錢貨は1/1、石器・土器・陶磁器・金属製品は1/2、石・土・木製品は1/3、大型の石製品は1/4を基本として採録し、それぞれにスケールを付した。遺物図版についても同じスケールを基本としている。
- (9) 遺物実測図中の須恵器断面は黒ベタとした。
- (10) 拓影図は、左側から内面・断面・外面を表している。
- (11) 出土遺物観察表中の( )内の数値は図上復元による推定値、または残存値を示している。
- (12) 遺構覆土の色調については、1987年版の農林水産省水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帖」に拠った。

# 目 次

|                                |     |
|--------------------------------|-----|
| I 調査の経緯 .....                  | 1   |
| 1 調査に至る経過 .....                | 1   |
| 2 調査の方法と経過 .....               | 1   |
| II 遺跡の立地と環境 .....              | 3   |
| III 遺跡の概観 .....                | 6   |
| 1 遺跡の層序 .....                  | 6   |
| 2 遺構と遺物の分布 .....               | 6   |
| IV 検出された遺構 .....               | 11  |
| 1 主郭 .....                     | 11  |
| 2 土壘と空堀 .....                  | 52  |
| 3 曲輪 .....                     | 64  |
| V 出土した遺物 .....                 | 73  |
| 1 石器・須恵器 .....                 | 73  |
| 2 輸入陶磁器 .....                  | 74  |
| 3 瀬戸・美濃 .....                  | 76  |
| 4 瓦質土器 .....                   | 78  |
| 5 近世・近代陶磁器 .....               | 78  |
| 6 石製品・土製品 .....                | 86  |
| 7 金属製品・錢貨・木製品・その他の出土遺物 .....   | 96  |
| VI まとめと考察 .....                | 100 |
| 1 調査のまとめ .....                 | 100 |
| 2 睦合館跡出土陶磁器の検討 .....           | 102 |
| 3 睦合館跡の年代観と周辺城館跡との関連について ..... | 105 |
| 報告書抄録 .....                    | 112 |
| 付編 .....                       | 卷末  |
| 「睦合館跡から出土した炭化材の年代と樹種」          |     |

## 表

|     |                       |    |
|-----|-----------------------|----|
| 表1  | 溝跡観察表(1) .....        | 47 |
| 表2  | 溝跡観察表(2) .....        | 48 |
| 表3  | 曲輪観察表 .....           | 65 |
| 表4  | 石器計測表 .....           | 73 |
| 表5  | 陶磁器観察表(1) .....       | 84 |
| 表6  | 陶磁器観察表(2) .....       | 85 |
| 表7  | 石鉢・茶臼観察表 .....        | 95 |
| 表8  | 砥石観察表 .....           | 95 |
| 表9  | その他の石製品・土製品観察表 .....  | 95 |
| 表10 | 金属製品観察表 .....         | 99 |
| 表11 | 錢貨観察表 .....           | 99 |
| 表12 | 木製品・その他の出土遺物観察表 ..... | 99 |

## 挿 図

|                       |    |                      |     |
|-----------------------|----|----------------------|-----|
| 第1図 睦合館跡調査概要図         | 2  | 第37図 土坑実測図(1)        | 47  |
| 第2図 睦合館跡遺跡位置図         | 4  | 第38図 土坑実測図(2)、井戸跡実測図 | 48  |
| 第3図 地形分類図             | 5  | 第39図 土塁と空堀平面図        | 53  |
| 第4図 睦合館跡及び周辺部地形図      | 7  | 第40図 1・2トレンチ土層断面図    | 56  |
| 第5図 主郭遺構配置図           | 9  | 第41図 3トレンチ東面・西面平断面図  | 57  |
| 第6図 主郭整地状況の平断面図       | 12 | 第42図 10・12トレンチ土層断面図  | 59  |
| 第7図 7トレンチ土層断面図        | 13 | 第43図 11トレンチ実測図       | 60  |
| 第8図 建物跡配置図            | 16 | 第44図 S D250実測図       | 61  |
| 第9図 S B50掘立柱建物跡       | 17 | 第45図 S X330実測図       | 63  |
| 第10図 S B110掘立柱建物跡     | 18 | 第46図 南東曲輪群平面図        | 66  |
| 第11図 S B230掘立柱建物跡     | 19 | 第47図 南西・西曲輪群平面図      | 67  |
| 第12図 S B240掘立柱建物跡     | 20 | 第48図 4トレンチ土層断面図      | 69  |
| 第13図 S B1・2掘立柱建物跡     | 21 | 第49図 5・6トレンチ土層断面図    | 71  |
| 第14図 S B332・333掘立柱建物跡 | 22 | 第50図 石器・須恵器実測図       | 73  |
| 第15図 S B290・339掘立柱建物跡 | 23 | 第51図 輸入陶磁器実測図        | 75  |
| 第16図 S T234竪穴建物       | 24 | 第52図 濑戸・美濃系陶器実測図     | 77  |
| 第17図 主郭内溝跡配置図         | 27 | 第53図 陶器・瓦質土器実測図      | 80  |
| 第18図 溝跡実測図(1)         | 28 | 第54図 肥前系磁器実測図(1)     | 81  |
| 第19図 溝跡実測図(2)         | 29 | 第55図 肥前系磁器実測図(2)     | 82  |
| 第20図 溝跡実測図(3)         | 30 | 第56図 肥前系磁器(3)・磁器実測図  | 83  |
| 第21図 溝跡実測図(4)         | 31 | 第57図 石鉢A類実測図(1)      | 88  |
| 第22図 溝跡実測図(5)         | 32 | 第58図 石鉢A類実測図(2)      | 89  |
| 第23図 溝跡実測図(6)         | 33 | 第59図 茶臼実測図(1)        | 90  |
| 第24図 溝跡実測図(7)         | 34 | 第60図 茶臼(2)・石鉢B類実測図   | 91  |
| 第25図 溝跡実測図(8)         | 35 | 第61図 磁石実測図(1)        | 92  |
| 第26図 溝跡実測図(9)         | 36 | 第62図 磁石実測図(2)        | 93  |
| 第27図 溝跡実測図(10)        | 37 | 第63図 その他の土製品・石製品     | 94  |
| 第28図 溝跡実測図(11)        | 38 | 第64図 金属製品実測図         | 97  |
| 第29図 溝跡実測図(12)        | 39 | 第65図 銭貨・その他の出土遺物     | 98  |
| 第30図 溝跡実測図(13)        | 40 | 第66図 睦合館跡出土陶磁器組成     | 101 |
| 第31図 溝跡実測図(14)        | 41 | 第67図 遺物分布図           | 103 |
| 第32図 溝跡実測図(15)        | 42 | 第68図 睦合館跡出土遺物編年表     | 104 |
| 第33図 溝跡実測図(16)        | 43 | 第69図 睦合館跡周辺地籍図       | 107 |
| 第34図 溝跡実測図(17)        | 44 | 第70図 睦合館跡縄張り図        | 108 |
| 第35図 溝跡実測図(18)        | 45 | 第71図 周辺城館遺跡略測図       | 110 |
| 第36図 溝跡実測図(19)        | 46 | 第72図 最上郡最上川・鮎川周辺館跡   | 111 |

## 図 版

- 巻頭図版 1 着合館跡調査区全景  
巻頭図版 2 着合館跡遺跡範囲全景  
S D 250空堀完掘状況
- 図版 1 調査区遠景・近景  
図版 2 作業風景  
図版 3 調査区全景他  
図版 4 主郭造構検出状況  
図版 5 主郭遺物出土状況他  
図版 6 S B 1・2・50掘立柱建物跡  
図版 7 S B 50掘立柱建物跡  
図版 8 S B 110掘立柱建物跡  
図版 9 S B 230掘立柱建物跡  
図版10 S B 240掘立柱建物跡  
図版11 S B 332・333掘立柱建物跡  
図版12 S B 290・339掘立柱建物跡  
図版13 S T 234堅穴建物跡  
図版14 S D 82溝跡他  
図版15 S D 140溝跡他  
図版16 S D 283溝跡他  
図版17 S D 293溝跡他  
図版18 S D 209溝跡他  
図版19 S D 180溝跡他  
図版20 S D 78溝跡他  
図版21 主郭東半部溝跡完掘状況  
図版22 S D 40溝跡他  
図版23 主郭西半部溝跡検出状況  
図版24 S D 233溝跡他  
図版25 S D 298溝跡他  
図版26 S D 312溝跡他  
図版27 S D 319溝跡
- 図版28 土坑(1)  
図版29 土坑(2)、井戸跡  
図版30 土壙と空堀全景他  
図版31 S F 500土壙他  
図版32 3トレンチ土層他  
図版33 10トレンチ土層他  
図版34 S F 520土壙他  
図版35 S X 330性格不明遺構他  
図版36 S D 250掘跡検出状況他  
図版37 S D 250掘跡配石状況他  
図版38 S D 250掘跡完掘状況  
図版39 西・南西曲輪群全景  
図版40 4トレンチ土層他  
図版41 郭340他  
図版42 郭380他  
図版43 調査区外の曲輪他  
図版44 石器・須恵器  
図版45 輸入陶磁器  
図版46 濑戸・美濃系陶器  
図版47 唐津系陶器他  
図版48 肥前系磁器(1)  
図版49 肥前系磁器(2)  
図版50 肥前系磁器(3)・産地不明磁器  
図版51 石鉢A類(1)  
図版52 石鉢A類(2)、茶臼(1)  
図版53 茶臼(2)、石鉢B類、碁石  
図版54 砧石  
図版55 その他の土製品・石製品  
図版56 金属製品  
図版57 銭貨、その他の出土遺物



## I 調査の経緯

### 1 調査に至る経過

睦合館跡は西川町大字睦合地内にあり、睦合小学校校庭の北にせまる丘陵の先端に位置している。この地は、地元の人々に「要害」という名で呼ばれていたが、詳しい伝承などはなかった。昭和63年から山形県教育委員会が主体となって実施している山形県中世城館址調査で、鈴木聖雄氏が平成3年11月に現地の確認調査を行い、中世の城館址であることが分かった。

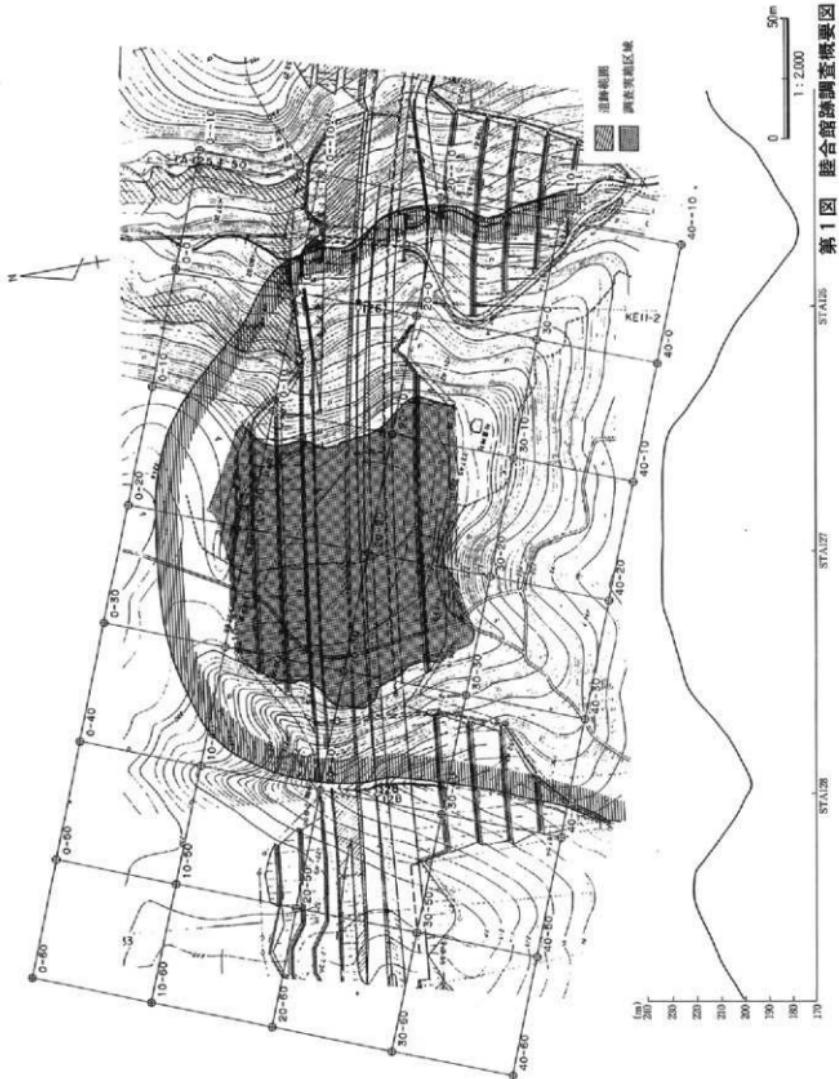
東北横断自動車道酒田線（寒河江～西川間）の工事の具体化に伴い、山形県教育委員会では、平成4年度に計画路線に沿って遺跡詳細分布調査（A調査）を実施した。睦合館跡は、この確認調査で新規登録された遺跡の一つである。寒河江川左岸の段丘上を中心に遺跡面積は40,500m<sup>2</sup>と推定された。この分布調査の結果をもとに日本道路公団との間で調整が図られ、主郭と土塁と空堀、曲輪の大部分である20,200m<sup>2</sup>が路線にかかることがわかり、記録保存を目的とした緊急発掘調査を財団法人山形県埋蔵文化財センターが日本道路公団の委託を受けて実施する運びとなった。第1次発掘調査は、山形県教育委員会が実施した遺跡詳細分布調査によって記録保存対応が確定された範囲について、平成8年度の発掘調査の基礎資料を収集することを目的として、平成6年11月7日～11月17日まで、延べ9日間にわたって実施している。

### 2 調査の方法と経過（第1図）

第2次発掘調査は、第1次発掘調査で得られた資料をもとに、平成7年7月16日から11月20日までの延べ80日間にわたって実施した。遺跡面積45,000m<sup>2</sup>の内、東北横断自動車道酒田線（寒河江～西川間）の建設にかかる20,200m<sup>2</sup>を対象に実施された。この中で、西側と東側の斜面については、調査自体にたいへんな危険が伴うため地形の測量調査のみを行い、主郭・土塁・空堀・曲輪部分の10,800m<sup>2</sup>の調査を行うこととなった。

調査の開始にあたり、5m×5mのグリッドを設定した。グリッドの南北軸は、磁北から西に22°30'傾く。南北軸（X軸）は北から南に、東西軸（Y軸）は東から西に、番号を割り当てる。調査の主な進行状況は、下記の通りである。

- 7月16日 器材搬入、鍛入れ式、環境整備、調査区設定
- 7月17日 主郭東半部の表土除去・木材移動開始（～7月29日）
  - 同区域の面整理・遺構精査・記録作業開始（～9月19日）
- 9月5日 第1回目の空中写真測量撮影・委託による残土処理開始（9月17日）
- 9月17日 主郭西半部の表土除去開始（～9月25日）
  - 同区域の面整理・遺構精査・記録作業開始（～11月15日）
- 10月25日 調査説明会（参加100名）
- 10月31日 第2回目の空中写真測量撮影
- 11月5日 主郭北西部（旧駐車場部分）の表土除去開始（～11月7日）
  - 同区域の面整理・遺構精査・記録作業開始（～11月19日）
- 11月20日 器材搬出 環境整備



## II 遺跡の立地と環境

睦合館跡は、山形県西村山郡西川町大字睦合に所在する。西川町は山形県のほぼ中央部に位置し、最上川最大の支流である寒河江川の上流から中流にかけて存在する。北に出羽三山主峰の月山（1,870m）が聳え、南西には大朝日岳（1,780m）を主峰とする朝日連峰が連なっている。西川町をL字型に貫流する寒河江川は、その流域に河岸段丘を作り出している。

この地は、山形と庄内を結ぶための交通の要衝であり、かつては六十里越街道として利用され、海味はその宿場町として賑わい、岩根沢は出羽三山登拝口の門前町として栄えた。そして現在では国道112号線、東北横断自動車道が町を横断している。

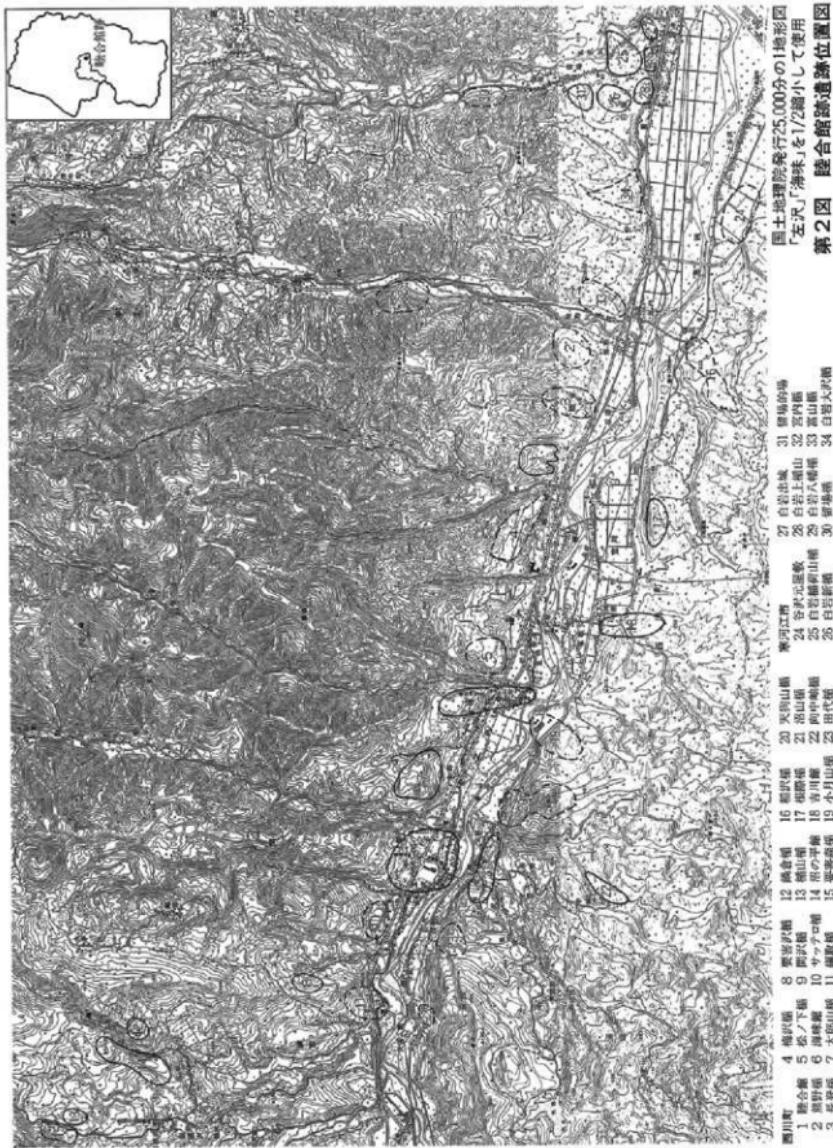
本遺跡の所在する睦合地区は、この西川町の東部、寒河江川左岸に位置し、南は寒河江川をはさんで吉川地区と、北は月山山塊を境に最上郡大蔵村と接する。旧六十里越街道沿いの熊野・石田・梅沢の3集落が明治9年合併して睦合村となった。本遺跡は石田集落の山地丘陵部、寒河江川が作り出した河岸段丘上に立地する。標高は220～235mを測り、沖積面との比高差は約70mに達する。現況はほとんどが松や雑木などの林になっている。また、近世以降、本遺跡地内には稻荷社、秋葉神社が祀られ、信仰の地としても利用されている。

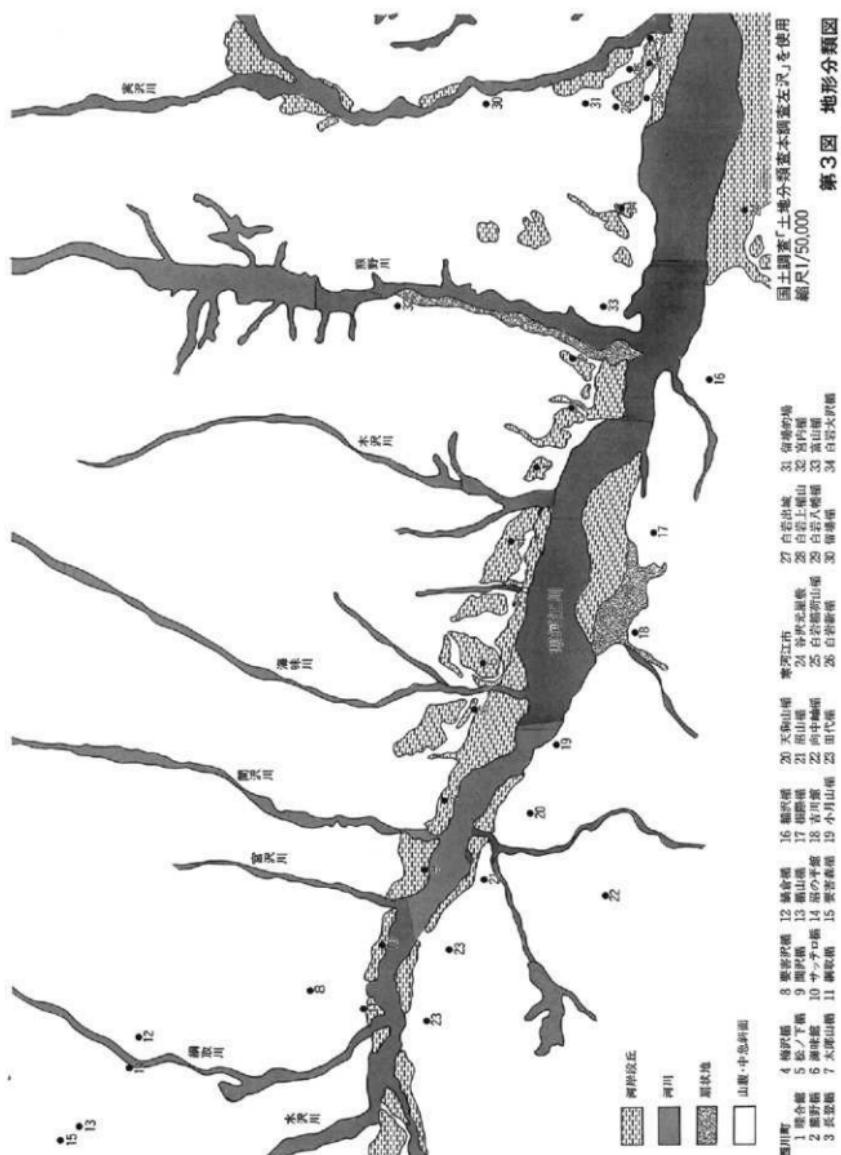
西川町には、旧石器、縄文時代の遺跡が多数点在している。寒河江川が作り出す肥沃な土壤や丘陵地は、古来より人々の生活を支えるのに十分な条件にあったことが推測される。今でも良質な頁岩が豊富にある寒河江川や大入間川流域には、お仲間林遺跡を始め、山居遺跡、月山沢遺跡など旧石器から縄文時代の遺跡がある。

平安時代後期には、西川町の大部分を含む西村山地域は寒河江荘の一部となる。この地域は、布・砂金・馬の産出地として知られており、奥州藤原氏や京都の摂関家、慈恩寺の影響下など様々な支配が錯綜する状況に置かれることになる。

中世初期鎌倉時代になると、寒河江荘は鎌倉幕府の武将大江廣元の領地となり、廣元の義父多田仁綱が代理として入部する。仁綱は、初めは寒河江に居を構えたが、のちに西川町吉川に居を移し、その後吉川は寒河江荘の中心となる。

戦国期には、睦合館のような山城が西川町には多数造られた。「山形県中世城館遺跡調査報告書第2集（村山地域）」によれば50ヶ所の中世城館が確認されている。その殆どは出羽と庄内を結ぶ旧六十里越え街道沿いに集中しており、睦合館周辺でも東に長登橋、西に梅沢橋が近接している。これらは、庄内武藤氏や上杉氏に備えた戦略上の拠点として大江氏や、戦国末に西村山一帯を支配するようになった最上氏などにより築かれたものと見られるが、築城者や築城時期について不明なものが多い。西川町の山間部は金や鉄の産出地としても有名であり、平安時代以来西川町全体として一大製鉄地を形成し、武器や武具あるいは農具や生活用具を作り出していたと考えられる。鈴木聖雄氏によれば、睦合周辺でもタタラ製鉄を実証できる地があるという。この鉄生産量を充実させるためにも戦国大名は西川町に多数の城館を築き重要視していたと考えられる。





### III 遺跡の概観

#### 1 遺跡の層序

遺跡の基本的な層序は、各地点により異なるので、ここでは主郭と曲輪の2点について取り上げる。

〈主郭〉 整地層と絡み、縁部・中央部・北部ではその様相が異なるが、大別すれば3層に分けられる。I層は腐葉土層である。近世の陶磁器を含んでおり、厚さは10~15cmである。地点によっては、I層下面が遺構検出面となっている。II層は整地層である。10~25cmの厚さで盛土されているが、縁部ほど厚く盛られている。III層は地山である。おおかた黄褐色の粘土盤で、小礫や風化礫を含んでいる。

〈曲輪〉 曲輪の基本的な層序も各曲輪により異なっているが、ここでは郭390について取り上げる。基本的な層序はI~III層で捉えられ、III層は地山である。I層は主郭と同様の腐葉土層である。遺物は殆ど含んでいない。II層は整地層であり、この層の上面が館跡が機能していた時期の表土面と見られる。斜面を削った土を盛土したものと考えられる。III層は大小様々な風化凝灰岩を含む粘土盤である。

#### 2 遺構と遺物の分布

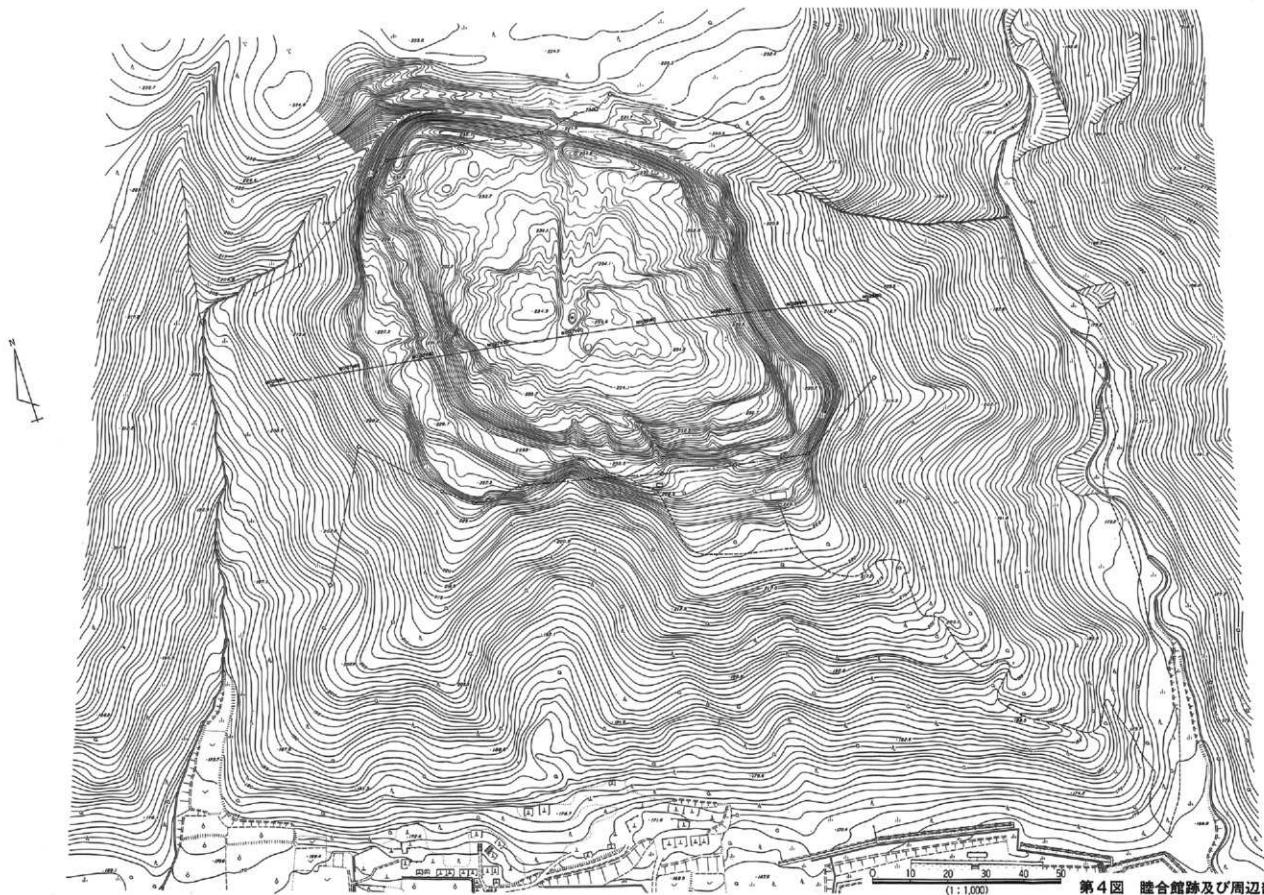
睦合館跡は現在残っている河岸段丘上の地形そのものが一つの遺構といえる戦国期の城館跡である。調査面積は10,800m<sup>2</sup>であるが、これは主郭、土塁と空堀、曲輪に分けられる。

主郭は中央の平場の区域である。この主郭も平坦な地形ではなく、約30~50cm程の段差で階段状に区画されている。また、10棟の掘立柱建物跡、竪穴建物跡の周りには一定方向の溝跡や柵列が配されており、計画的に区割りされていることが分かる。遺構はほぼ全域に分布しているが、中央から北側は密であり、南東部は希薄である。

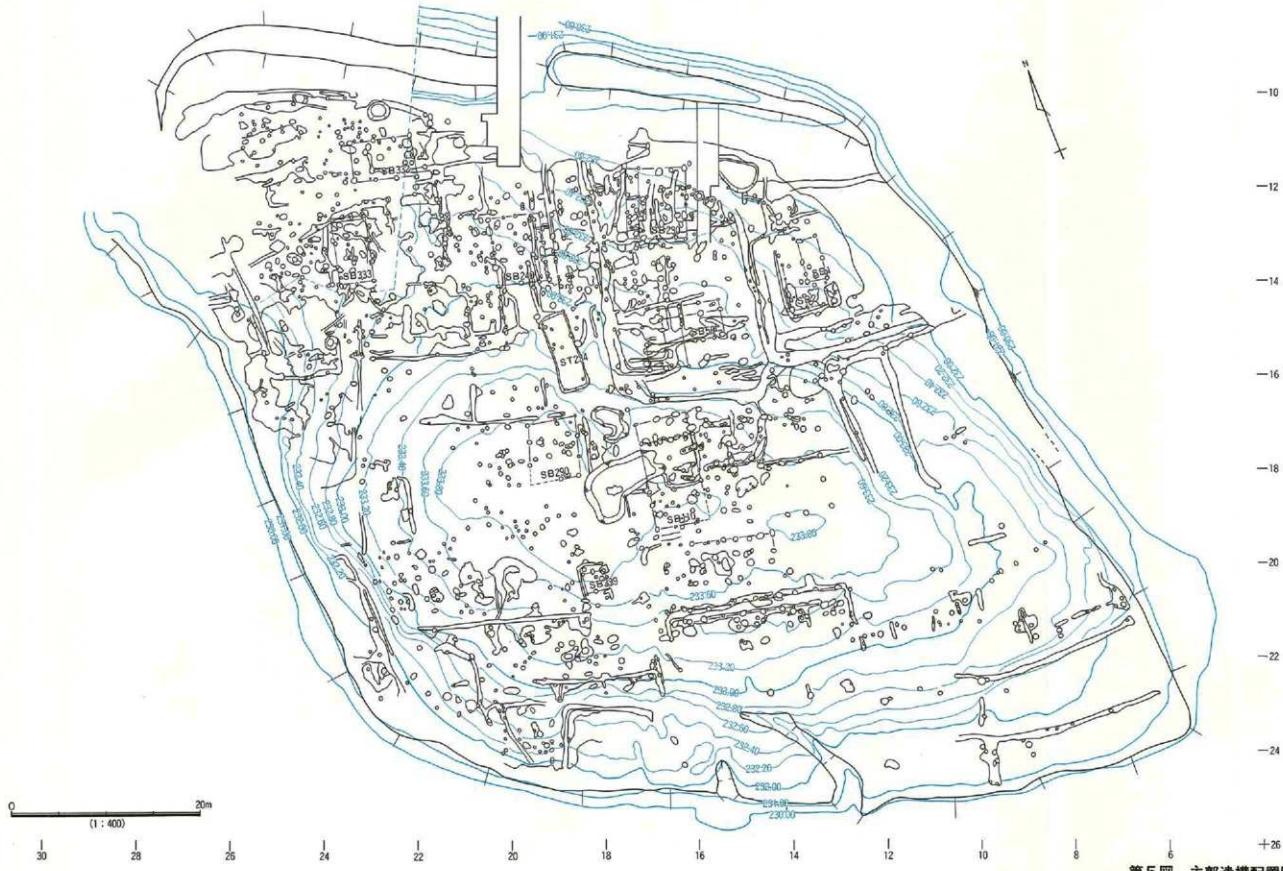
土塁と空堀は、主郭の北側に三重に造られており、搦手側から攻める敵に対する備えとして尾根続きを完全に遮断している。空堀の中には石組みの井戸があるが、これは後に造られたものである。地元の人の話では調査区の北側の平坦地に人が住んでいたということで、近現代の陶磁器、ガラス製品などが土塁と空堀から出土している。

曲輪は主郭の南・西側に配されている小さな平場である。合計15段の曲輪が確認されているが、最下段の曲輪から主郭までは7mの比高差がある。数条の溝跡が検出されているが、他に遺構は確認できなかった。

遺物は、整理箱で14箱出土している。最も多いのが陶磁器で、中世では中国産の青磁や染付、瀬戸・美濃系陶器、近世では肥前系染付の碗・皿などである。これらは調査区のほぼ全域から出土しているが、殆どが遺物包含層から出土したものである。この他、縄文時代の石器、中世以降の石鉢・茶臼・砥石・碁石などの石製品、武器・建築部材・銭貨などの金属製品、籠甲製の簪などが出土している。調査区内の稻荷社、秋葉神社へのお供えとして使ったものもあると考えられる。



第4図 講合館跡及び周辺部地形図



第5図 主郭造構配置図

## IV 検出された遺構

ここでは、検出された遺構を大きく主郭、土壘と空堀、曲輪の3つの節に分け、その概要について述べていく。

### 1 主郭

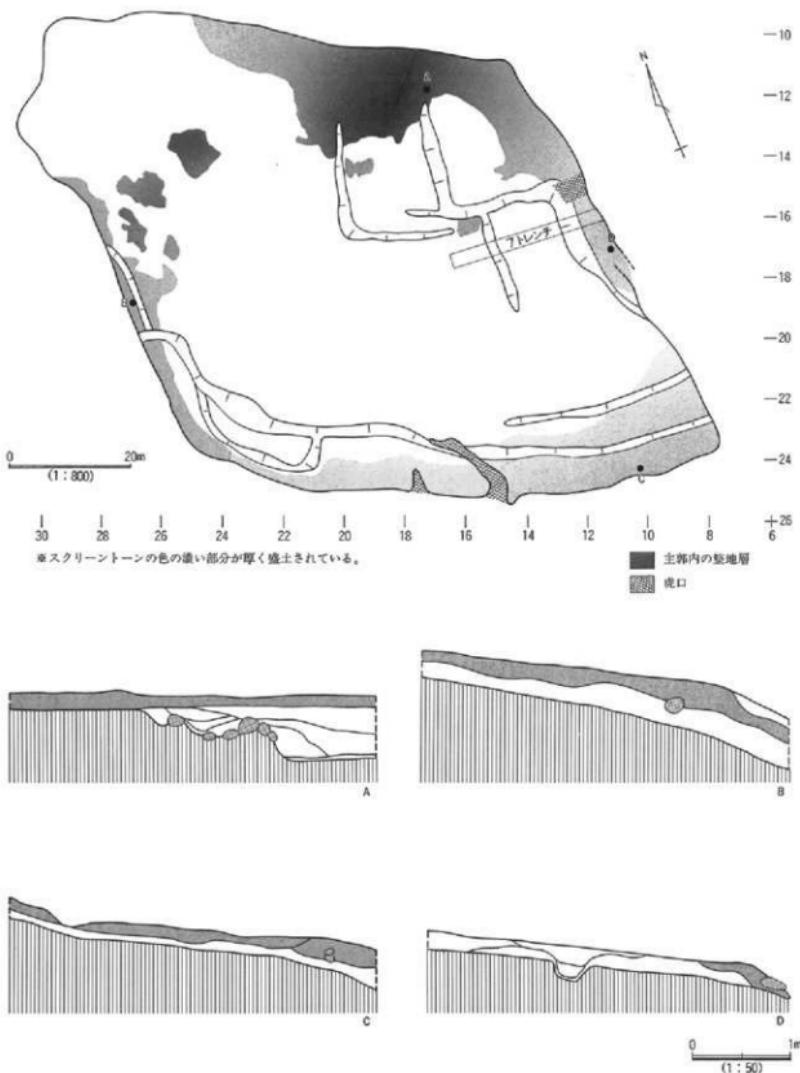
主郭は南東部から西側にかけては曲輪群、北側は土壘と空堀に囲まれ、東側は深い沢である。南北70m、東西110mの菱形の形をしており、面積は約6,000m<sup>2</sup>に上る。標高は232.6m～233.8mを測り、街道筋からは約70mの比高差がある。この主郭の中は平坦な地形ではなく、30～50cmの段差で階段状に区画され、中央部ほど高くなっている。また、主郭の中央には長径9m、深さ50cm程の窪地がある。主郭内には地山を削ったり、地山にそのまま盛土を行ったりすることにより作られた整地層が観察できる。第6図は盛土を行い整地を行ったと見られるところをスクリントーンで表した図である。整地層は10～30cmの間で盛土されているが、縁部ほど厚くなっている。この盛土の厚さにより前述した主郭内の区画段差を作り出している。

主郭に入る虎口は南側と東側にある。南側は街道筋からの入り口であり、現在の睦合小学校裏からと、長流寺境内裏から主郭に迫り着く。この虎口は「へ」の字状になっており、中央部が窪んでいる。また、この虎口付近にはSD140・141がある。これらの溝跡は遺構内に柱穴があり柵列になるものと見られる。南の虎口からの侵入に備える柵列であったのではないだろうか。一方、東側の虎口は搦手側からの入り口と考えられる。この虎口は後述するSD250とも絡んで、礫が階段状に配されている。また、搦手側のSF500を分断し、SD600を横切る土橋があるが、この土橋については跡跡が成立していた時期より新しいものと見られる。

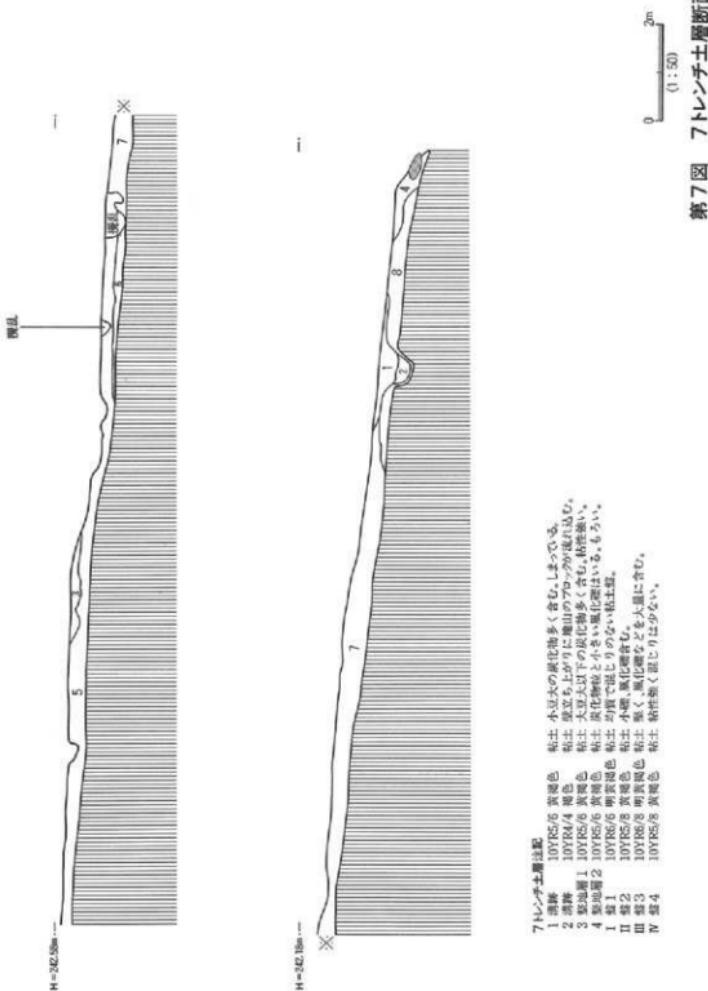
主郭内で登録した遺構は、掘立柱建物跡10棟、竪穴建物跡1棟、井戸跡1基、土坑8基、溝跡92条、性格不明遺構3基、建物跡に結びつかない柱穴である。このうちのほとんどの遺構が主郭の中央部から北半部にかけて検出されている。このことは、居住域を比較的標高の高い主郭中央部から北半部にかけて作る一方、主郭南東部から東部にかけてはオープンスペース的な役割を持っていたのではないかと考えられる。検出された建物跡や溝跡はほぼ一定の方角に向いているため、前述した階段状の段差とともに計画的に区割りが行われていたものと考えられる。詳しくは後述するが、これらの溝跡は、遺物の出土状況から16世紀～17世紀の前葉にかけて造られたものと見られる。また、北側の整地層を掘り下げた時に、主郭の北側から東側に廻る石組みの堀(SD250)が検出された。主郭南東隅の6トレンチの整地層下からは溝跡や柱穴が検出された。これらのことから主郭内は大規模な修復がなされて現在の形になっていることが分かる。

SF500脇には、稻荷社が祀られていた。いつからこの地に稻荷社が祀られたかは定かではないが、この付近から近世の肥前磁器や籠甲製の簪などが出土していることから、この時期には造られていたものと考えられる。この稻荷社は現在も参拝されており供物をあげるための現代の陶磁器が残っていた。高速道路の建設に伴い現在は主郭南側の曲輪に移されている。

検出された遺構



第6図 主郭整地状況の平面面図



第7図

7トレンチ土層断面図

## (1) 挖立柱建物跡

掘立柱建物跡として確認できたものは10棟である。このほかにも多くの柱穴が確認できたが、建物跡を構成するまでには至らなかった。建物跡は比較的標高の高い主郭中央部から北側にかけて確認されている。遺物の出土がほとんどないため時期の特定は難しいが、建物の区画と考えられる溝跡からの出土遺物により中世末～近世初めのものと見られる。以下、それぞれの掘立柱建物跡について概述する。

**S B50 (第9・30図)** 15～16～18～19グリッドで検出された。北側に庇を持つ変則的なL字型である。桁行長8.7m、梁間長6.15mを測る東西棟で、主軸方位はW-12°-Nである。2×3間に庇のつく部分とそれに付随する1×2間の部分とに分かれている。EB4～EB6はSD19に切られている。EB7・8は礎石になる。柱穴の掘り方は円形または不整円形を呈する。EB1・4・5では、アタリが明瞭に確認され、EB4には柱根が確認された。EB57はSD63の床面から検出されている。SB50の北側には雨落ち溝とも考えられるSD12がある。また、西側にはL字型をSD238、南側にはSD25がL字型を呈して配されており、これらの溝跡でSB50の区画を表すものと考えられる。

**S B110 (第10・26図)** 17～19～18～19グリッドにかけて検出された。桁行長11.9m、梁間長6.7mを測る身舎が4×3間の建物跡で、北側に庇を持つ。主軸方位はN-15°-Eである。柱間は梁間、桁行とともに2.1m(7尺)前後である。主郭の中ではもっとも標高の高い区域にあり、平均233.8mを測る。柱穴の掘り方は径30～70cmの円形または梢円形を呈する。検出面からの深さは13～60cmとばらついている。EB7の床面からは柱を据える際の根石と考えられる径18cmの礎が検出されている。出土遺物はEB13から明代の染付が、EB2からは砥石が出土している。検出された10棟の建物の中では最も規模の大きい建物である。SB110の南側にはSA130柵列が検出されている。

**S B230 (第11・32図)** 12～14～19～20グリッドにかけて検出された。木根や建物跡より新しい時期の遺構から攪乱を受けている柱穴もあり、明確に確認できない点もある。桁行3間、架行2間、西庇の南北棟で、桁行長8.3m、梁間長6.5mを測る。主軸方位はN-23°-Eである。柱間は梁間、桁行とともに2.1m(7尺)～3.0m(10尺)となっている。柱穴の掘り方は、径3.5～75cmの円形または梢円形を呈し、検出面からの深さは11～49cmである。EB1ではアタリが明瞭に確認され、床面には径12cmほどの根石がある。しかし、他の柱穴のアタリは不明瞭である。出土遺物は認められない。

**S B240 (第12・33図)** 13～15～22～23グリッド、SB230の西側に検出された。桁行3間、架間2間、東庇の南北棟の建物跡である。主軸方位はN-16°-Eである。建物の規模は桁行長7.2m、梁間長6.9mを測る。柱間は梁間が2.7m(9尺)、桁行が2.1m(7尺)～3.0m(10尺)前後となっている。柱穴の掘り方は径30～80cmの円形または梢円形を呈し、検出面からの深さは10～30cmであり、平面形、深さとともにばらつきがある。堆積土は単層または2層であり、アタリが明瞭に確認できるものは見られない。床面に根石と考えられる礎を持つものもある。東側にはSA341が検出されている。

**S B 1 (第13・28図)** 14~15~16グリッドで検出された。桁行2間、梁間1間の規模の小さい建物で、主軸方位はN-11°-Eである。桁行長4.8m、梁間長2.65mを測る。柱間は梁間、桁行ともに2.1m(7尺)である。E B 1・2は整地層下から検出されている。柱穴の掘り方のプランは径35~60cmの円形または楕円形である。検出面からの深さは20~69cmとばらつきがある。

**S B 2 (第13・28図)** 14~15~16~17グリッド、S B 1の西側に隣り合わせて検出された。桁行3間以上、梁間2間以上の建物であると思われるが、東側が整地されているため確認できなかった。柱間は1.8m(6尺)等間である。主軸方位はN-8°-Eである。柱穴の掘り方は径20~40cmの円形または楕円形を呈し、検出面からの深さは20~50cmを測る。明瞭なアタリは確認できなかったが、E B 5からは根石と見られる礫が検出されている。南側から西側にかけて雨落ち溝と思われるSD 3が検出されている。

**S B 332 (第14・36図)** 12~24~26グリッドで検出された。桁行3間、梁間1間の東西棟で、主軸方位はW-23°-Nである。建物の規模は桁行長7.2m、梁間長4.6mを測る。柱間は桁行が2.1m(7尺)で、梁間が3.9m(13尺)である。柱穴の掘り方は径45~60cmの円形または楕円形を呈し、検出面からの深さは40~50cmとほぼ一様である。堆積土は単層または2層である。E B 2・3はアタリと見られる落ち込みが確認できる。出土遺物は認められない。

**S B 333 (第14・35図)** 13~15~26グリッドで検出された。北側にはS B 332が隣接している。桁行3間、梁間2間の南北棟で、主軸方位はN-23°-Eである。建物の規模は桁行長7.2m、梁行長3.9mを測り、柱間は桁行2.4m(8尺)、梁間1.8m(6尺)である。E B 9はSD 332の床面から、E B 8はSD 318の床面から検出されている。柱穴の掘り方は円形を呈しているものが多い。検出面からの深さは15~56cmと一様ではない。E B 1は木根により擾乱を受けている。堆積土は単層であり、E B 3ではアタリの部分が落ち込んでいる。

**S B 290 (第15・33図)** 17~19~21~22グリッド、主郭のほぼ中央部に位置する桁行3間、梁間2間の建物と思われるが、南西隅の柱にあたる部分が1本木根による擾乱を受け確認できなかった。主軸方位はN-20°-Eである。建物の規模は桁行長6.8m、梁間長5.5mを測る。柱間は桁行が2.1m(7尺)であるが、梁間の柱間は一定ではない。掘り方の平面プランは径40~50cmの円形または楕円形と均一的であるが、検出面からの深さは15~50cmと一様ではない。底面は円形であり、断面形も丸い形状である。根石を伴う柱穴もある。建物の東側、北側に雨落ち溝が検出されている。

**S B 339 (第15・22図)** 21~19グリッドに検出された、桁行2間、梁間1間の小規模な建物跡である。北側から西側にかけてL字状を呈する雨落ち溝SD 307が検出されている。主軸方位はW-22°-Nである。建物の規模は桁行が2.8m、梁間が3mである。桁行の柱間は90cm(3尺)である。柱穴の掘り方は、平面プランが径30~60cmの円形または楕円形を呈し、検出面からの深さは38~53cmを測る。底面は平坦である。E B 302・304では、アタリが明瞭に確認できる。

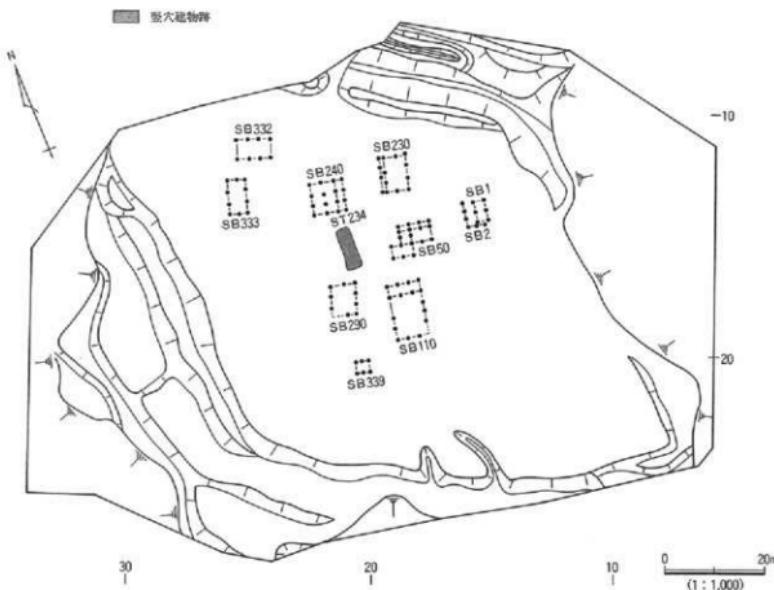
## (2) 竪穴建物跡（第16図）

竪穴建物跡は主郭中央部に1棟検出された。この他にも方形の規模の大きな遺構は検出されたが、明確に竪穴建物跡といえるものはS T234の1棟である。

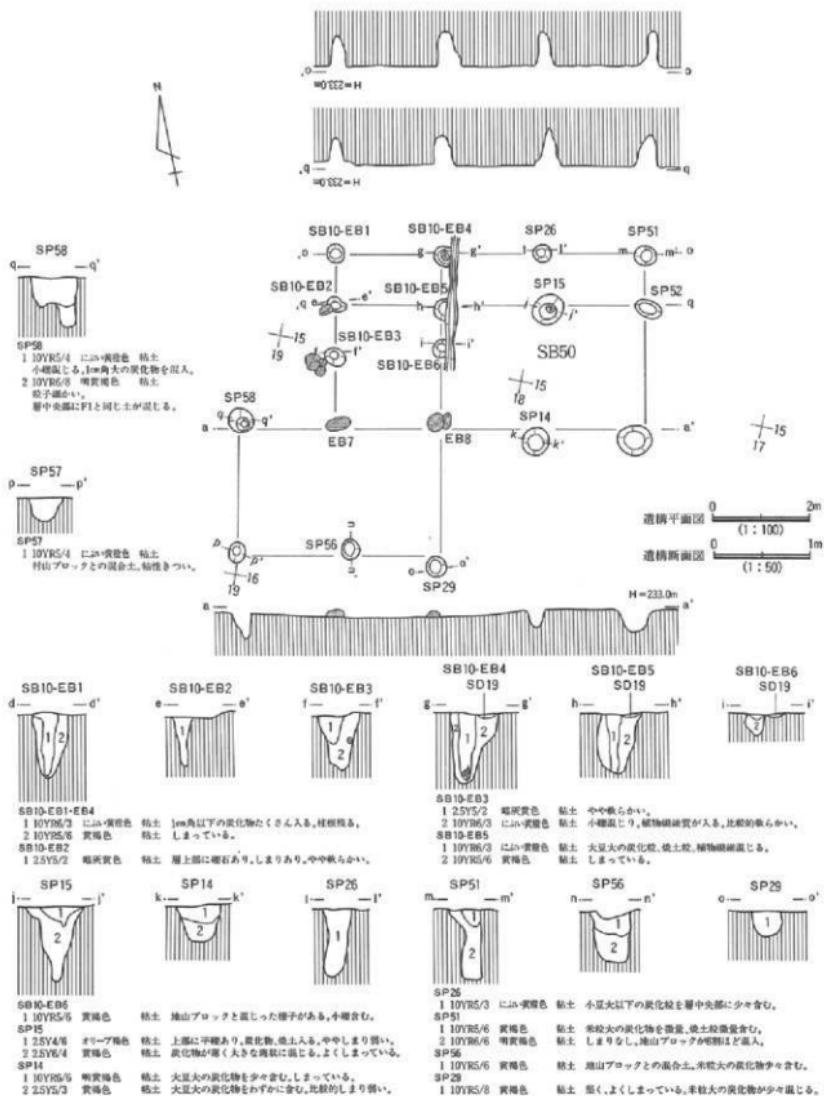
S T234（第16図） 15～17～21～22グリッドで検出された。主軸方位はN-4°-Eである。平面形態は長軸8.4m、短軸3.2mの長方形であり、北側には張り出し部を持つ。検出面からの深さは50cm前後を測り、壁はややスロープ状に落ち込む。覆土は2層で固くしまっており、小豆大から大豆大の炭化物が多数混入している。この炭化物の中で覆土2層の炭化物を放射性炭素年代測定の委託を行った結果、西暦1,700年前後のものと判断された。このことから、建物の造られた時期は1,700年以前であることが分かる。また、最下層には厚さ5cmほどの炭化層が混入している。

柱穴は、隅と中央部に確認されている。深さは10～15cm前後である。また、床面からは径30cmほどの円礫が検出されている。

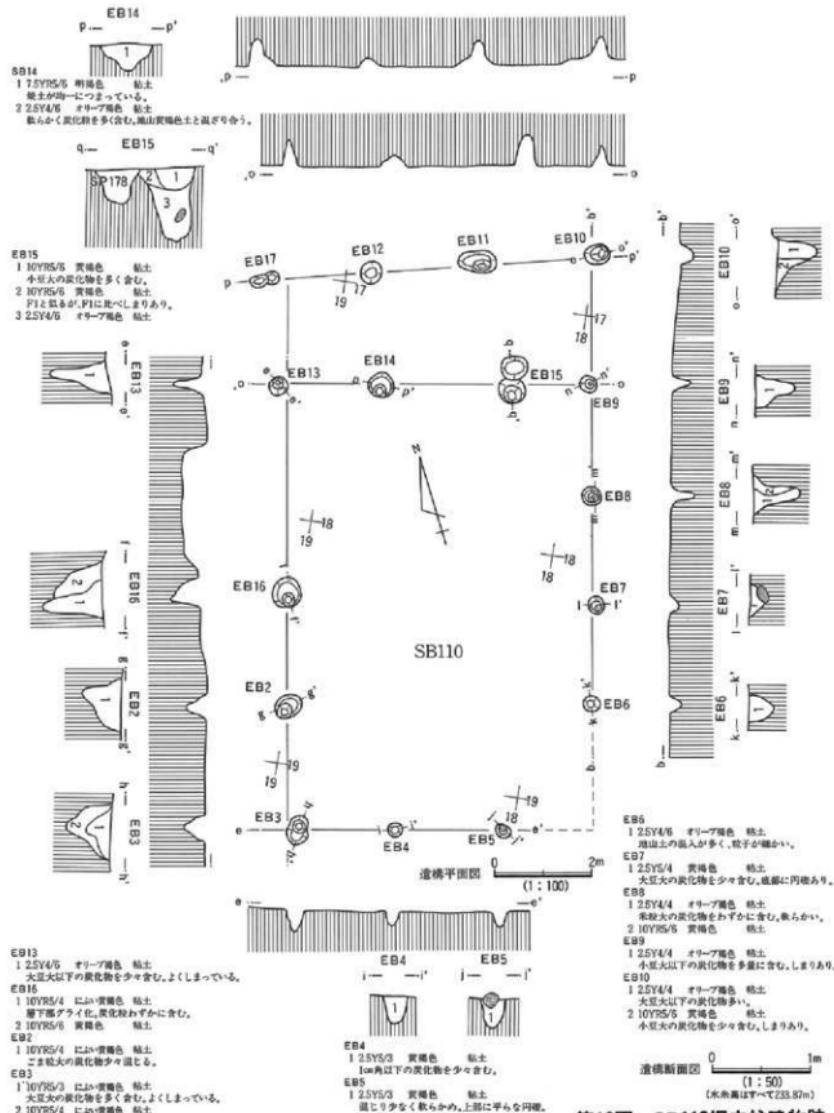
出土遺物は床面近くから長さ30cmほどの刀子（64-1）、2層から鐵鎌と思われる金属製品（64-4）、3層から板状鉄製品（64-5）が出土している。



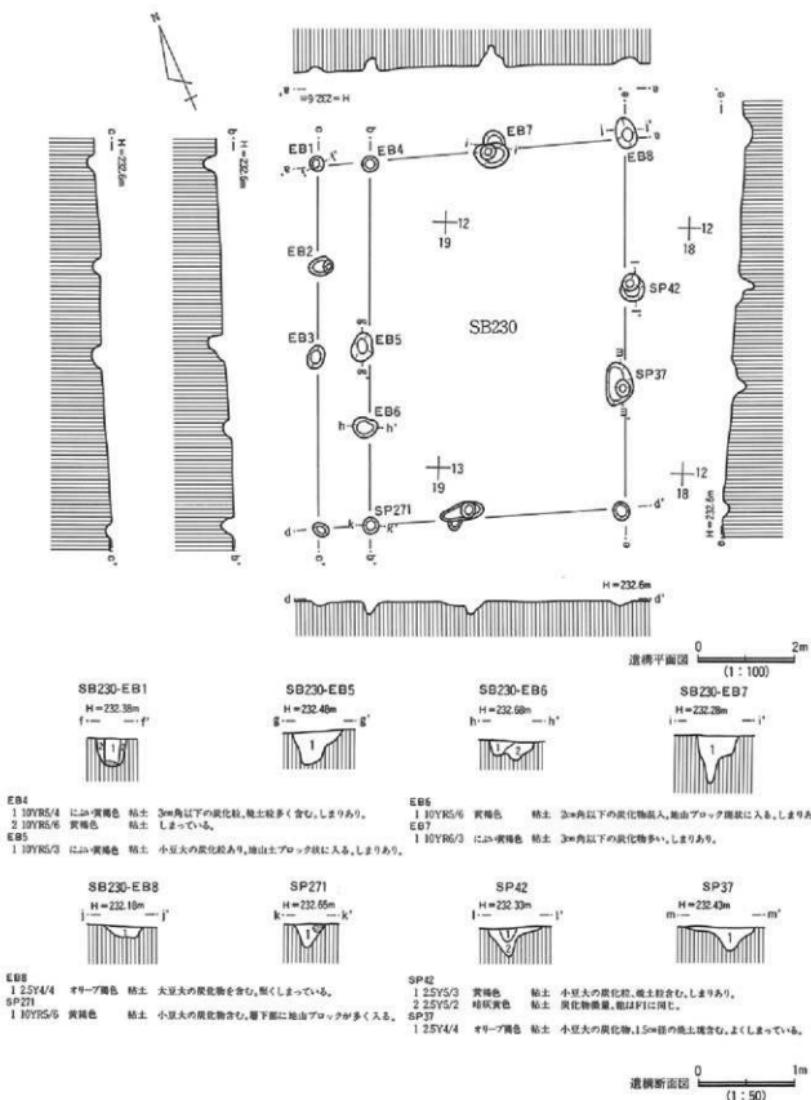
第8図 建物跡配置図



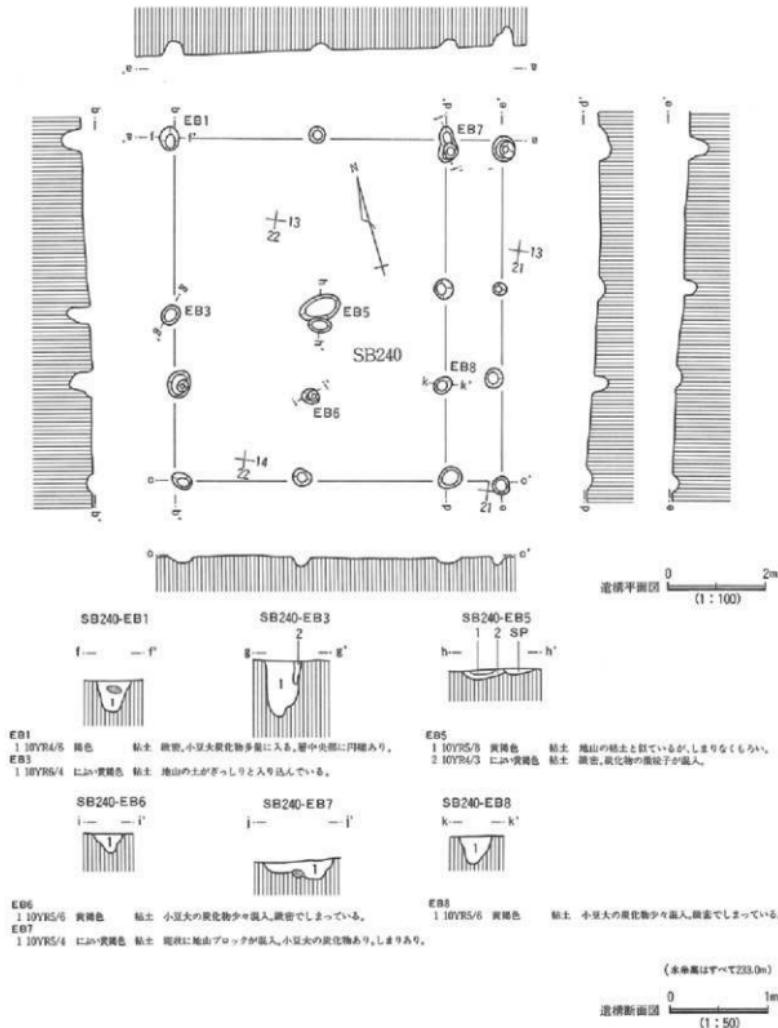
第9図 SB50掘立柱建物跡



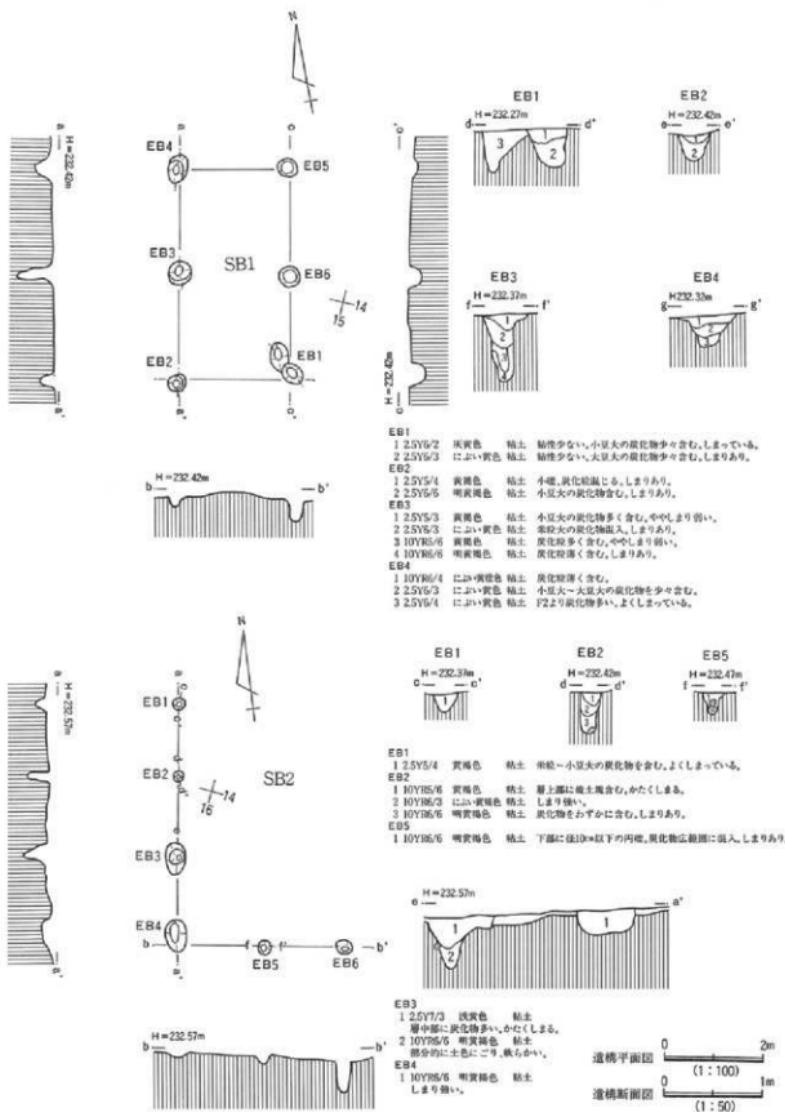
### 第10図 SB110掘立柱建物跡



第11図 SB230掘立柱建物跡

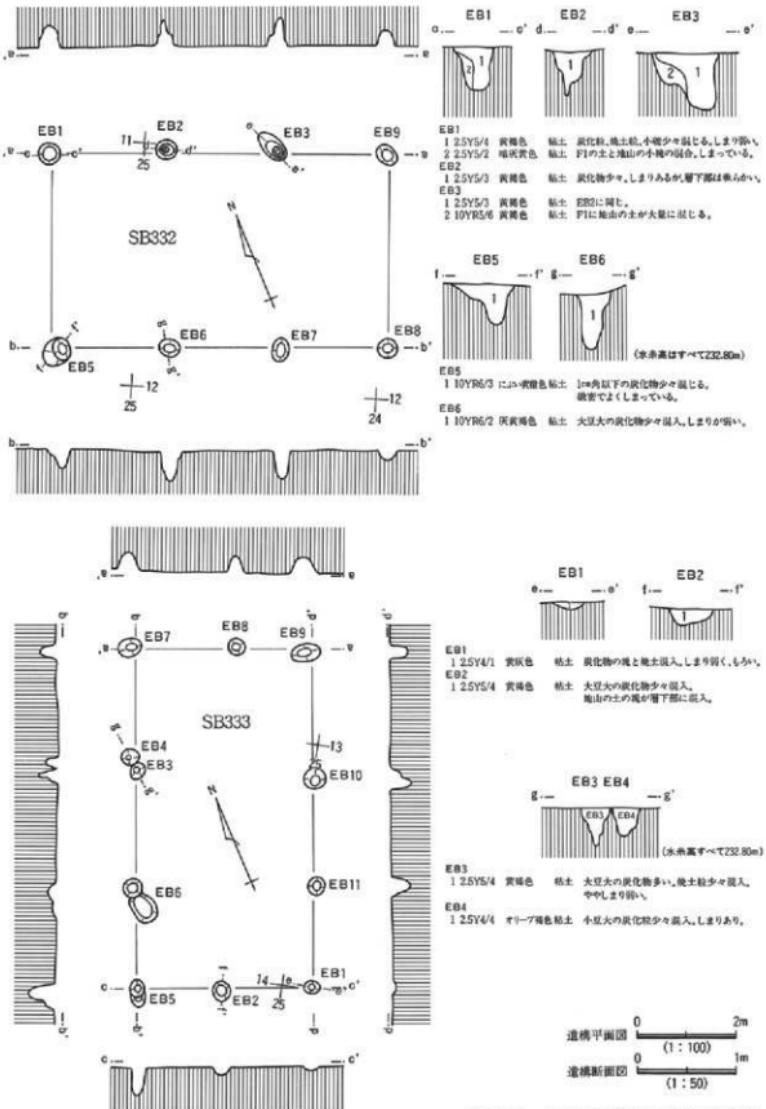


第12図 SB240掘立柱建物跡

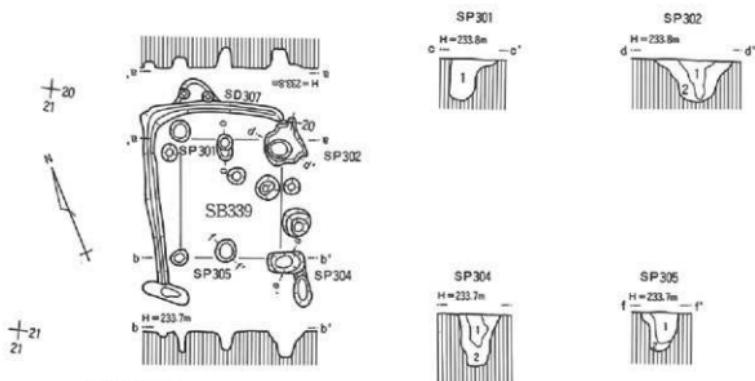
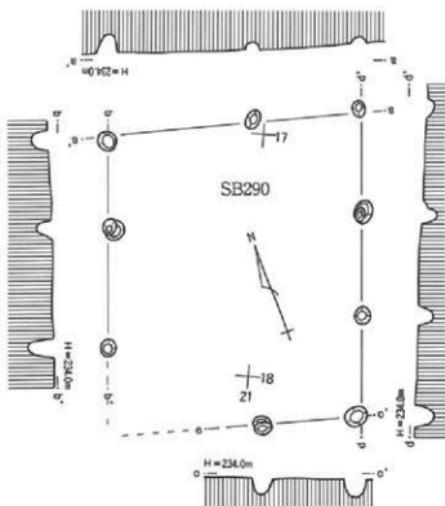


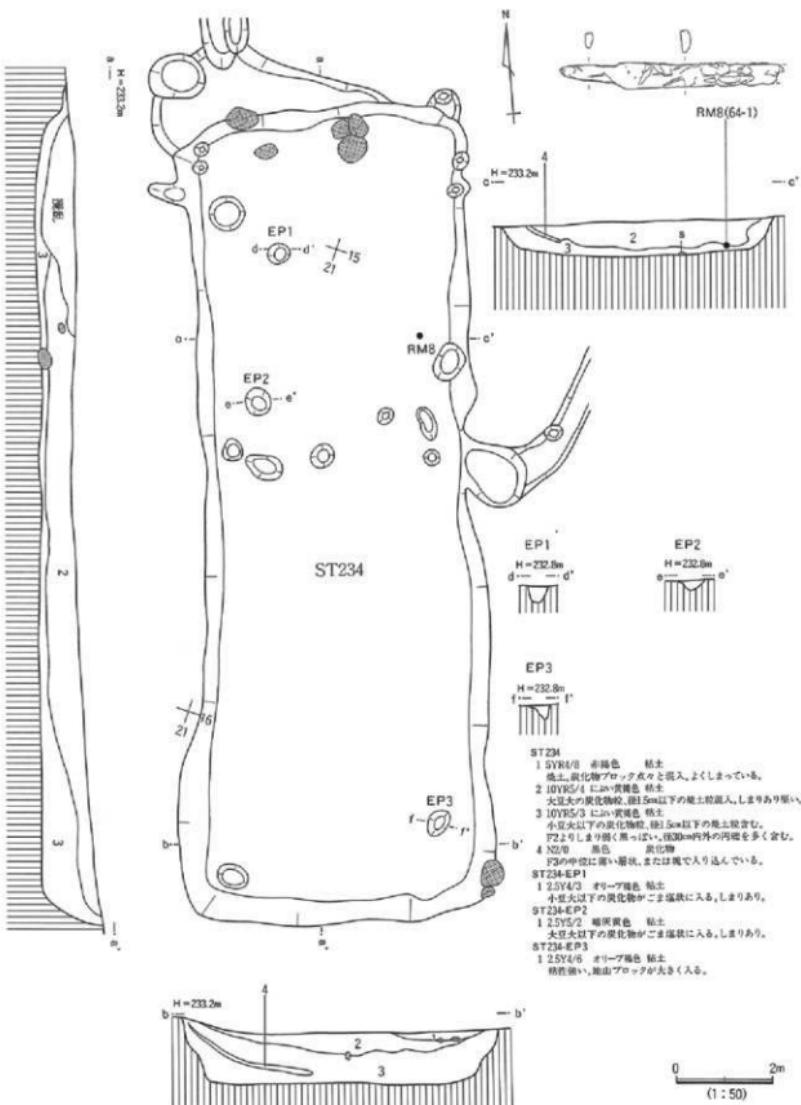
第13図 SB 1・2 据立柱建物跡

検出された造構



第14図 SB332・333掘立柱建物跡





第16図 ST234豎穴建物跡

## (3) 溝跡・柵列（第17～36図）

溝跡は主郭の全域にわたって検出されている。検出された溝跡はほぼ一定方向に延びており、疊合館の性格を考える上で重要な要素になるものと思われる。ここでは、溝跡を次の8類に分類し、溝跡を伴わない柵列を柱列と取り扱い、その主なものについて概述する。

A-1類…主郭内の段差に係わる溝跡で、遺構内に柱穴があり柵列の様相を呈する溝跡。

S D 82（第18図） 23～24-9～13グリッド主郭南東部に位置する。溝の北側が約25cmほど高くなる。溝内には径35cm、溝の底面からの深さが40cm前後の柱穴が4本不定間隔に並ぶ。

S D 20（第28図） 14～16-15～17グリッド、主郭北東部に位置する。溝の西側がわずかに高くなっている。溝内には径15～35cmの柱穴が7本不定間隔に並ぶ。S D 66と交差しL字型を呈する。S B 1・2の区画溝と考えられる。

A-2類…主郭内の段差に係わる溝跡で、L字型を呈する溝跡。

S D 25・238（第30・31図） 12～17-17～21グリッドに位置する。S B 50を開むようにS D 25・238が交差しL字型を呈する溝跡になる。S D 25の南側、S D 238の西側が30cmほど高い。S D 25の覆土内からは天目茶碗片（52-15）、肥前磁器片（54-17）が出土している。

S D 209（第25図） 16～19-14～15グリッドに位置する。16-15グリッドで北側から東側に進路を変える。南北軸の部分はS D 210と平行で、西側が20cmほど高くなっている。東西軸の部分はS D 66と平行である。

S D 283（第19図） 23-22～29グリッドで検出された。整地を行った部分を切って溝が作られている。東西軸の部分の北側が約10cm前後高い。覆土内から瀬戸・美濃系の菊花文皿（53-1）が出土しており、16世紀中頃に作られた溝といえる。

S D 284（第19図） 24～25-20～21グリッド、主郭南端部に検出された。溝の南端部は整地層に切られる。東西軸の部分の北側が約10cm前後高い。

A-3類…主郭内の段差に係わる溝跡で、平面形が直線の溝跡。

S D 86（第18図） 22～23-12～13グリッド、主郭東南角に検出された。溝の北側が25cmほど高い。主軸はS D 82とほぼ同じ。主郭東南角はS D 82・86による2段の段差がある。

S D 213（第25図） 16～19-14～15グリッド、主郭東端部で検出された。溝の西側が約10cmほど高い。S D 209と交差する。主郭東端部には2段の段差があり、S D 213とS D 209・210の溝跡がその区画となっている。

S D 296・297（第24図） 21～23-25～26グリッド、主郭西端部で検出された。2条の溝跡はほぼ平行に走っており、東側が15～20cmほど高くなっている。S D 296からは瀬戸・美濃系の茶入れ（52-14）が出土している。

S D 326・327・328（第36図） 10～11-26～30、主郭北西角で検出された。3条の溝跡がS F 510に沿って延びている。

B-1類…主郭内の段差とは関わりのない溝跡で、溝跡内に柱穴を伴い柵列となる溝跡。

S D 140・164（第20・21図） 21～22-15～19グリッドに検出された。2つの溝跡で登録したが主軸方向が同じであり、一連の溝跡であると考えられる。平面形はコの字状を呈する。溝

跡内には径50cm前後の柱穴が10本以上、約2m間隔で並ぶ柵列になるものと考えられる。

S D141（第20・21図） 21～22～16～19グリッドに検出された。S D140とは平行な溝跡である。溝内には径50～75cm、検出面からの深さ20～50cmの柱穴が9本、約2m間隔で並ぶ。S D141の覆土内からは青磁碗の口縁部（51-7）、溝内の柱穴S P 176からは瓦質土器片（52-14）が出土しており、S D283と同じ時期に作られたものと考えられる。

S D190（第26・27図） 18～17～18グリッド、S B110の東脇に検出された。溝内には径25～45cm、検出面からの深さ30cm前後の柱穴が5本、約130cm間隔で並ぶ。

S D198（第26・27図） 18～15～17グリッドで検出された。溝の覆土は単一層で深さは10cm前後である。溝内にはS P 195～197・215の4本の柱穴が約210cm間隔で並ぶ。柱穴の規模は径50cm前後、深さ30～70cmである。柱穴は溝跡に切られており溝より先に作られている。

S D242（第32図） 13～14～22グリッドで検出された。S B240と主軸が同じである。溝跡内には、径20～40cmの柱穴が4本150～200cm間隔で並ぶ。柱穴は溝跡より先に作られた。

B-2類…主郭内の段差とは関わりのない溝跡で、平面形がL字型を呈する溝跡。

S D21・78（第28・29図） 13～16～15～17グリッドで検出された。2つの溝跡が連続し、平面形はコの字状を呈する。主郭北東部のS B2の区画溝と考えられる。

B-3類…主郭内の段差とは関わりのない溝跡で、平面形が直線状の溝跡。

S D40（第32図） 13～14～18～20グリッド、整地層下から検出された。S D238と交差し、S B50の区画となる溝と考えられる。

S D78（第28・29図） 12～13～15～17グリッドで検出された。S D250堀跡を切って作られている。覆土内からは、肥前系青磁片（54-9）が出土している。

S D233（第33図） 17～22～24グリッドで検出された。S B290の北側に検出されている。覆土内から漸戸・美濃系陶器片（52-2）が出土している。

S D298（第29図） 18～26グリッドで検出された。幅20cm、深さ14cm前後の小規模な溝跡であるが、覆土内から円盤状の有孔石製品が4点一括で出土している。

C-1類…性格不明の大溝。

S D22（第30図） 15～16～15～16グリッドで検出された。床面からS D59～65が検出されている。覆土中には、小円礫が敷き詰められたように含まれている。

S D243（第35図） 14～16～22～24グリッドで検出された。溝の床面から北方向に延びるS D245、西側に延びるS D246などが検出されている。整地が行われた跡とも考えられる。

C-2類…性格不明の小溝。

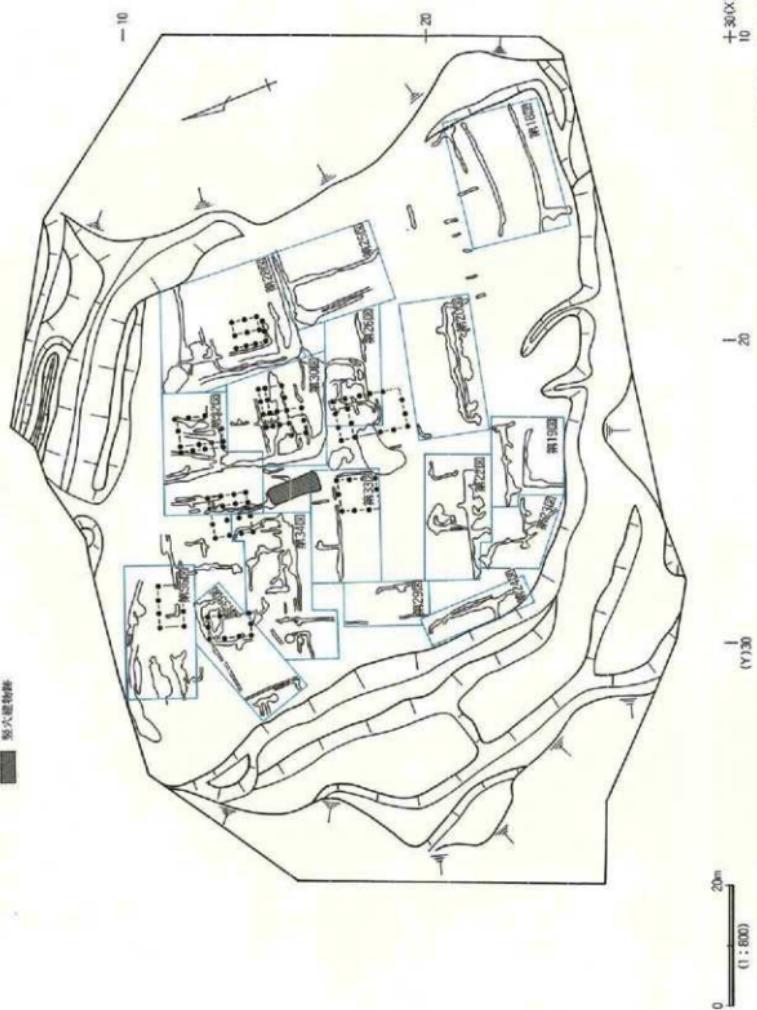
C-2類に該当する溝跡は14条ある。S B50・110掘立柱建物内に該当する溝跡が多い。

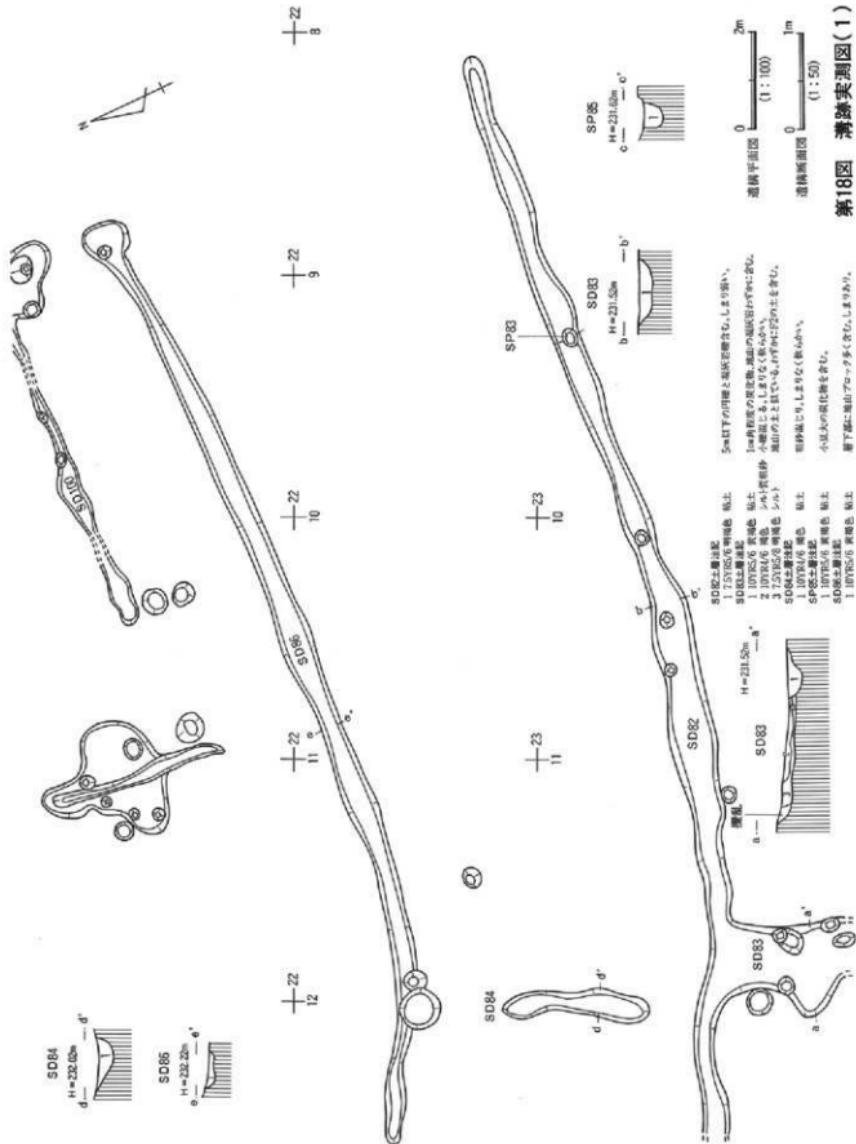
柱列…柱列として登録した柱穴群は2本ある。以下、この2本の柱列について概説する。

S A130（第20・21図） 20～17～20グリッド、S B110の2m南に位置する。柱は150cm間隔で8本並ぶ。柱穴は径30～50cmの円形を呈し、検出面からの深さは20～40cmである。

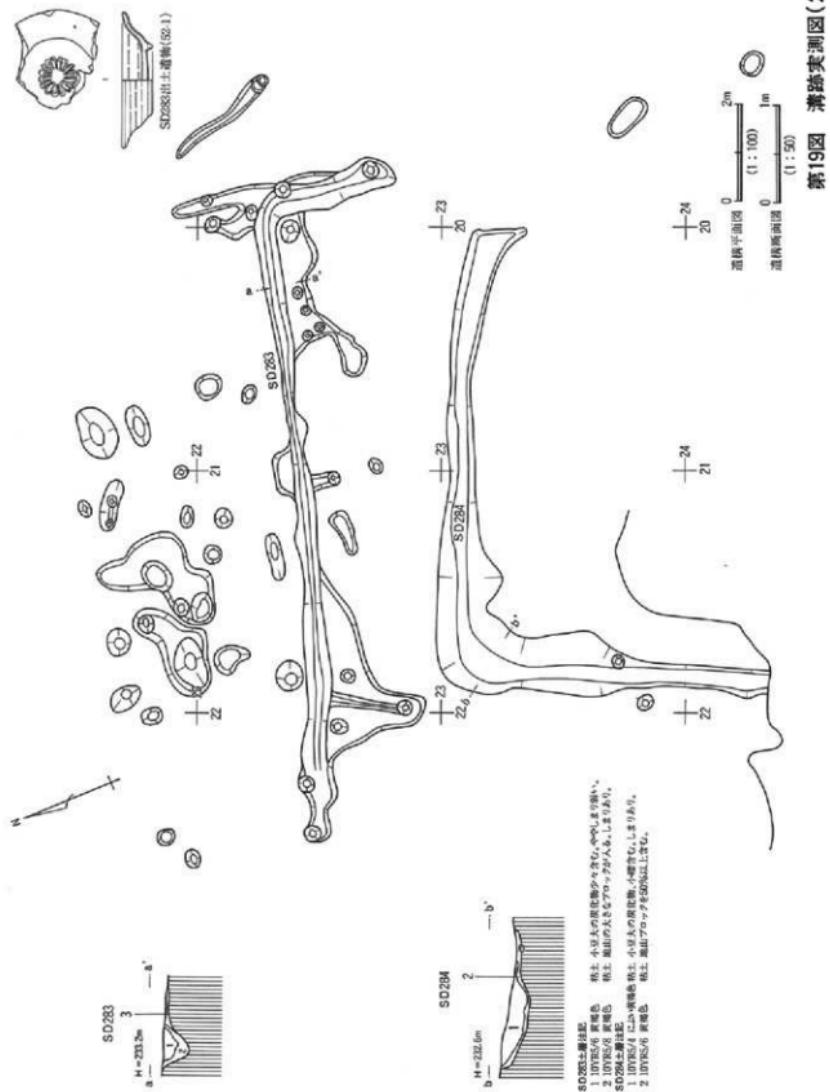
S A341（第32図） 13～15～21グリッド、S B240の1m東側に位置する。柱は6本不定間隔で並ぶ。柱穴は径30～50cmの円形または梢円形を呈する。

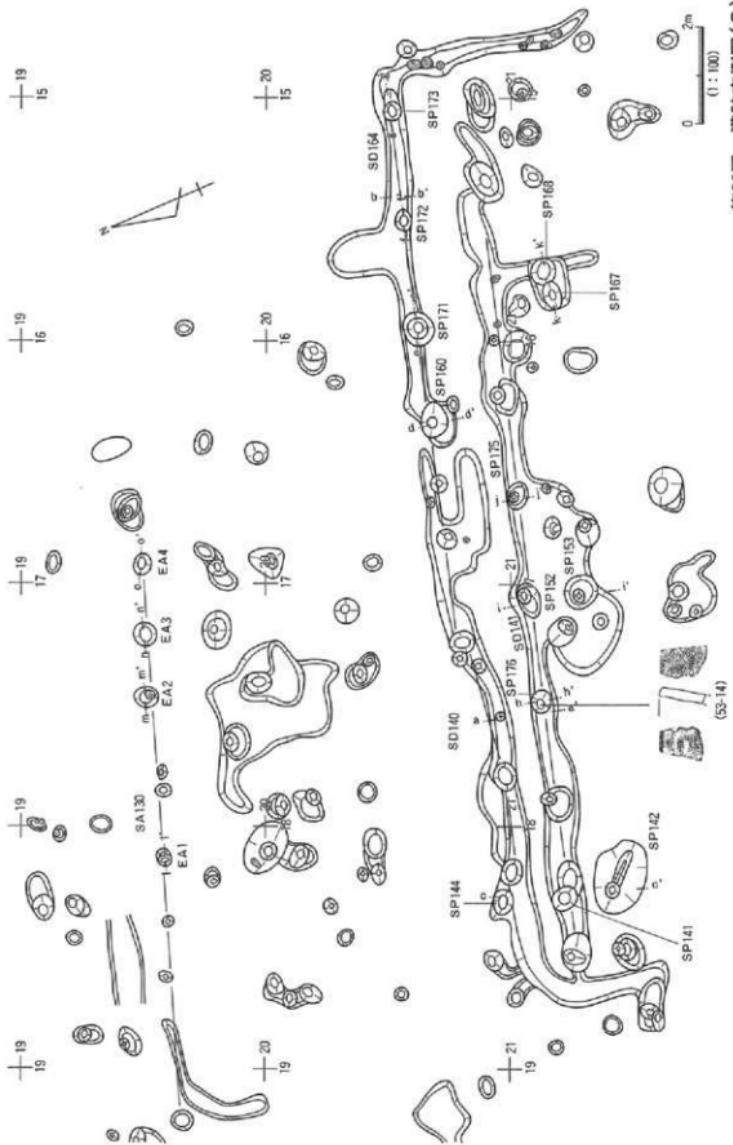
第17図 主郭内溝跡配置図



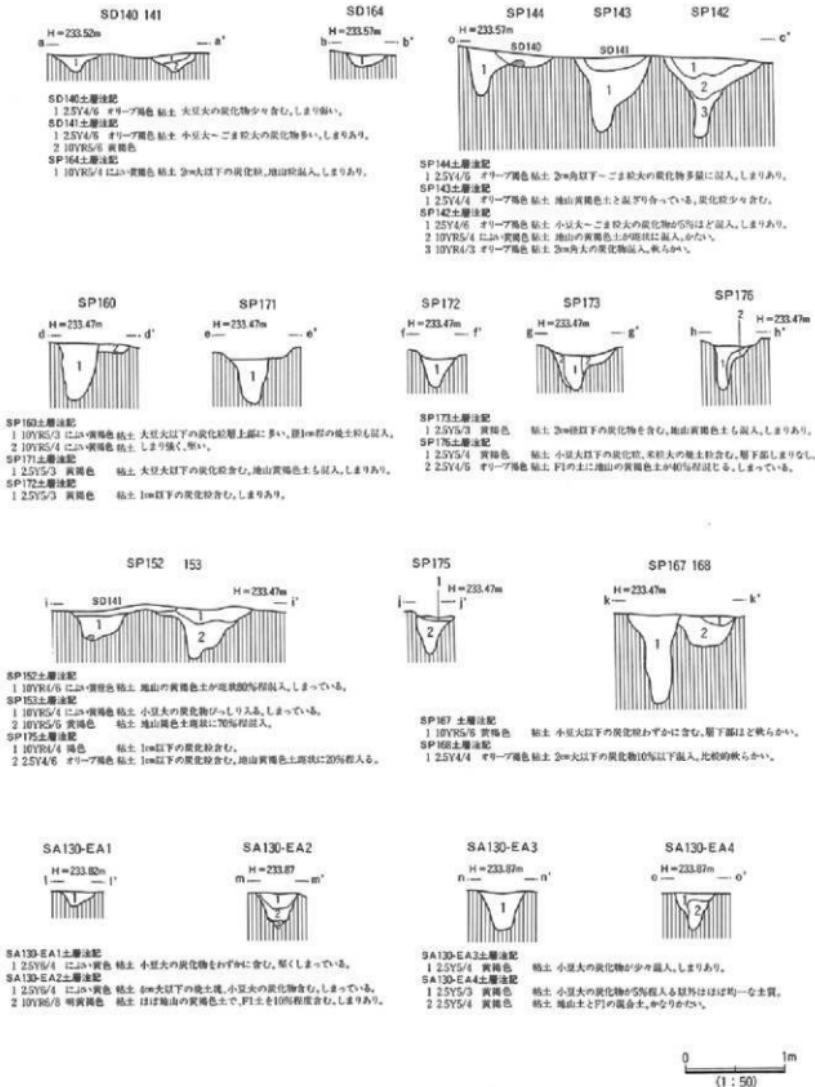


### 検出された遺構

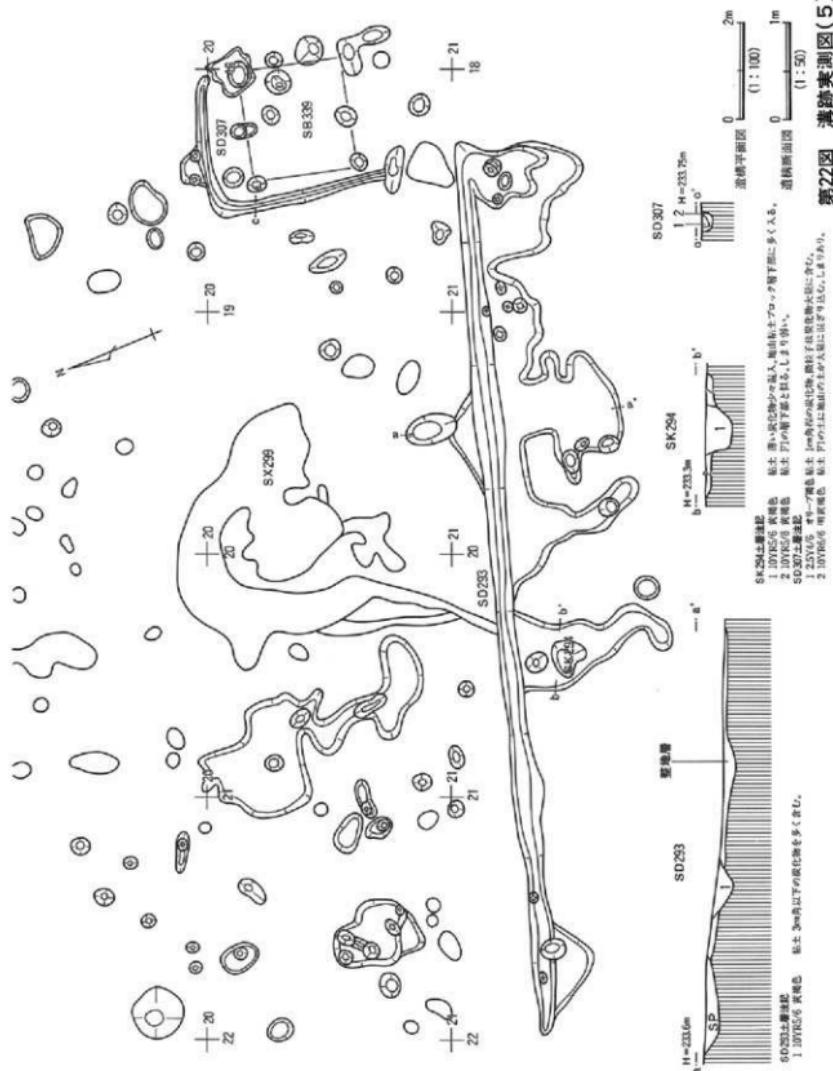


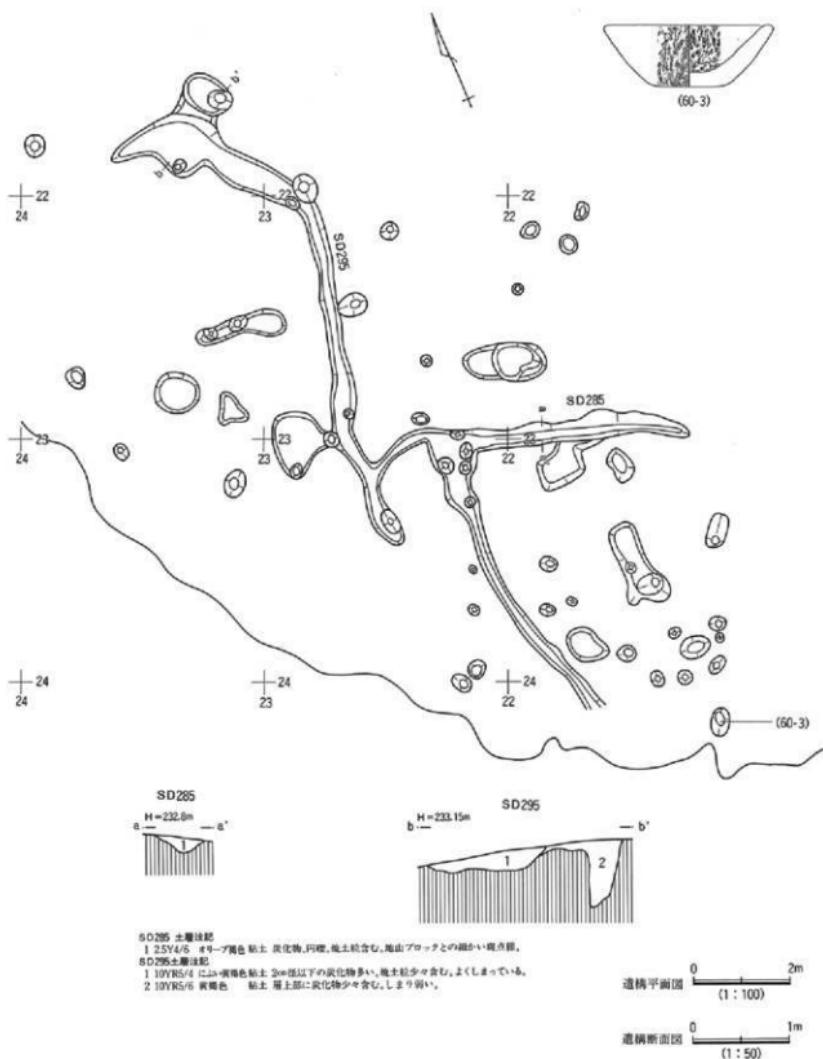


第20図 溝跡実測図(3)



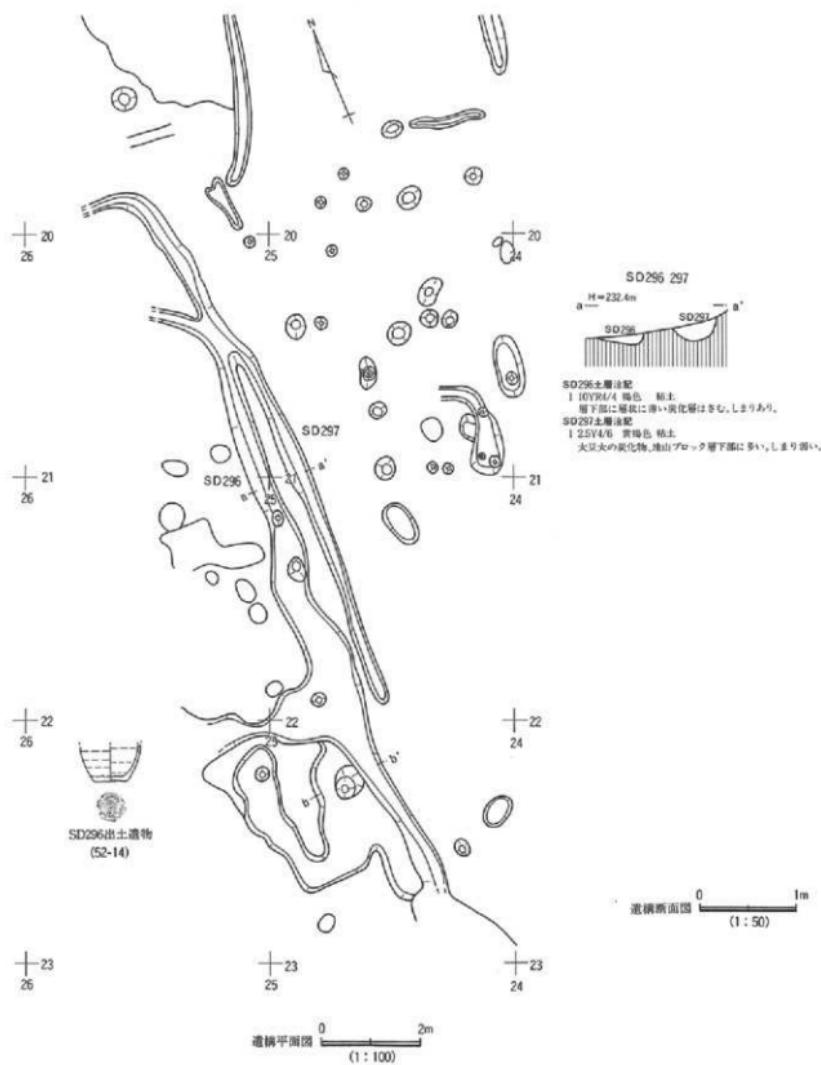
第21図 溝跡実測図(4)



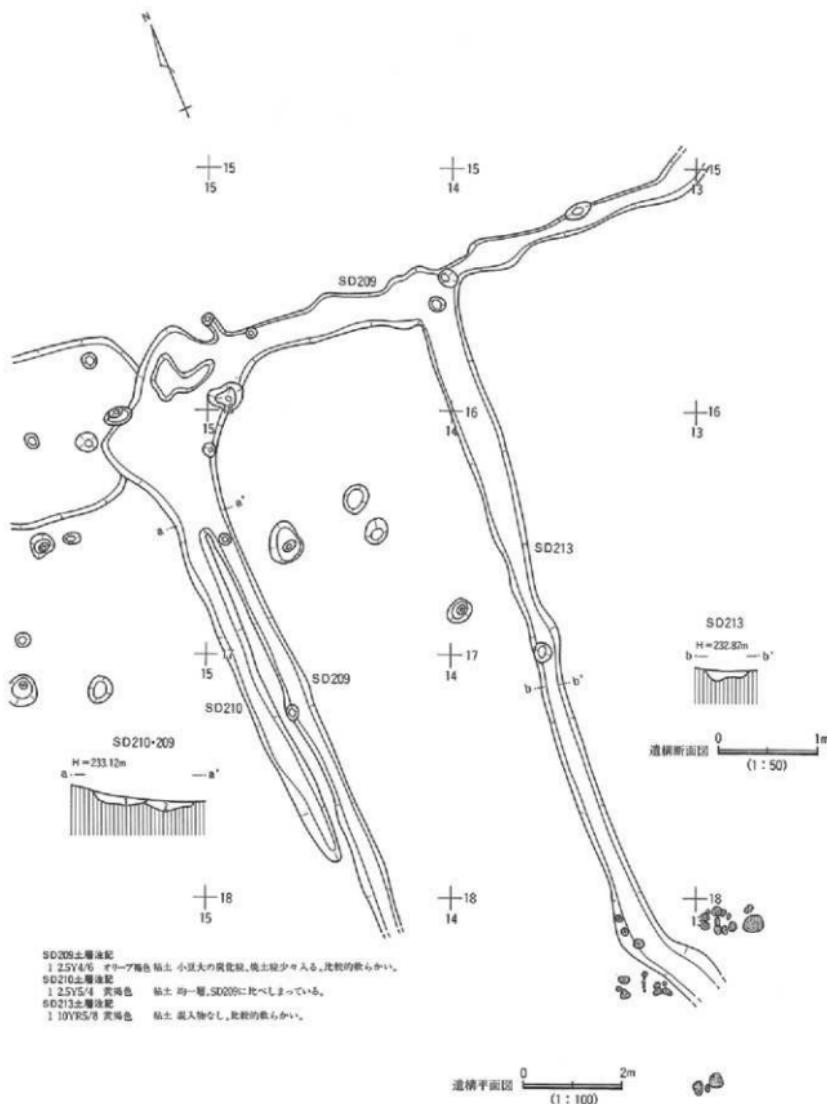


第23図 溝跡実測図(6)

検出された遺構



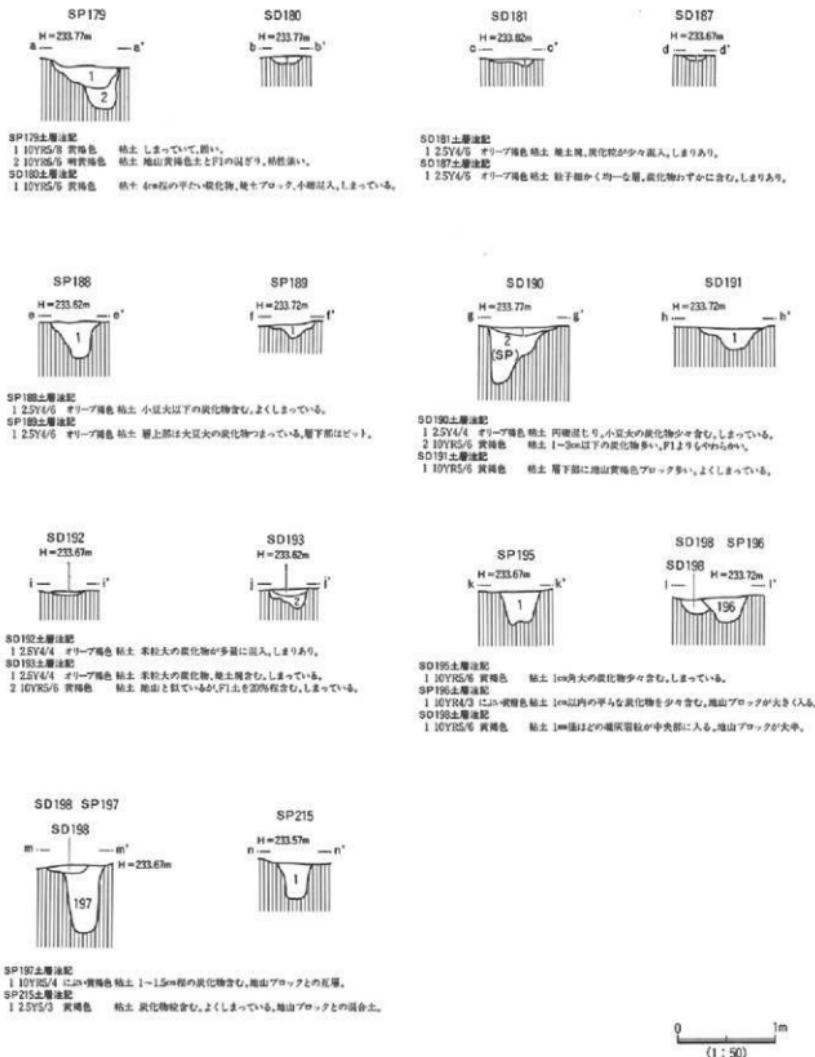
第24図 溝跡実測図(7)



第25図 溝跡実測図(8)

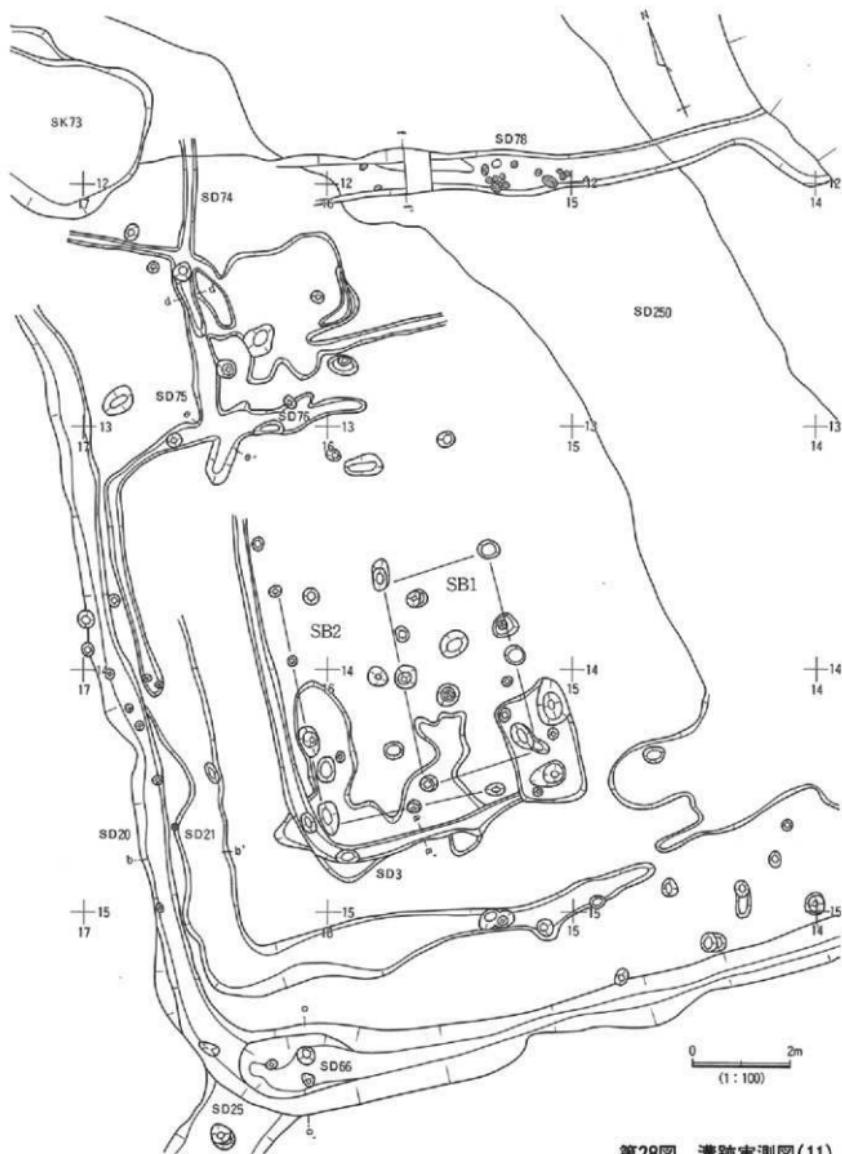
### 検出された遺構



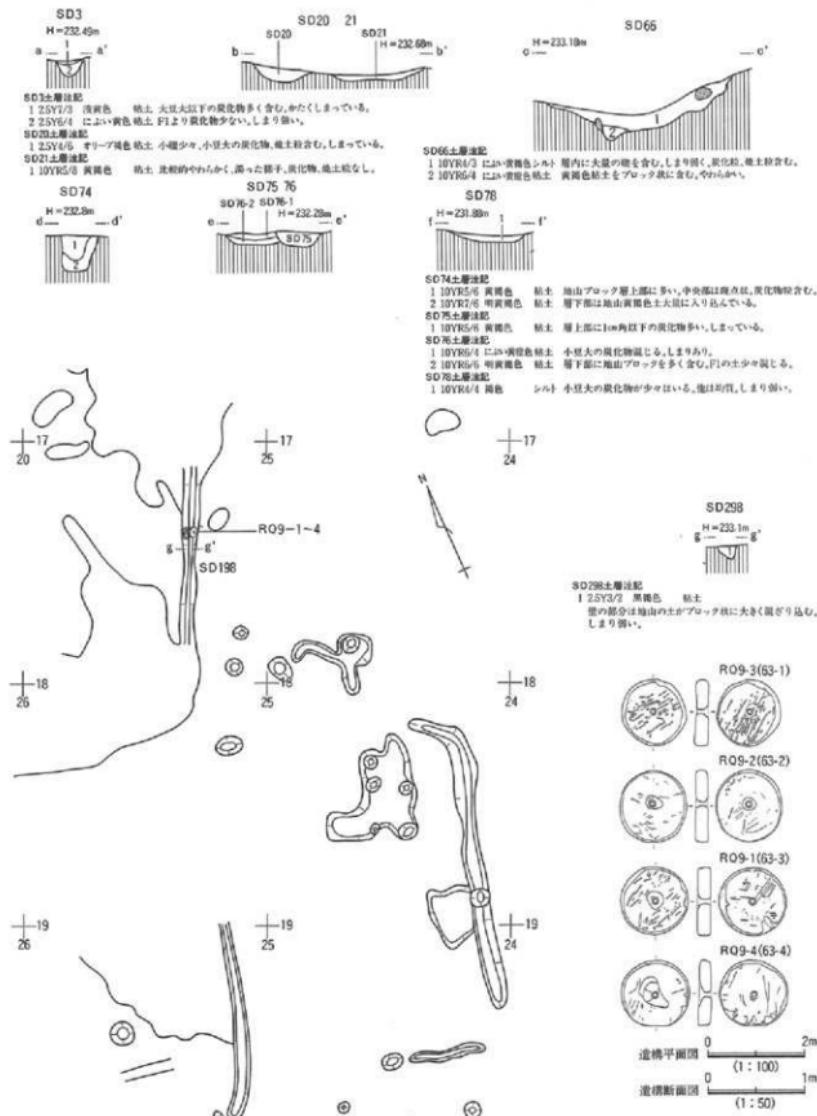


第27図 溝跡実測図(10)

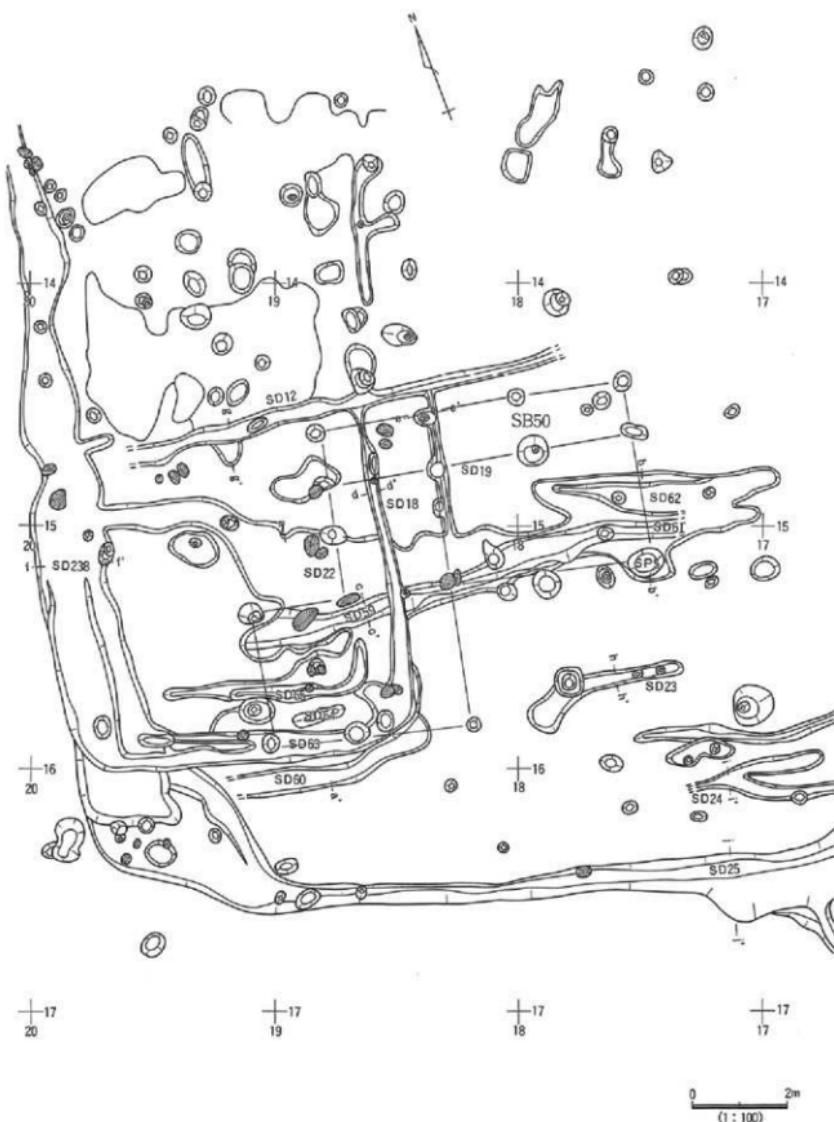
検出された遺構



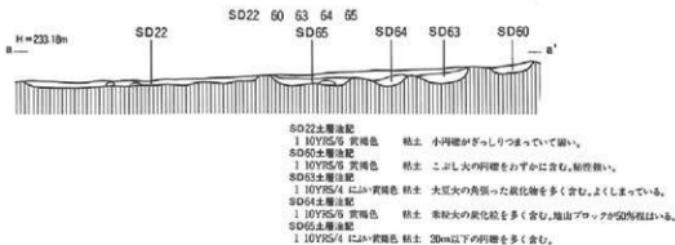
第28図 溝跡実測図(11)



第29図 溝跡実測図(12)



第30図 清跡実測図(13)



**SD61 土層注記**  
1 IOYRS/4 にじ・黄褐色 粘土 平らな炭化物を多く含む。よくしまっている。  
**SD62 土層注記**  
1 IOYRS/4 にじ・黄褐色 粘土 小窓を多く含む。SD61に比べ炭化物は少ない。  
**SP53 土層注記**  
1 2.5YR/3 オリーブ褐色 粘土 2~3mmの大炭化物を5%程度含む。地山ブロッケ20%。  
2 10YR/8 明黄褐色 粘土 しまりあり。堆山土とよく似るが、F1土の小ブロックを含む。

**SD59 土層注記**  
1 IOYRS/4 にじ・黄褐色 粘土 こま細かい炭化物を微細に含む。よくしまっている。  
**SD18 土層注記**  
1 IOYRS/5 黄褐色 粘土 大豆大的炭化物を多少含む。粘性強く、しまりあり。  
2 2.5YR/4 オリーブ褐色 粘土 炭化物をF1と同様に含む。少しモソモソする。

**SD19 土層注記**  
SD18(a')に同じ

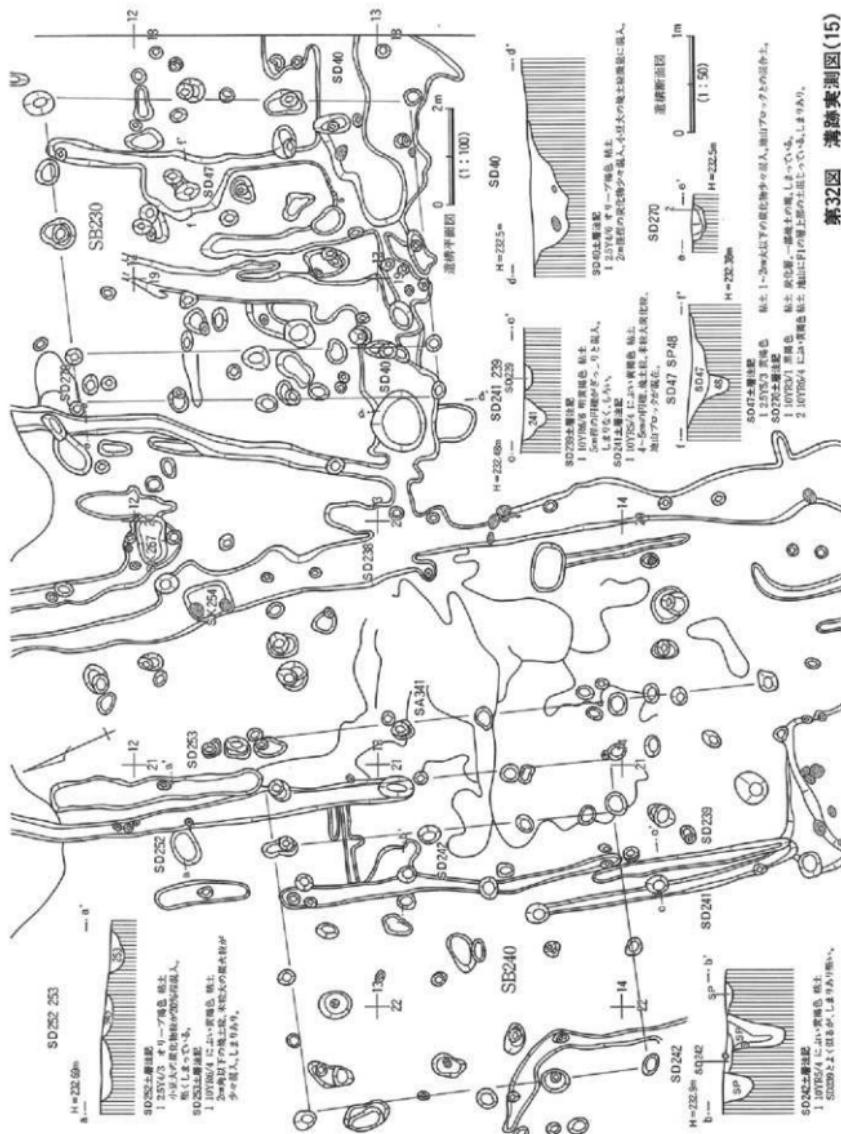
**SD238 土層注記**  
1 IOYRS/4 にじ・黄褐色 粘土 発育絶え、未だ大の炭化物がほとんどなく微細。よくしまっている。  
**SD12 土層注記**  
1 2.5YR/3 淡黄色 粘土 3mm以下の大炭化物が混入。しまり強い。

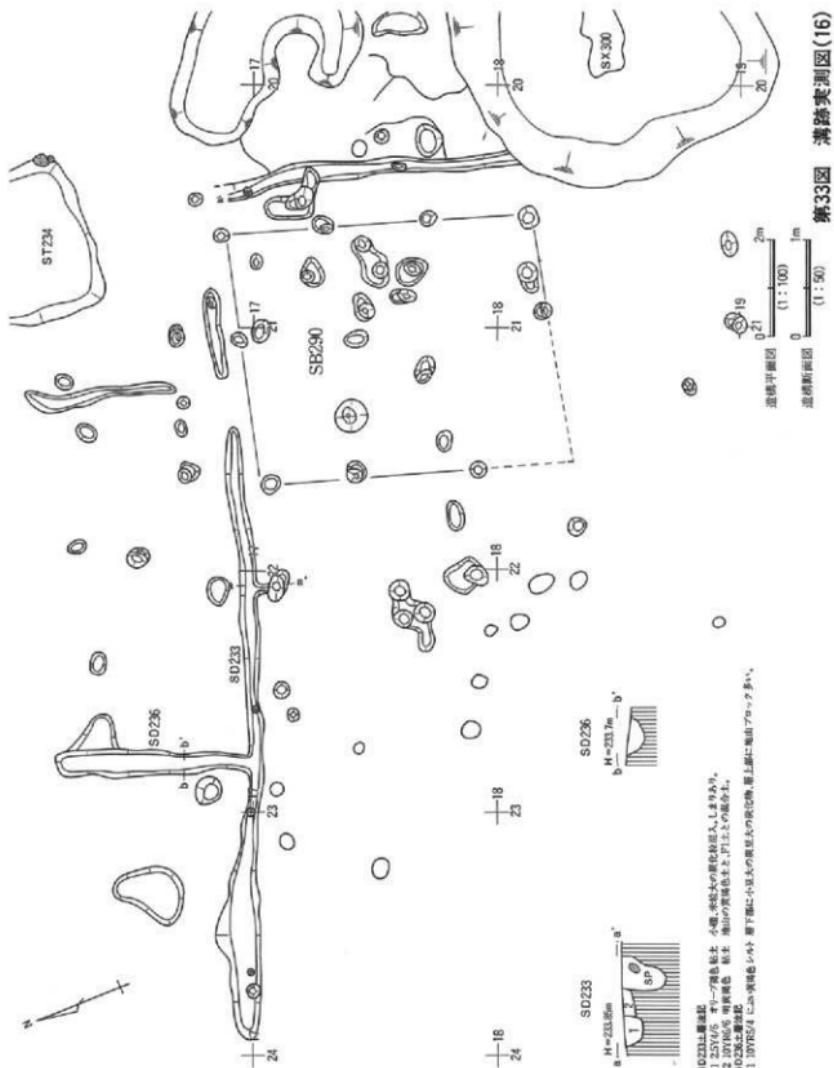
**SD23 土層注記**  
1 10YR/8 黄褐色 粘土 炭化物少々混入。堆山ブロックが大半を占める。  
**SD24 土層注記**  
1 10YR/4 にじ・黄褐色 粘土 小至大の炭化物を少々含む。F2より少々軟らかい。  
2 10YR/8 黄褐色 粘土 堆山の黄褐色土に近い。炭化物少々混入する。

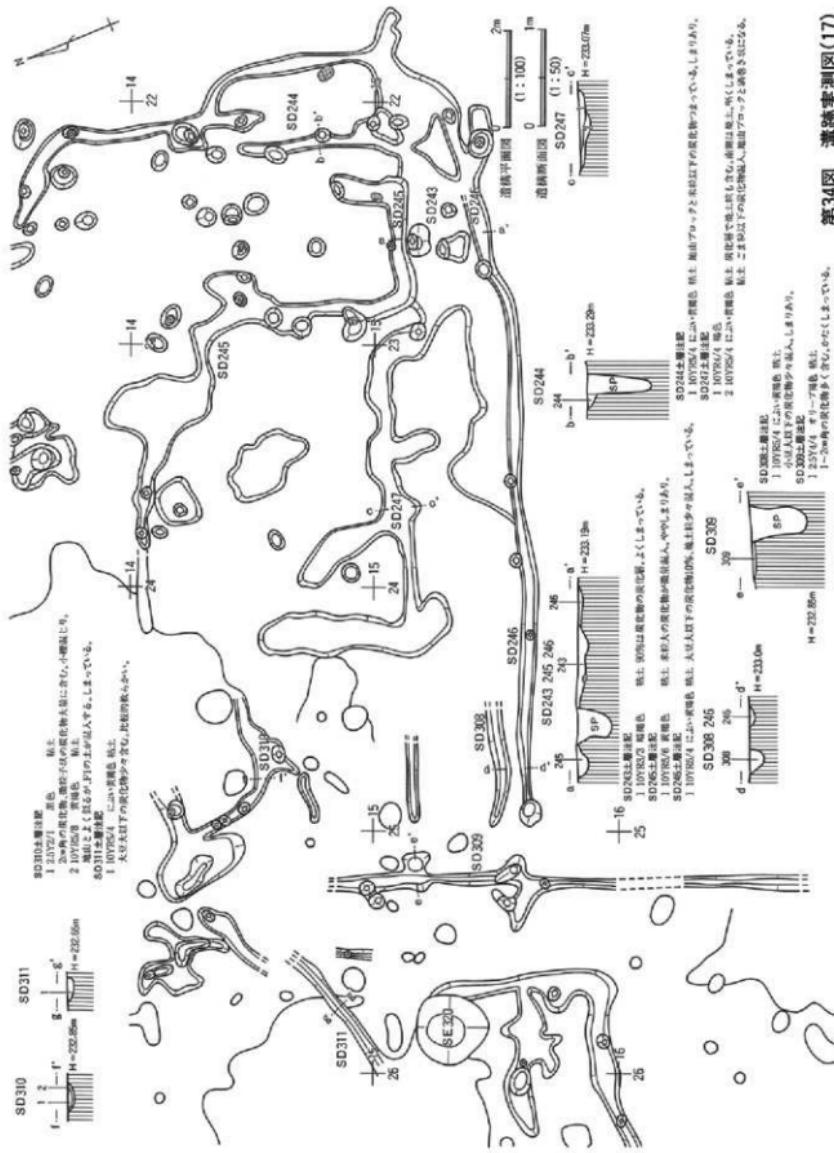
**SD25 土層注記**  
1 IOYRS/4 にじ・黄褐色 シルト 小さい粒状の炭化物が少々混入。柔らかい。  
2 10YR/5 黄褐色 シルト F1よりもわずかに堆山ブロックが多い。柔らかい。  
3 10YR/5 にじ・黄褐色 粘土 均質な土層で炭化物も少ないとしまりあり。

1m  
(1 : 50)

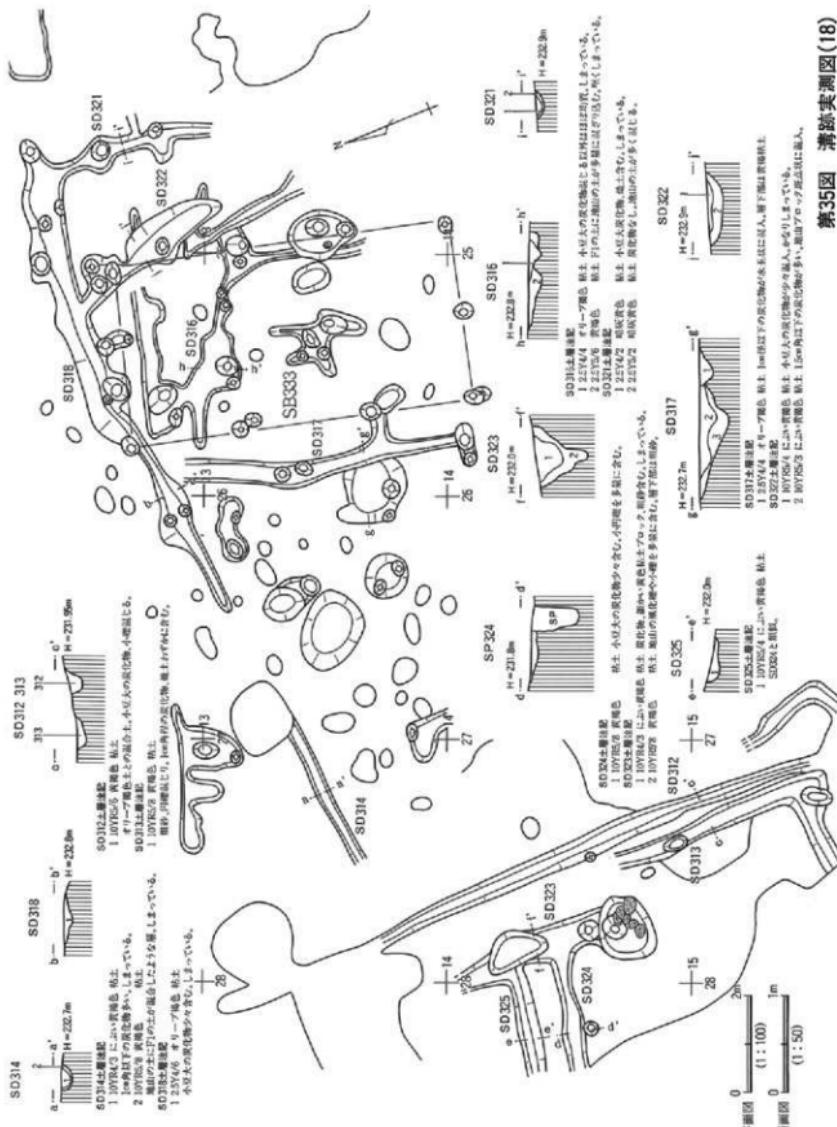
第31図 溝跡実測図(14)







第34図 溝跡実測図(17)



第35図 溝跡実測図(18)

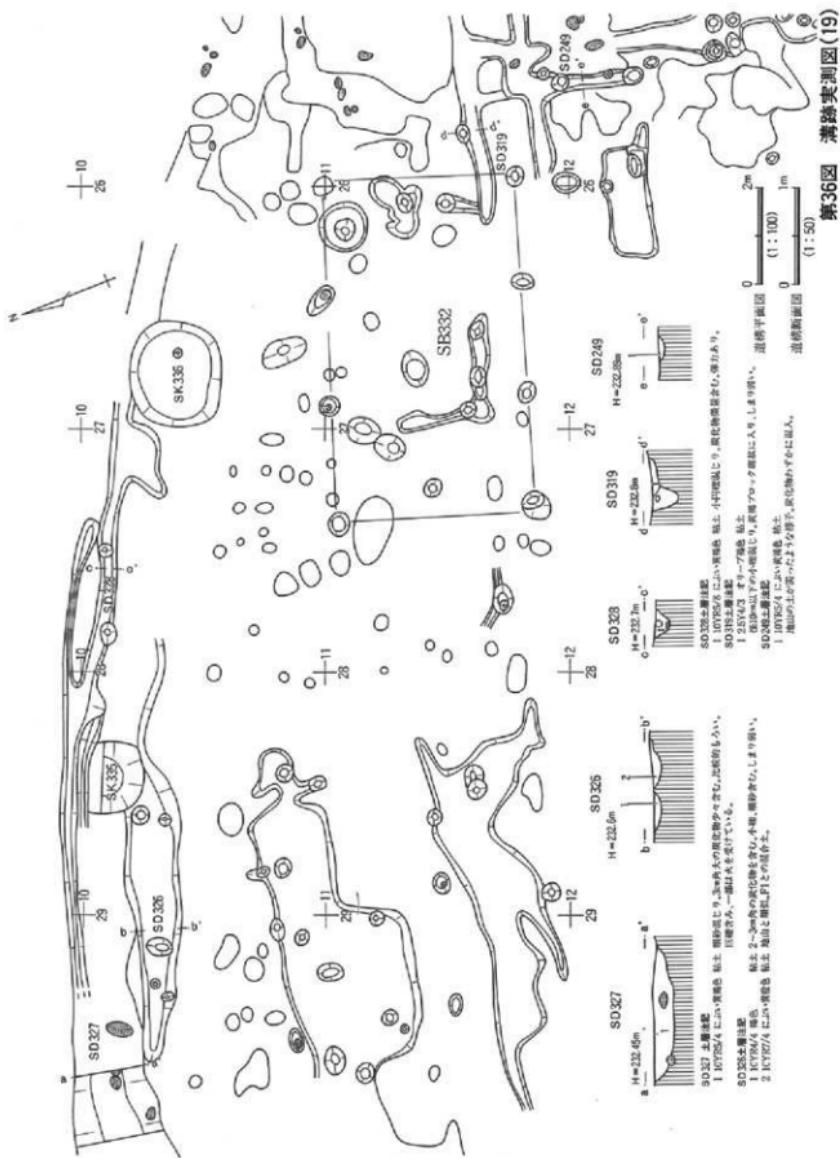


表-1 溝跡観察表 1

| 登録番号  | 押印番号  | 検出地区                  | 計測値(cm) |     |    | 平面形     | 方位                 | 分類     | 備考  |
|-------|-------|-----------------------|---------|-----|----|---------|--------------------|--------|---|
|       |       |                       | 長さ      | 幅   | 深さ |         |                    |        |   |
| SD3   | 28    | 14~15~16~17           | 970     | 42  | 25 | L字型     | N-6°-E<br>W-6°-N   | B-2    | SB2と平行。SB1・2に係わる区画溝か。   |
| SD12  | 30,31 | 15~16~20              | 878     | 40  | 5  | 直線      | W-11°-N            | B-3    | SD18・19と交差。   |
| SD18  | 30,31 | 15~16~19              | 280     | 28  | 7  | 直線(L字型) | N-15°-E            | B-2    | SD19と平行。SD22の床面から検出された溝跡と同一か。                                 |
| SD19  | 30,31 | 15~19                 | 293     | 20  | 2  | 直線      | N-15°-E            | B-1    | SB50EB4-6に切られる。SD22より古い。                                      |
| SD20  | 28,29 | 14~16~17              | 1596    | 60  | 15 | 直線(L字型) | N-6°-E             | A-1(2) | 遺構内の柱穴が並列になる。SD66と交差し「L」字型を呈する。                               |
| SD21  | 28,29 | 14~16~15~17           | 1643    | 120 | 8  | L字型     | N-15°-E<br>W-7°-N  | B-2    | 溝跡内に柱穴本体伴うが、割列にはならない。<br>SD20より新しい。                           |
| SD22  | 30,31 | 15~16~15~16           | 1350    | 240 | 5  | 不定型     | W-20°-N            | C-1    | 性格不明。整地盤か。地表面に溝跡、柱穴あり。唐津陶器片出土。                                |
| SD23  | 30,31 | 16~18                 | 332     | 30  | 6  | 直線      | W-4°-N             | C-2    | 遺構内に柱穴本体伴う。   |
| SD24  | 30,31 | 15~17~17~18           | 250     | 32  | 6  | 直線      | W-5°-N             | C-2    |   |
| SD25  | 30,31 | 16~17~17~20           | 1850    | 135 | 18 | 直線(L字型) | W-23°-N            | A-3(2) | SD66・SD28と交差し「L」字型を呈す。南側が約30cm程高い。<br>遺構内から瀬戸美濃系陶器片、肥前系磁器片出土。 |
| SD40  | 32    | 13~14~18~20<br>(1000) | 147     | 35  |    | 直線      | W-14°-N            | B-2    | SD28と交差し区画を作る溝か。柱穴を伴う。  |
| SD47  | 32    | 12~13~19              | 652     | 33  | 20 | 直線      | N-25°-E            | B-3    | SD40と交差し土壌両側の整地盤へ延びる。   |
| SD69  | 30,31 | 16~18~20              | 780     | 45  | 5  | 直線      | W-5°-N             | B-3    | SD22の床面から横出し。SD18を切る。   |
| SD60  | 30,31 | 15~17~19~20           | 389     | 45  | 5  | 直線      | W-6°-N             | B-3    | 床面から円錐模様。SD63に切られる。   |
| SD61  | 30,31 | 15~16~18              | 310     | 50  | 10 | 直線      | W-15°-N            | B-3    | SD69と同一溝か。SB60の柱穴に切られる。                                       |
| SD62  | 30,31 | 15~17~18              | 519     | 85  | 12 | 直線      | W-20°-N            | B-3    |   |
| SD63  | 30,31 | 16~19~20<br>(335)     | 73      | 15  |    | L字型     | N-15°-E<br>W-15°-N | B-1    | SD28と交差し区画を作る溝か。柱穴を伴う。  |
| SD64  | 30,31 | 16~19                 | 103     | 30  | 11 | 直線      | W-10°-N            | C-2    | SD22に切られる。  |
| SD65  | 30,31 | 16~19~20              | 360     | 38  | 16 | L字型     | W-18°-N<br>N-33°-E | B-2    | SD63と平行にL字型を曲がる。SB50の区画に係わる溝跡か。                               |
| SD66  | 28,29 | 15~16~14~17<br>(1743) | 30      | 40  |    | 直線(L字型) | W-4°-N             | A-3(2) | SD20と交差し「L」字型。南側約30cmほど高い。肥前系磁器片。                             |
| SD74  | 28,29 | 12~13~17              | (405)   | 35  | 37 | 直線      | N-21°-E            | C-2    | SD75と同一溝か。  |
| SD75  | 28,29 | 13~14~17              | 308     | 45  | 15 | 直線      | N-16°-E            | C-2    | SD76を切る。  |
| SD76  | 28,29 | 13~15~16~17           | 995     | 50  | 10 | L字型     | W-6°-N<br>N-6°-E   | B-2    | SB1・2に係わる区画の溝跡。<br>SD21とともに「L」字型を呈する。                         |
| SD78  | 28,29 | 12~13~15~17           | 1367    | 80  | 8  | 直線      | W-17°-N            | B-3    | SD39の整地盤上に検出。SD74に切られる。肥前系青磁片出土。                              |
| SD79  | 28    | 13~17                 | 150     | 40  |    | 直線      | N-10°-E            | C-2    | SD78に切られる。遺構内から瀬戸美濃系陶器片出土。                                    |
| SD82  | 18    | 23~24~9~13            | 2250    | 65  | 14 | 直線      | W-10°-N            | A-1    | 遺構内に柱穴あり。割列になる。北側が約25cmほど高い。                                  |
| SD83  | 18    | 24~25~12~13           | 470     | 180 | 15 | 直線      | N-24°-E            | C-2    | SD62と交差し南側にのびる南北軸の溝。  |
| SD84  | 18    | 23~24~12~13           | 298     | 54  | 15 | 直線      | N-25°-E            | C-2    | 中央に柱穴基もあり。同様の小溝が北側に並ぶ。  |
| SD86  | 18    | 22~23~12~13           | 2030    | 36  | 8  | 直線      | W-3°-N             | A-3    | 北側が約25cmほど高い。SD82とはほぼ同じ方向にのびる。                                |
| SD100 | 18    | 22~10~11              | 803     | 40  |    | 直線      | W-6°-N             | A-1    | 柱穴3基が不規則であるが並ぶ。樹列。  |
| SD118 | 20    | 20~19~20              | 352     | 32  | 6  | 直線      | W-0°-              | C-2    |   |
| SD121 |       | 20~19                 | 196     | 58  | 6  | 直線      | W-14°-N            | C-2    |   |
| SD140 | 20,21 | 21~22~15~19           | 1446    | 45  | 11 | L字型     | N-10°-E<br>W-12°-N | B-1    | 遺構内に溝50cm前後の柱穴が並び、重複になる。<br>SD141と平行。SD164へと連続する溝跡か。          |
| SD141 | 20,21 | 21~22~16~19           | 1750    | 48  | 8  | 直線      | W-14°-N            | B-1    | 溝内柱穴SP176より瓦質土器片出土。青磁片出土。                                     |
| SD164 | 20,21 | 21~22~15~17           | 1193    | 44  | 11 | L字型     | N-6°-E<br>W-12°-N  | B-1    | 遺構内に柱穴が4基2m間隔で並ぶ樹列。<br>SD140と連続する溝跡か。                         |
| SD166 | 26,27 | 17~19~18~19           | 805     | 23  | 8  | 直線      | N-11°-E            | B-1    | SB110と同じ主軸。建設跡と係わる区画溝か。                                       |
| SD161 | 26,27 | 18~18~19~19           | 250     | 45  | 8  | 直線      | W-6°-N             | B-3    | 遺構内に柱穴を伴う。SD180と直交する。   |
| SD165 | 26,27 | 17~18~18              | 335     | 65  | 40 | 直線      | W-19°-N            | B-1    | 遺構内に柱穴を伴う。建設跡と係わる区画溝か。  |
| SD167 | 26,27 | 18~17~18              | 520     | 20  | 5  | 直線      | N-22°-E            | B-1    | SD185・SD191・SD190と直交する。建物に関する区画か。                             |
| SD168 | 26,27 | 18~17~18              | 535     | 70  | 9  | 直線(へ字型) | W-14°-N            | B-1    | 径25~30cmの柱穴5基が130cm間隔で並ぶ柱列になる。                                |
| SD191 | 26,27 | 18~17~18              | 256     | 35  | 13 | 直線      | W-13°-N            | B-3    | SD187・183と交差。建物跡と関係する区画か。                                     |
| SD192 | 26,27 | 18~17~17              | 330     | 37  | 4  | 直線(へ字型) | E-40°-N            | B-2(3) | SD190と連続し「へ」字型になる溝跡か。SD183と交差する。                              |
| SD193 | 26,27 | 18~17~17              | 632     | 40  | 20 | 直線      | N-17°-N            | B-1    | SD191を切り、SD21につながる。遺構内に柱穴があり柱列になる。                            |
| SD198 | 26,27 | 18~15~17              | 998     | 40  | 6  | 直線      | W-12°-N            | B-1    | 溝内に溝60cm前後の柱穴4基220cm間隔で並び柱列になる。                               |
| SD209 | 25    | 16~19~14~15<br>(2400) | 50      | 10  |    | L字型     | N-8°-W<br>W-0°-    | A-2    | 「L」字型を呈する区画溝で、SD210と平行。                                       |
| SD216 | 25    | 18~15~17              | (750)   | 57  | 10 | 直線      | N-8°-W             | A-3    | 西側が約20cmほど高い。   |
| SD213 | 25    | 16~19~14~15           | 1595    | 45  | 10 | 直線      | N-3°-E             | A-3    | 西側に段差があり、約10cmほど高い。SD209と交差する。                                |

表-2 溝跡観察表 2

| 登録番号   | 押送番号  | 検出地区        | 計測値(cm) |     |    | 平面形     | 方位                   | 分類     | 備考   |
|--------|-------|-------------|---------|-----|----|---------|----------------------|--------|--|
|        |       |             | 長さ      | 幅   | 深さ |         |                      |        |  |
| SD2333 | 38    | 17~23~24    | 1262    | 30  | 17 | 直線      | W-21° -N             | B-3    | SD236と交差。戸戸美濃系陶器片出土。                             |
| SD2336 | 33    | 17~23       | 395     | 39  | 16 | 直線      | N-22° -E             | B-3    | SD233と直交する区画溝か。                                  |
| SD235  | 26,29 | 13~16~20~21 | 2352    | 142 | 18 | 直線(L字型) | N-11° -E             | A-2    | SD25と交差しL字型になる。西側が一番高い。                          |
| SD239  | 32    | 14~15~22    | 415     | 28  | 8  | 直線      | N-10° -E             | B-3    | ST234に切られる溝跡か。                                   |
| SD241  | 32    | 14~15~22    | 543     | 45  | 22 | 直線      | N-6° -E              | B-1    | 造跡内に柱穴が3基約250cm間隔で並び、柱列になる。                      |
| SD242  | 32    | 13~14~22    | 705     | 40  | 6  | 直線      | N-13° -E             | B-1    | 径20~40cmの柱穴が150~200cm間隔で並ぶ溝跡。                    |
| SD243  | 35    | 14~16~22~24 | (1950)  | 85  | 11 | 不定形     | N-14° -E<br>W-20° -N | C-1    | 性格不明。床面よりSD245+246などを検出。<br>整地層と重複する溝か。          |
| SD244  | 35    | 15~16~23    | 352     | 15  | 8  | 直線      | N-15° -E             | C-2    | SD243と交差する。                                      |
| SD245  | 35    | 14~16~23~24 | (1250)  | 30  | 10 | L字型     | W-40° -N<br>N-16° -E | B-2    | SD243床面より検出。造<br>構内に斜面に結びつかない柱穴を伴う。              |
| SD246  | 35    | 16~23~25    | 1067    | 40  | 4  | 直線      | W-20° -N             | B-3    | SD243床面より検出。SD308と平行。                            |
| SD247  | 35    | 15~16~23~25 | 1150    | 80  | 10 | L字型     | W-16° -N<br>N-14° -E | B-2    | 覆土内から肥前系磁器片出土。                                   |
| SD250  | 26    | 11~15~23~25 | 4850    | 250 |    | へ字型     | W-18° -N<br>N-29° -W | B-2    | 織が多数配されている。小糸・土坑などを伴う溝跡になる。<br>石臼・漬物・米漬系土器片出土。   |
| SD252  | 32    | 12~14~22    | 806     | 45  | 8  | 直線      | N-17° -E             | B-3    | SB240の柱穴2本に切られる。土屋南側の整地層上まで続く。                   |
| SD253  | 32    | 12~13~23    | 447     | 45  | 15 | 直線      | N-19° -E             | C-2    | SD252に切れる。                                       |
| SD270  | 32    | 12~13~20    | 843     | 36  | 14 | 直線      | N-95° -E             | B-3    | SD49と交差し土屋南側の整地層へ延びる。SD47と平行。                    |
| SD283  | 19    | 23~22~29    | 1580    | 80  | 26 | L字型     | W-14° -N<br>N-4° -E  | B-2    | 整地層を切っている。SD293と主軸が同じ区画溝。<br>覆土内から戸戸美濃系陶器片花文皿出土。 |
| SD284  | 19    | 25~24~19~21 | 1512    | 145 | 20 | L字型     | N-23° -E<br>W-21° -N | B-2    | 主郭南側の整地層に切られる。                                   |
| SD285  | 23    | 23~25~22~23 | 1138    | 49  | 16 | L字型     | N-12° -W<br>W-20° -N | B-2    | 主郭南側の整地層に切られる溝跡か。                                |
| SD293  | 22    | 22~21~24    | 1843    | 60  | 19 | 直線      | W-17° -N             | B-3    | 造跡脇の整地層を切って作られている。                               |
| SD295  | 23    | 22~24~23~24 | 1120    | 62  | 20 | へ字型     | N-7° -E<br>N-33° -W  | B-1    | 柱穴が4基間隔は不定であるが並ぶ。横列になる。                          |
| SD296  | 24    | 21~23~25~26 | 1635    | 47  | 10 | 直線      | N-0°                 | A-3    | 東側が15~20cmほど高い。戸戸美濃系陶器茶入れ出土。                     |
| SD297  | 24    | 20~22~25~26 | 1043    | 47  | 18 | 直線      | N-2° -W              | A-3    | 東側に段落あり。SD298と平行。                                |
| SD298  | 29    | 18~26       | 360     | 20  | 14 | 直線      | N-24° -E             | B-3    | 戸車が4点まとめて出土している。                                 |
| SD307  | 22    | 20~21~21    | 652     | 20  | 12 | L字型     | N-9° -E<br>W-14° -N  | B-2    | SB339を囲むようにL字型に曲がる。                              |
| SD308  | 34    | 16~25       | 248     | 25  | 15 | 直線      | W-22° -N             | B-3    | SD246と平行。  |
| SD309  | 34    | 15~17~26    | 947     | 35  | 3  | 直線      | N-23° -E             | B-3    | SD296と同じ主軸。SD246と係わって区画を表す溝跡か。                   |
| SD310  | 34    | 15~25~26    | 497     | 30  | 6  | へ字型     | N-23° -W<br>W-0°     | C-2    | 造跡内に柱穴を伴うが横列には結びつかない。                            |
| SD311  | 34    | 15~26       | 293     | 25  | 7  | 直線      | W-16° -S             | B-3    | SB333の区画に係わる溝跡か。                                 |
| SD312  | 35    | 14~16~26    | 1135    | 25  | 13 | 直線      | N-3° -W              | B-3    | SD318と係わり、SB332の区画を表す溝跡になる。                      |
| SD313  | 35    | 15~16~26    | 567     | 33  | 8  | L字型     | N-0°<br>W-0°         | B-2    | SD312と平行。南側整地層につながる。                             |
| SD314  | 35    | 14~27~26    | 344     | 28  | 10 | 直線      | W-5° -S              | B-3    | SD318と同一溝跡。                                      |
| SD315  | 35    | 13~14~26    | 950     | 42  | 14 | へ字型     | W-10° -S<br>N-28° -W | C-2    |  |
| SD317  | 35    | 13~14~26    | 603     | 33  | 14 | 直線      | N-17° -E             | B-2    | 造跡内に柱穴を伴うが横列には結びつかない。                            |
| SD318  | 35    | 13~14~25~27 | 1078    | 56  | 9  | 直線      | W-5° -S              | B-3    | SD321+322と交差する。SB333の区画を表す溝跡か。                   |
| SD319  | 36    | 12~23~25    | (960)   | 44  | 8  | 直線      | W-10° -N             | B-3    | 東側が土屋南側の整地層に切られる。                                |
| SD321  | 35    | 13~25       | 350     | 30  | 8  | 直線      | N-5° -E              | B-3    | SD318と交差。柱穴2基が床面から検出されている。                       |
| SD322  | 35    | 13~14~25~26 | 353     | 75  | 17 | 直線(L字型) | N-18° -E             | B-3(2) | SD321とつながりL字型の溝跡になるか。SB333に係わる溝跡か。               |
| SD323  | 35    | 15~26       | 405     | 65  | 53 | 直線      | N-5° -E              | B-3    | SD324+325と交わる。性格不明の土坑に切られる。                      |
| SD324  | 35    | 15~28~29    | 260     | 52  | 6  | 直線      | W-15° -N             | B-3    | SD321と交わる。主郭西側の整地層下に続く。                          |
| SD325  | 35    | 15~28~29    | 206     | 45  | 8  | 直線      | W-15° -N             | B-3    | SD323と交わる。SD324と主軸同じ。                            |
| SD326  | 36    | 11~25~28    | 868     | 95  | 8  | 直線      | W-21° -N             | A-3    | SK335に切られる。土壟下の溝跡。                               |
| SD327  | 36    | 10~11~26~29 | 1520    | 138 | 20 | 直線      | W-22° -N             | A-3    | 土壟下の溝跡。覆土内に多款含む。                                 |
| SD328  | 36    | 11~26       | 325     | 30  | 15 | 直線      | W-26° -N             | A-3    | 土壟下の溝跡。SK326に切られる。                               |
| SD329  | 36    | 11~23~24    | (900)   | 70  |    | 直線か     | W-32° -N             |        | 3トレンチ東面に断面あり。土壟下の溝跡。                             |

## (4) 土坑・井戸跡 (第37・38図)

主郭内で検出した土坑は8基、井戸跡は1基である。以下、これらについて概述する。

S K 73 (第37図) 12~13~18グリッド、主郭北部の整地層下から検出された。西側は木根により擾乱を受けている。長軸406cm以上、短軸382cmの不定形の土坑である。北側に幅30~50cmの張り出し部を持つ。検出面からの深さは40cm前後で、壁はほぼ垂直に掘りこまれ、床面はほぼ平坦である。覆土は3層からなり、1層は、主郭北側一帯を覆っている整地層である。本遺跡の中では最も規模の大きな土坑であるが、中世の遺物は出土していないため、その性格は把握できない。持ち込まれたものと考えられる石匙(50-1)が覆土内から出土している。

S K 254 (第37図) 13~21グリッド、S D 238内から検出されている。平面形は長辺91cm、短辺72cmの方形形状を呈する。検出面からの深さは、約30cm前後である。S K 254の覆土の上にS D 238の覆土が被さっていることから、溝より先に土坑が作られたことが伺える。壁はほぼ垂直に掘られ、床面は平坦である。床面から径25cm前後の礫が2点検出されている。

S K 269 (第37図) 12~13~20~21グリッドから検出された。北側は整地層下にのびる溝跡に続いている。平面形は長軸122cm、短軸109cmの不整円形を呈する。検出面からの深さは16cm前後である。覆土は2層からなり、壁は端部がスロープ状に落ち込み、中央部が一段深くほぼ垂直に落ち込む。中央部の落ち込みは平面形が長方形形状を呈しており、長軸の両端部には礫が配されている。

S K 45 (第37図) 13~18~19グリッド、主郭北部の整地層下から検出された。平面形は長辺、短辺ともに100cm前後の隅丸方形を呈する。検出面からの深さは45cmを測る。覆土は単一層で、全体的に黒ずむほど細かい炭化粒が含まれている。床面はほぼ平坦で、径20cmの礫が検出されている。

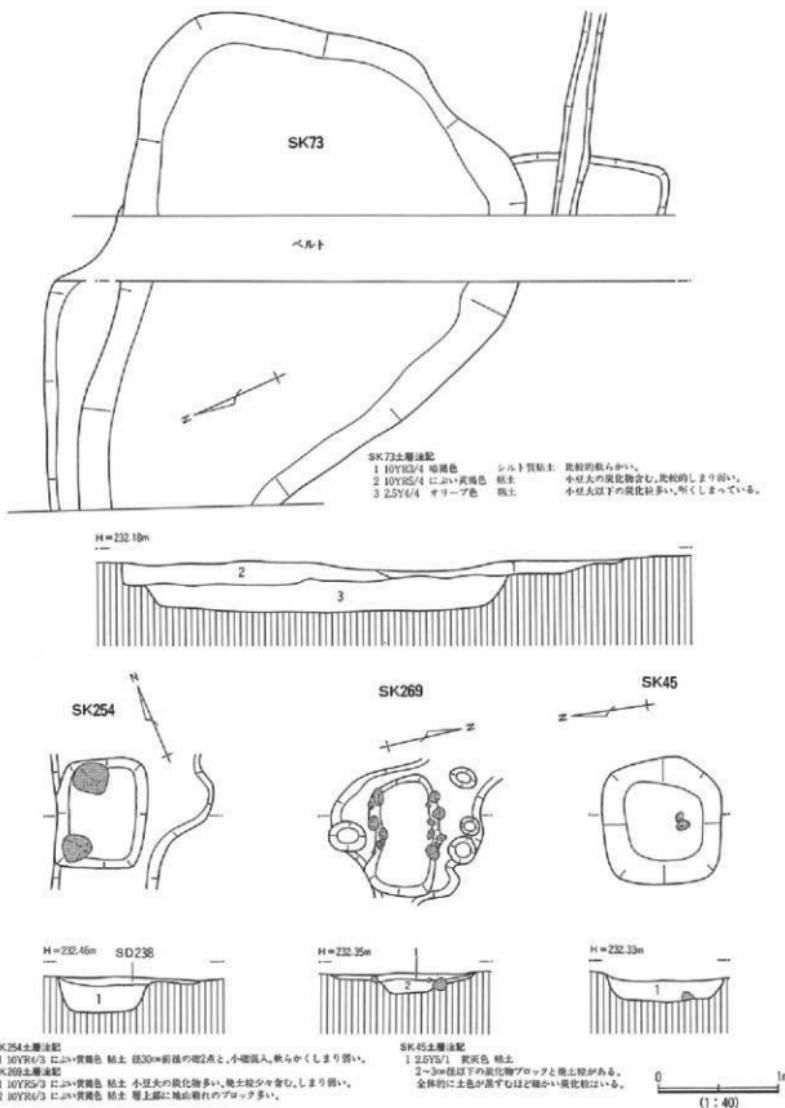
S K 335 (第38図) 11~27グリッドで検出された。平面形は長辺155cmの不整円形である。北半部がS D 328に切られ、南側はS D 327を切っている。検出面からの深さは14cm前後であり、壁はスロープ状に落ち込む。覆土は単一層で、覆土内には人為的に埋められたと考えられる径15~50cmの礫がぎっしりと詰まっている。

S K 336 (第38図) 11~25グリッドで検出された。平面形は径218cmの不整円形である。検出面からの深さは26cm前後であり、壁はスロープ状に落ち込む。覆土は単一層で、西側に径10~35cmの礫がかたまっている。S K 335と性格が似ている土坑である。

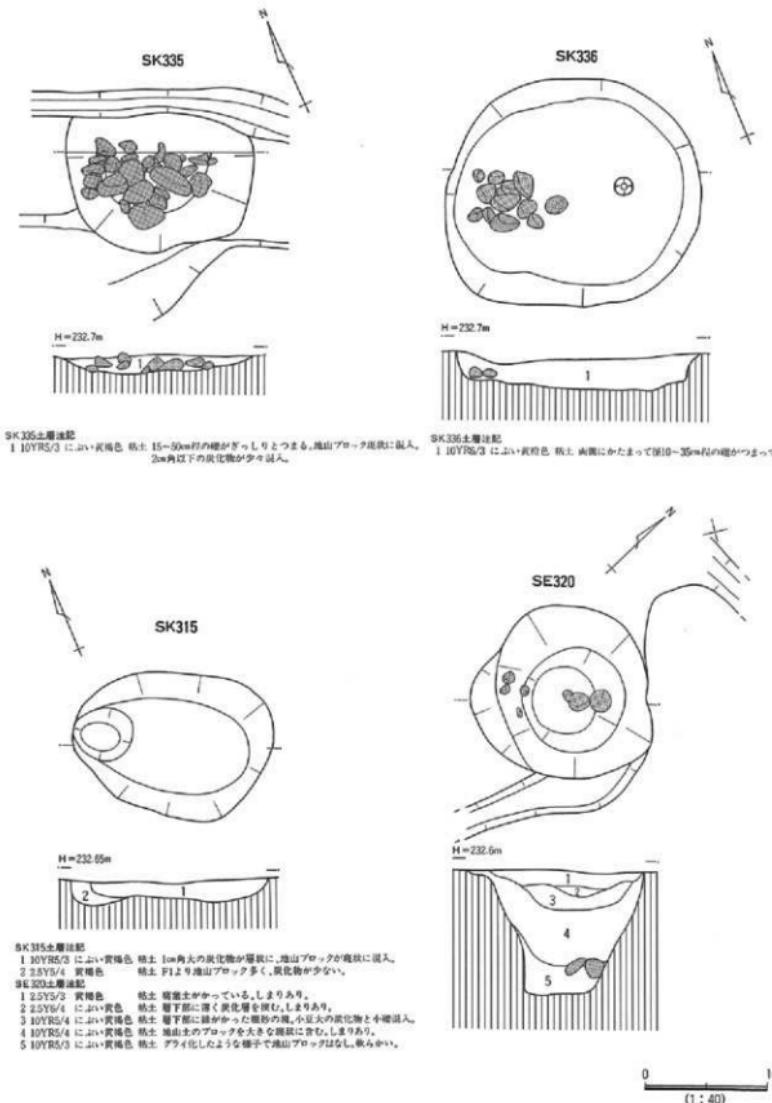
S K 315 (第38図) 14~27グリッドで検出された。平面形は長軸164cm、短軸119cmの楕円形である。検出面からの深さは15~20cm前後である。覆土は2層で、壁はスロープ状に落ち込む。西側に一段低い落ち込みがある。

S E 320 (第38図) 16~26グリッドで検出された素掘りの井戸である。周囲には主郭西端部の整地層が広がっている。平面形は径141cm前後の不整円形である。東側は溝跡を切っている。検出面からの深さは101cmを測る。南壁は掘り方途中に段を形成して掘り下げられ、北壁はスロープ状に落ち込む。床面は平坦である。覆土は5層からなり、F 5の上層部には礫が含まれている。出土遺物は認められない。

検出された遺構



第37図 土坑実測図(1)



第38図 土坑実測図(2)、井戸跡実測図

## 2 土壘と空堀（第39～45図）

睦合館は、主郭と尾根続きを遮断するため、三重の土壘と空堀を構築している。調査では土壘と空堀の西半部は調査区外にかかるため、東半部を中心に8本のトレンチを設定し調査を行った。ここでは、その結果について概述する。

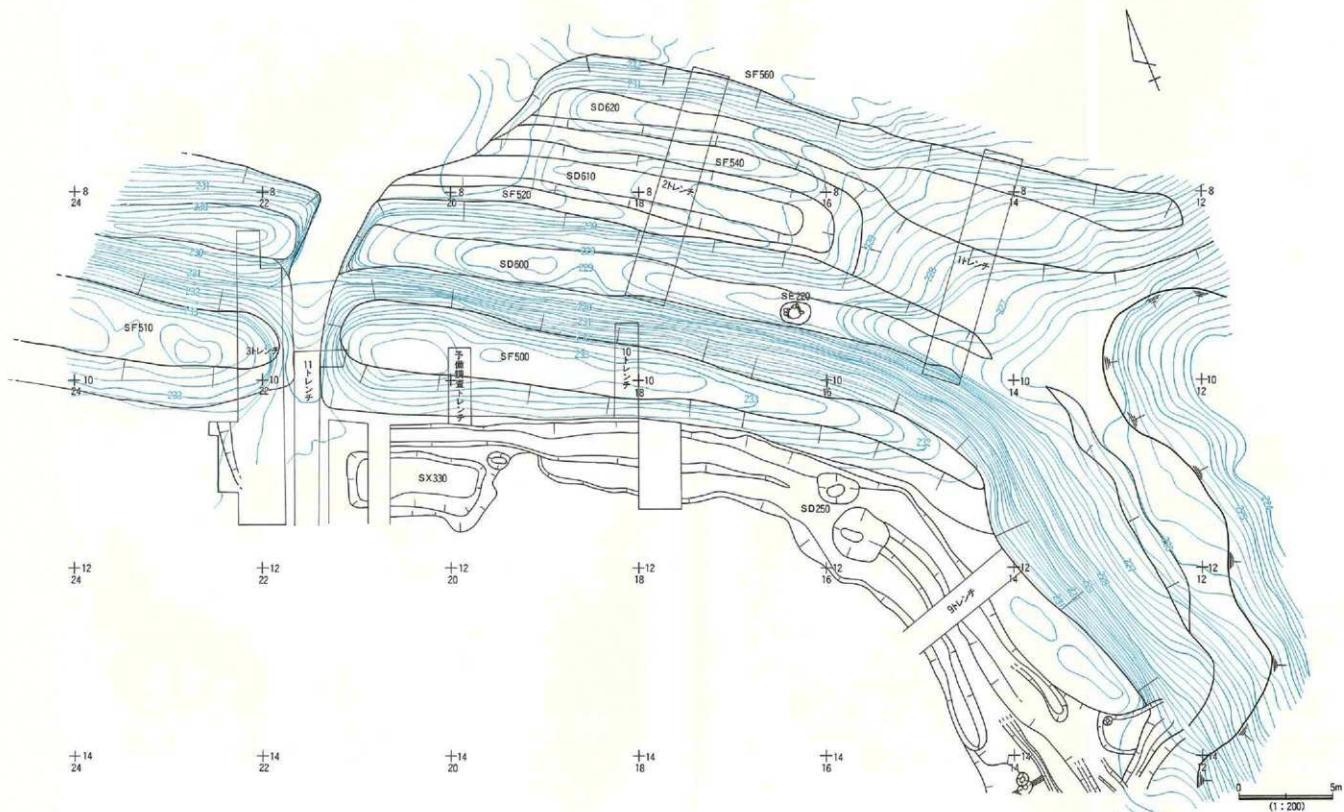
S F 500・510 9～12-14～29グリッド、主郭北側に位置する。22-10グリッド付近で掘手に続く土橋により分断されるが、本来は一続きの土壘であったと考えられる。全長は91m、主郭からの比高差1.4m、S D 600空堀からの比高差は約5m前後を測る。ここでは現況の土橋部分である9～12-22～23グリッドに3トレンチ（第41図）、主郭西端部の11～30グリッドに12トレンチ（第42図）、10～11-19グリッドに10トレンチ（第42図）、11-22グリッドに11トレンチ（第41・43図）、計4本のトレンチを設定した。

S F 500・510は空堀側からの盛土と、主郭側からの盛土により構築されている。3トレンチ東面9層（以下3トレ東-9というよう略す）、3トレ東-2、10トレ-3・13、12トレ-7・9は空堀側から盛られたものであり、10トレ-4、3トレ東-8・7・6・4、12トレ-8・4・2は主郭側からの盛土と考えられる。また、3トレ東と3トレ西では異なる堆積状況が見られる。3トレ東-I・II・IIIはそれぞれ3トレ西-I・IV・Vに対応していることから、3トレ東では、3トレ西-II・III・IVを削った上に盛土を行っていると考えられる。実際3トレ東の拡張部では西から東に向かって地山が落ち込んでいることが観察できる（図版36）。3トレの底面からは柱根を伴う柱穴が検出されており（第41図・図版36）、S F 500は修復を受け現況の形になったことが分かる。一方、3トレ西の2mほど西側に土壘を横断する形で設定した11トレでは、東から西に向かって地山が削られた上に土留めの礫を配したようすが観察される。3トレ東-7の層上部には埋設されたと考えられる石鉢（56-1）が正位で出土している。

S F 510の3トレ-10の層下部には炭が多量に堆積しており、放射性炭素年代測定を行ったところ、西暦1,500年という結果であった。

S D 600 S F 500・510の北側に位置する空堀である。主郭を囲むように東西方向を主軸とし、東端部、西端部では沢に続く。全長は約85mを測り、堀底部の標高は226.8m～229.8mである。S D 600には1・2トレント（第40図）の2本のトレントを設定した。1トレ-3は砂礫の地山であり、この層がS D 600を挟んで南北に見られることから、SD600は地山を60cmほど掘り下げて作られていることが分かる。覆土は1トレント3層、2トレント2層からなる。1トレ-5・6は、2トレ-5・6にそれぞれ対応している。この層には約径10～30cmの礫を多量に含んでいる。堀底は、東端部に近い1トレでは薬研堀の様相を呈し、中央部の2トレ付近では平底の様相を呈している。

S D 600空堀内の10-17グリッドに石組の井戸（S E 220）が検出されている。深さ約160cmを測り、石組み部分が3～6段約80cmで、岩盤を掘り下げた部分が約80cmからなる。この井戸内からは近現代の「壽」文の碗（58-16）が出土していることから、館跡が成立していた時期よりかなり後に作られたものである。



第39図 土壘と空堀平面図

S F 520・530・S D 610・620 S D 610の北側に検出された。西半部は調査区外にのびる。中央部で主郭から土橋を通り搦手側に繞く道により2つに切られている。S F 500・510、S D 600と三重の土壘と空堀を構築している。全長はS D 600と同じく約85mである。土壘と空堀との比高差は約50~60cm前後である。ここでは、1・2トレーニングの2つのトレーニングを設定した(第40図)。1・2トレーニングIは表土で、1・2トレーニングIは粘土質の地山、1・2トレーニングIIは礫質の地山である。土層を観察した結果、ここでは盛土は確認できなかった。つまり地山を切り土にすることにより、空堀と土壘を作り出しているといえる。柱穴、溝跡などの遺構は確認できなかった。

この付近からは、近・現代の陶磁器、ガラス瓶などが出土している。空堀内で検出されたS E 220とも絡み、後世の土地利用の様子がうかがえる。

**S D 250 (第44図)** S F 500の南側11~15-23~25グリッド、主郭北側の整地層下から検出された。主郭を囲むように北から東に廻る。全長約48.5m、最大幅250cmを測る。S F 500の主郭側からの盛土は、S D 250堀跡を作った際に盛られたものと考えられる。

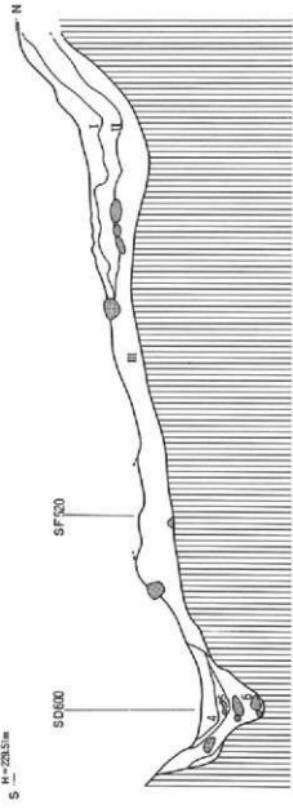
S D 250堀跡内からは7条の小溝が検出された。S D 250-E D 1・2は、12~14-14~19グリッドにかけて検出された。2つの溝跡で堀幅をなしている。両溝とも溝の中央部床面には径50cm大以下の礫がS F 500土壘下から東側へ廻るように配されている。S D 250-E K 8・9の落ち込みにより切られている。S D 250-E D 1・2の南側14~15-14グリッド付近には、南北軸の幅40~80cmの溝が3条並ぶ。S D 250-E D 3・4上には径30cm以下の礫が一段高く敷き詰められ、2つの溝跡の境には礫が列状に並ぶ。これらの溝跡と直交するように東西軸のS D 250-E D 6がある。この溝の規模は全長340cm、幅20cm前後である。溝の両側には径20cm以下の礫が並んでいる。柱穴が1本溝を切っている。14~15-13グリッド付近には主郭東側の沢に向かうS D 250-E D 7が検出されている。幅は最大200cmを測り、搦手からの虎口との関係を考えられる。S D 250-7の西側地山部分には礫が階段状に3列並んでいる。

S D 250の覆土内からは茶臼・石鉢・瀬戸美濃系陶器片が出土している。S D 250が空堀として機能した後、居住城を広げる目的で埋められたと考えられる。

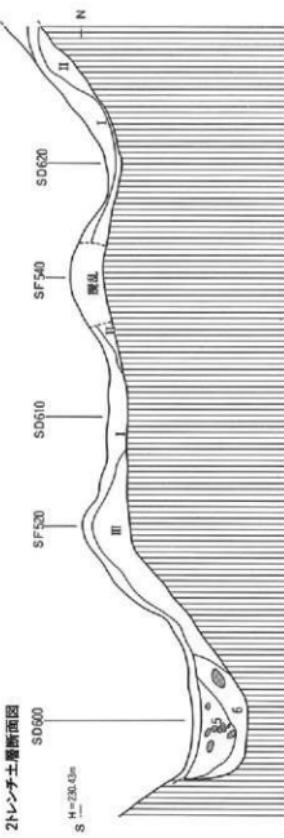
**S X 330 (第45図)** S D 250の西側、11~12-20~21グリッドで検出された。S D 250と同じように主郭北側の整地層下からの検出された。平面形は隅丸長方形を呈し主軸方位はW-28°-Nである。規模は全長723cm、最大幅341cmを測る。検出面からの深さは65cm前後である。壁はスロープ状に落ち込み、床面は平坦である。南側には検出面からの深さ20cm前後の張り出し部がある。

覆土は4層からなり、概ね粘土層である。3層上面から1層にかけては、廃棄されたと考えられる径10~30cmの礫を大量に含んでいる。出土遺物は認められない。遺構の用途も不明である。

1・トレンチ土層断面図



2・トレンチ土層断面図



1-2・トレンチ土層断面図  
小窓(近畿や山陽のため部分的に削除されている)  
I 黄土 2.5m/4オリーブ色粘土層(人骨はほとんどない、切妻土層)

II 黄土 2.5m/3に Olivine砂岩(人骨なし)

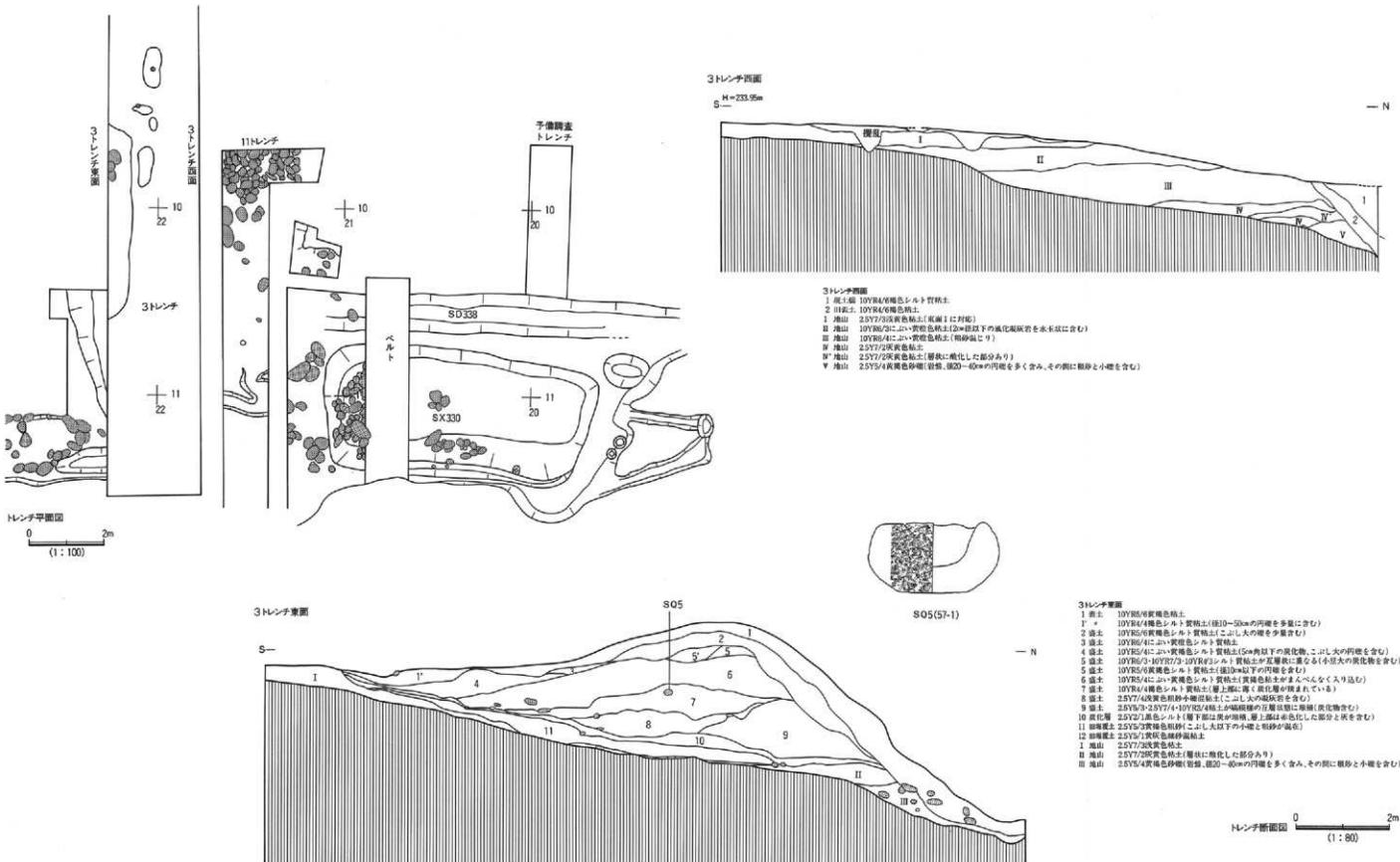
III 地山

4 黄土 2.5m/6オリーブ色粘土層(人骨なし)(人骨なし)

5 穀場 2.5m/4オリーブ色粘土層(こぼし穴跡の内壁が人骨混入3cm以下の人骨なし)

6 穀場 10m/5オリーブ色粘土層(こぼし穴跡の大さきを地盤の大さきに含む)、他土粒、原生砂少無む。

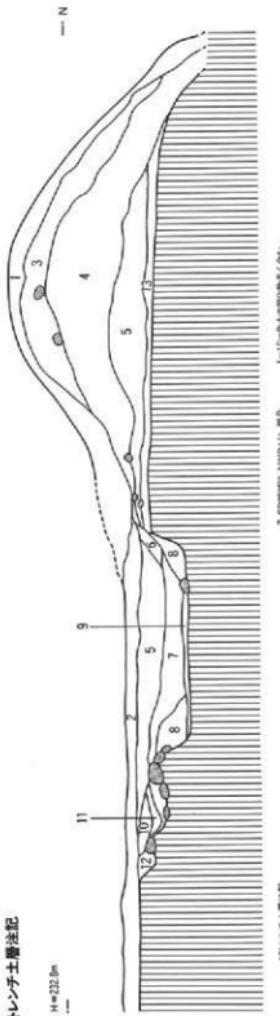
第40図 1・トレンチ土層断面図



第41図 3トレンチ東西面断面図

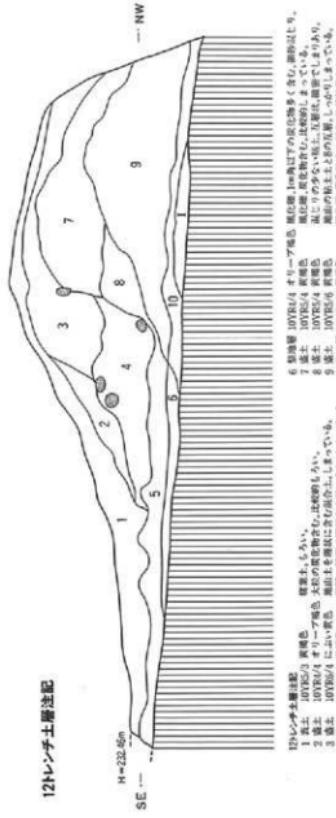
10トレンチ土層注記

三



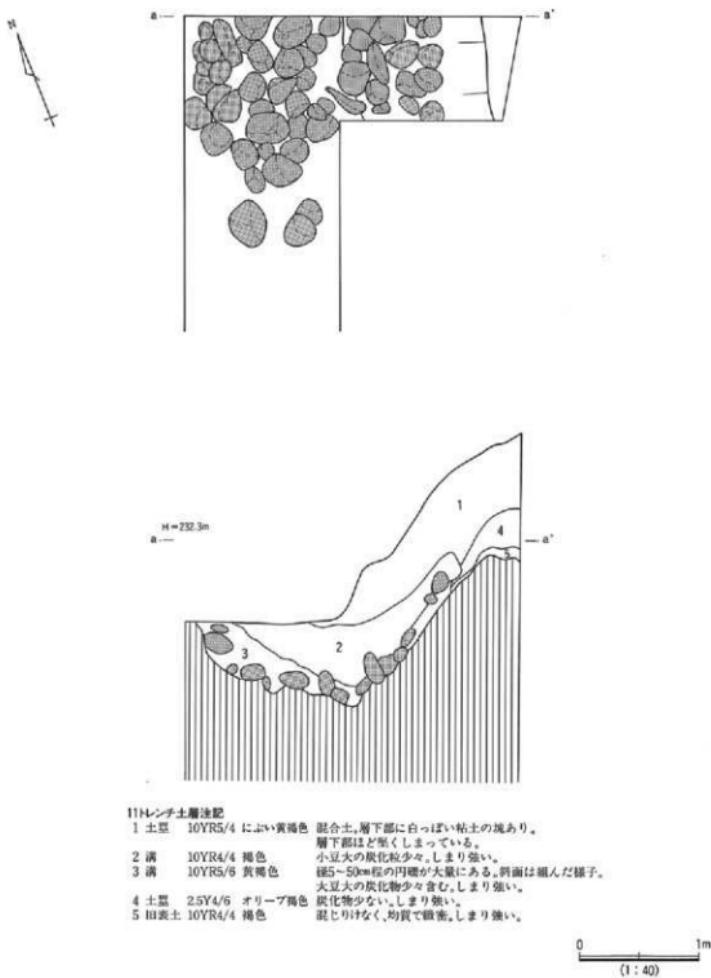
12トレス子土層注記

- 59 -



第42図 10・12トレンチ土層断面図

第42回

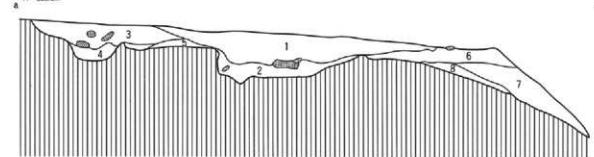


第43図 11トレンチ実測図

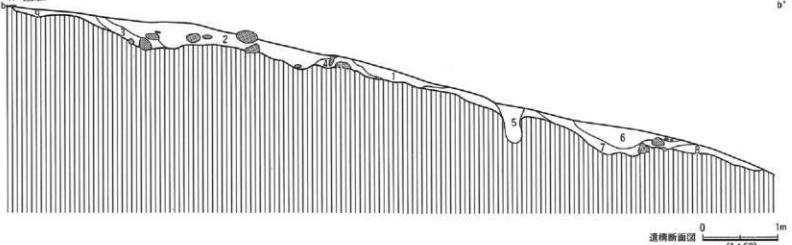
- 8トレンチ  
 1 10YS5/4に近い黄褐色粘土(1~1.5cm角の炭化物含む)  
 2 10YS5/4に近い黄褐色粘土(粗砂混入、厚5~30cmの円礫含む)  
 3 2.5Y5/4黄褐色粘土  
 4 2.5Y4/4オリーブ褐色粘土(厚5~30cmの円礫混入)  
 5 10YS5/4黄褐色粘土(風化礫含む)  
 6 10YS5/4黄褐色粘土(風化礫含む)  
 7 10YS5/4に近い黄褐色粘土(1~2cm角の炭化物含む)  
 8 10YS5/4黄褐色粘土(厚5~60cmの円礫含む)  
 9 10YS6/6明黄色粘土

- 9トレンチ  
 1 10YS4/4褐色粘土(1~1.5cm角内外の炭化物多い)  
 2 10YS5/5黄褐色粘土(厚30cm以下の円礫含む)  
 3 2.5Y4/6モリーブ褐色粘土(25cm内外の円礫、風化礫含む)  
 4 2.5Y3/3褐色粘土(小豆大的炭化物少々含む)  
 5 2.5Y4/3褐色粘土  
 6 2.5Y7/4浅黄色粘土(白っぽい粘土の塊を含む)  
 7 2.5Y4/3オリーブ褐色粘土(比較的柔らかい)  
 8 10YS6/3明黄色粘土

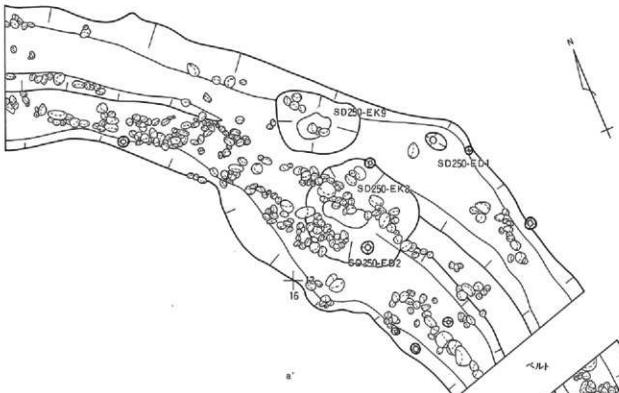
9トレンチ

 $H=230.0m$ 

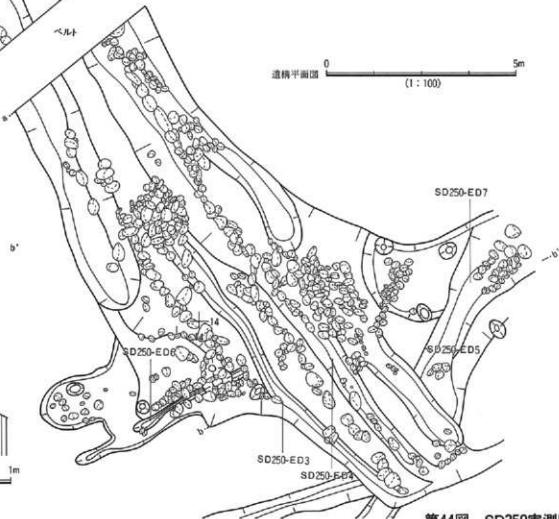
8トレンチ

 $H=230.0m$ 

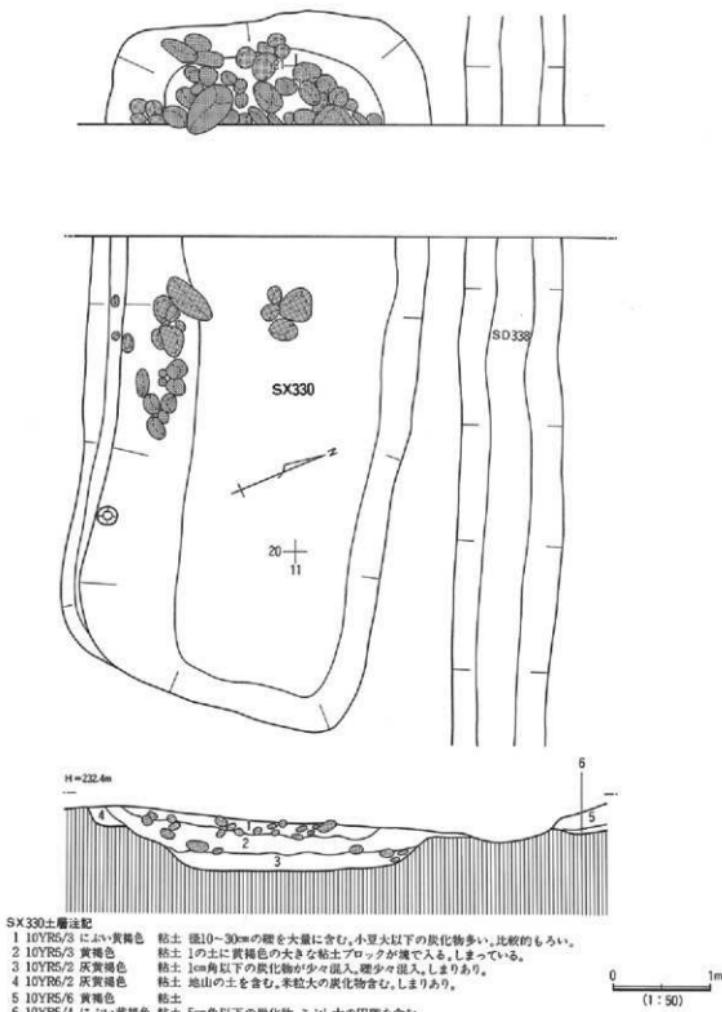
12



14



第44図 SD250実測図



第45図 SX330実測図

### 3 曲輪（第46～49図）

曲輪は主郭の東南隅から西側にかけて15段確認されている。この中で、6段は調査区外にかかるものであり、9段の曲輪について表土を剥ぎ取り遺構検出を行った。また、その構成を調べるため、西側、南西、南東部に3本のトレンチを設定した。各曲輪には、平面図、規模において規格性などは認められないため、ここでは、主郭東南隅から南側に築かれた曲輪（曲輪群a）と、主郭南西から西側に築かれた曲輪群（曲輪b）とに大別し、その状況を概述していく。なお、個々の曲輪の状況については観察表に譲る。

**曲輪群a（第46図）** 現在の睦合小学校裏より登ると曲輪群aに辿り着く。曲輪群aは7段の曲輪から構成されている。比高差は概ね1～3mの範囲であるが、一番下の曲輪から主郭までは約12mの比高差がある。調査区内で曲輪aに属する曲輪は、郭340・350・360の小規模な曲輪である。

6トレンチ（第49図）は、主郭東端から郭350にかけて設定したものである。6トレー2は郭340の整地層であり、6トレー3は郭350の整地層である。これらは、盤を削り段差を作った後に盛土が行われている。郭340と主郭の縁際には深さ30cmほどの溝がある。郭350と主郭の縁際にも溝が検出されている。郭350と郭340の間の斜面には土留めと見られる礎が2～3段積み上げられている場所がある。郭360には睦合小学校裏からの道があり、主郭の虎口へと続いている。郭360の南側調査区外には比較的大きな曲輪が2段あり、その下に小規模な曲輪が1段築かれている。

**曲輪群b（第47図）** 現在の長流寺脇の小道から登ると曲輪群bに辿り着く。曲輪群bは8段の曲輪から構成されている。比高差は曲輪群a同様1～3mの範囲である。一番下の曲輪から主郭までの比高差は南西部で約13m、西側の郭410から主郭まで約6mの比高差を測る。

主郭南西隅から郭380にかけて5トレンチ（第49図）を設定した。5トレー1～3が整地層である。5トレーIIの盤を削り傾斜を作った後に、5トレー2が郭370・380に盛土されている。郭370と主郭の傾斜との縁際には柱穴あるいは溝跡の覆土と見られる5トレー4が堆積している。このことから、郭370の修復後5トレー2が盛土されていることが分かる。郭370は腰曲輪の様相を呈し、主郭の南西隅から西側に廻っている。主郭との縁際には溝が検出されている。

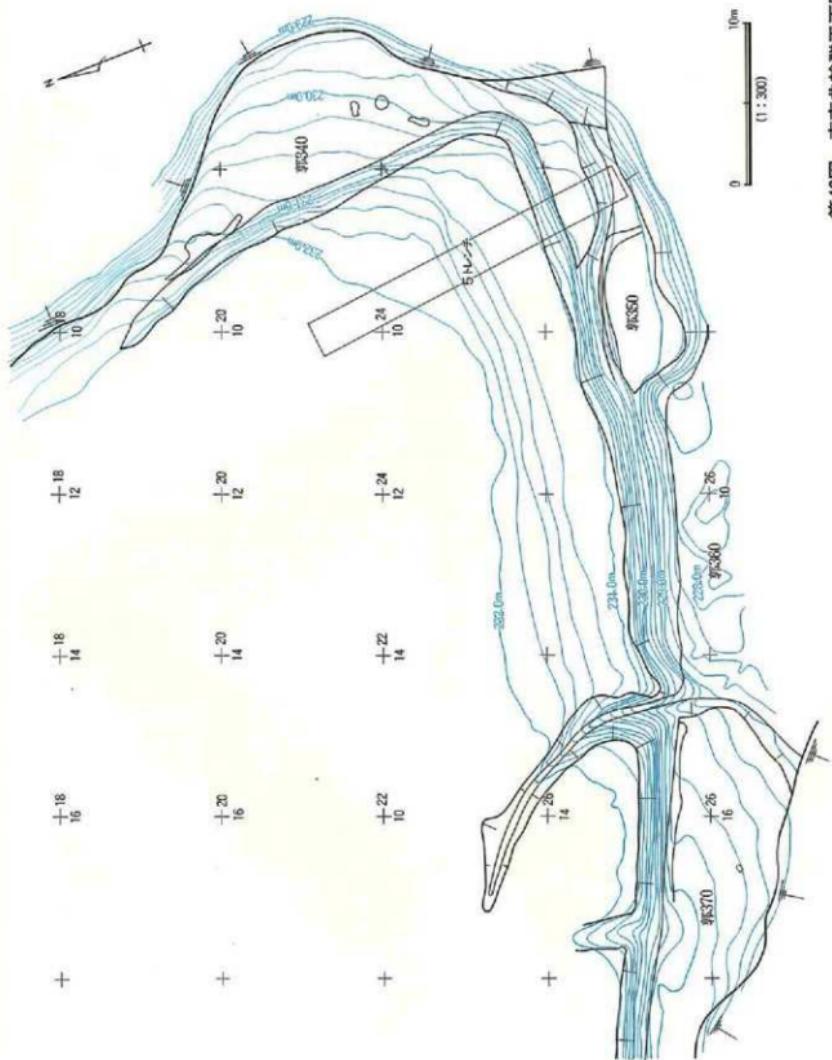
4トレンチ（第48図）は主郭西側中央部から郭410にかけて設定したトレンチである。4トレー4～7が整地層であり、4トレーI・IIは盤である。郭390は盤4トレーIを削った後に4トレー4を盛土している。主郭を囲むように西側から南西隅にかけて廻り、腰曲輪の様相を呈する。また、包含層からは古錢がまとまって出土している。

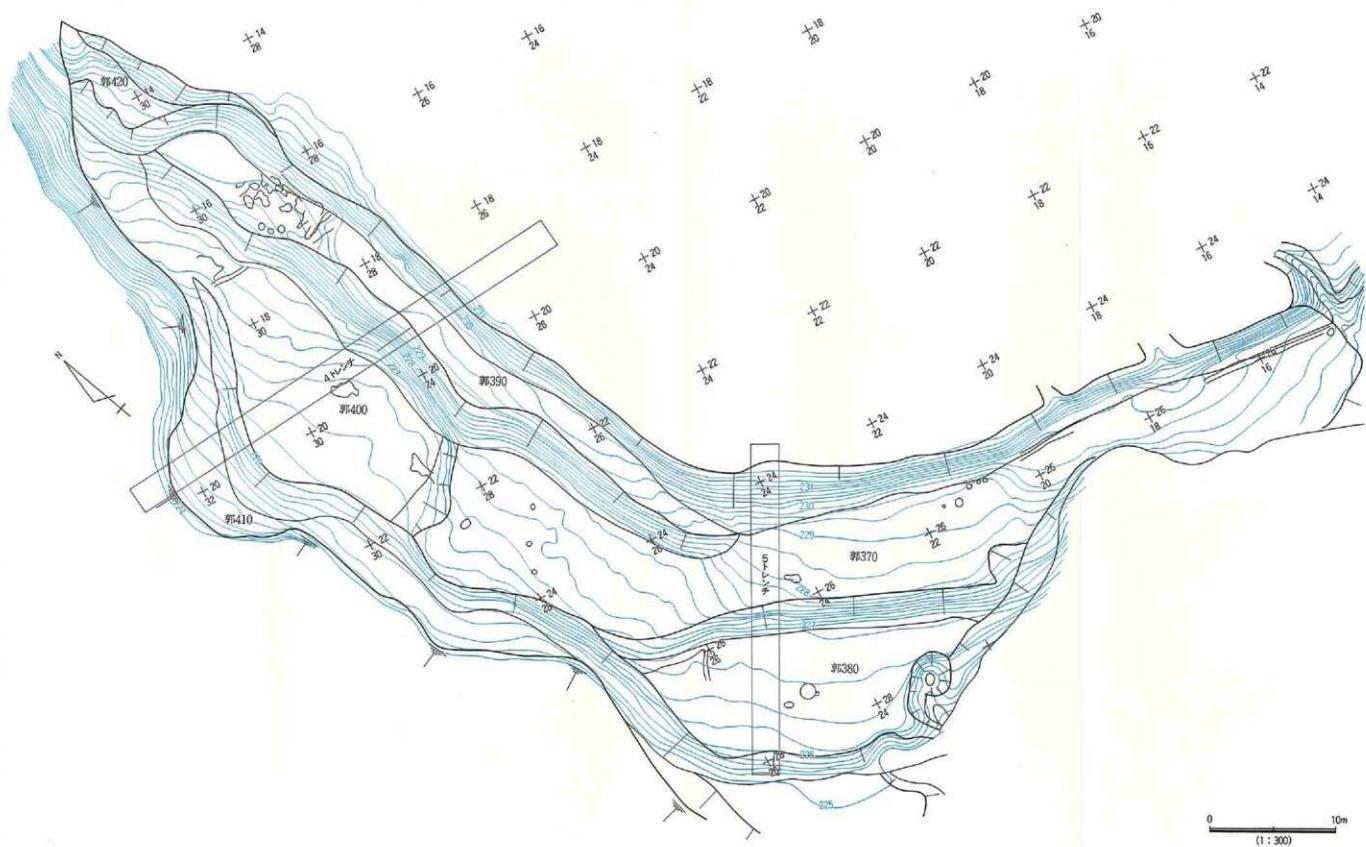
郭400は4トレー4・I・IIを削り傾斜を作り出している。4トレー4は郭390の整地層であることから、郭400は郭390より新しいと考えられる。そして、4トレーII盤の上に4トレー6を盛土し、その後4トレー5を盛土している。また、4トレー5には柱穴か溝の覆土にあたる落ち込みが見られることから盛土を行う以前に遺構があり、修復することにより現況になったものと考えられる。

表-3 曲輪観察表

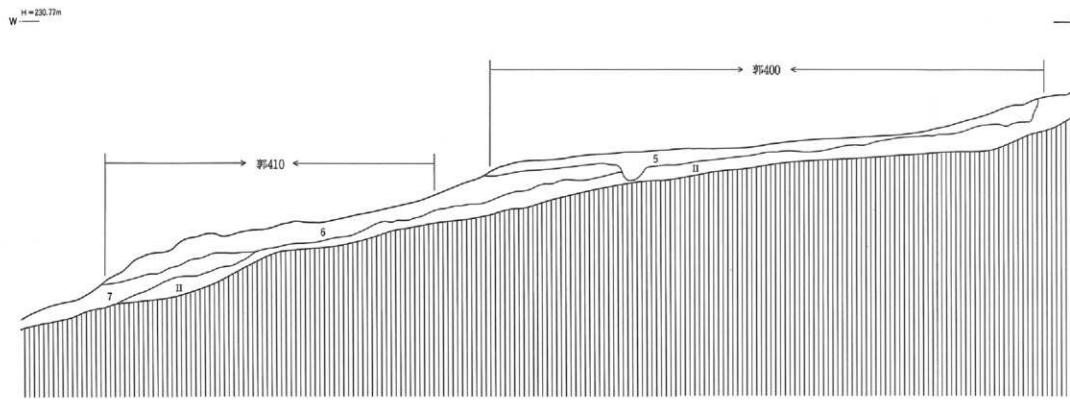
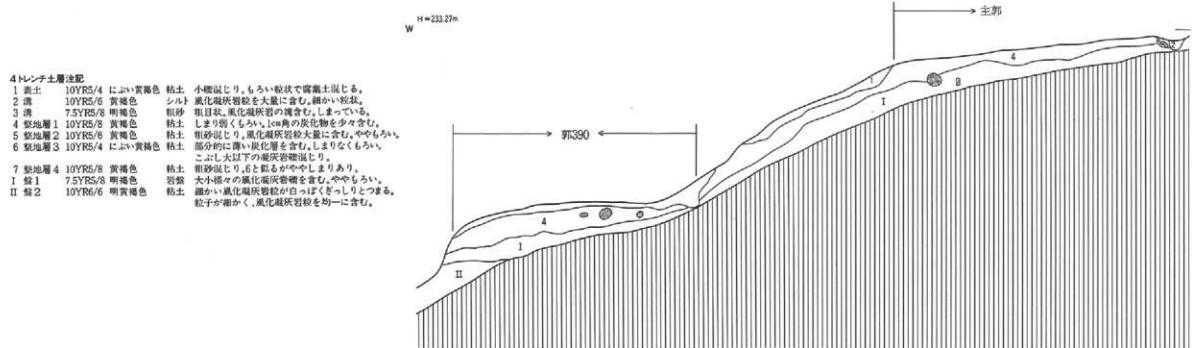
| 登録番号 | 検出地区(G)     | 面積(m <sup>2</sup> ) | 標高(m)               | 比高差(m)(上段)          | 検出遺構               | 備考   |
|------|-------------|---------------------|---------------------|---------------------|--------------------|--|
| 郭340 | 20~25-7~10  | 174                 | 229.3<br>~<br>231.8 | 1.2<br>(主郭)         | 土杭…3基<br>溝跡…1条     | 主郭東南隅に位置し、主郭を囲むように東から南に巡る。<br>東側は沢になる。<br>17-11グリッド付近で主郭につながる。           |
| 郭350 | 26~25-9~11  | 48                  | 228.8<br>~<br>229.3 | 1.9<br>(主郭)         | 溝跡…1条              | 主郭東南角に位置する。東半部は郭340の下になる。<br>主郭との縫隙に溝跡あり。<br>土留めと見られる石組みが検出されている。        |
| 郭360 | 26~27-11~15 | -                   | ~<br>226.9          | 2.9<br>(主郭)         | -                  | 主郭南側に位置し、南半部は調査区外に広がる。<br>郭370との境に主郭に入る虎口あり。<br>後世に作られたと見られる炭窯2基あり。      |
| 郭370 | 22~27-15~29 | 532                 | 227.4<br>~<br>229.4 | 2.2<br>(主郭)         | 溝跡…2条<br>柱穴        | 主郭南から西側に巡る、腰曲輪状になる。<br>主郭との縫隙に溝跡2条検出されている。<br>瀬戸美濃系陶器、輸入陶磁器が包含層から出土している。 |
| 郭380 | 27~29-23~27 | 210                 | 225.8<br>~<br>226.9 | 1.7<br>(郭370)<br>柱穴 | 溝跡…1条<br>柱穴        | 館南西部、郭370の下段に位置する。<br>郭370との縫隙に溝跡あり。<br>須恵器片(50-6)が包含層から出土している。          |
| 郭390 | 15~25-26~30 | 158                 | 229.1<br>~<br>230.2 | 1.2<br>(主郭)         | 溝跡<br>柱穴<br>性格不明遺構 | 主郭西側北から南に巡り腰曲輪状になる。<br>17-29グリッド付近に溝跡、性格不明遺構が検出されている。<br>銭貨が重なって出土している。  |
| 郭400 | 15~22-29~31 | 252                 | 226.1<br>~<br>228.6 | 2.7<br>(郭390)       | 溝跡…1条<br>性格不明遺構    | 東側は郭390の下段に位置し、南北に長い。<br>南側は郭370の下段になる。<br>溝跡は東西軸で、他の曲輪の溝跡と性格が異なる。       |
| 郭410 | 18~22-31~33 | 69                  | 224.2<br>~<br>226.8 | 1.1<br>(郭400)       | -                  | 郭400の西側に位置し、西側は沢になる。<br>小規模な曲輪。  |
| 郭420 | 14~15-30~31 | 31                  | 229.7<br>~<br>231.1 | 1.1<br>(主郭)         | -                  | 東側は主郭の下段に位置する、小規模な曲輪。<br>南側は郭390より一段高い。                                  |

第46図 南東曲輪群平面図





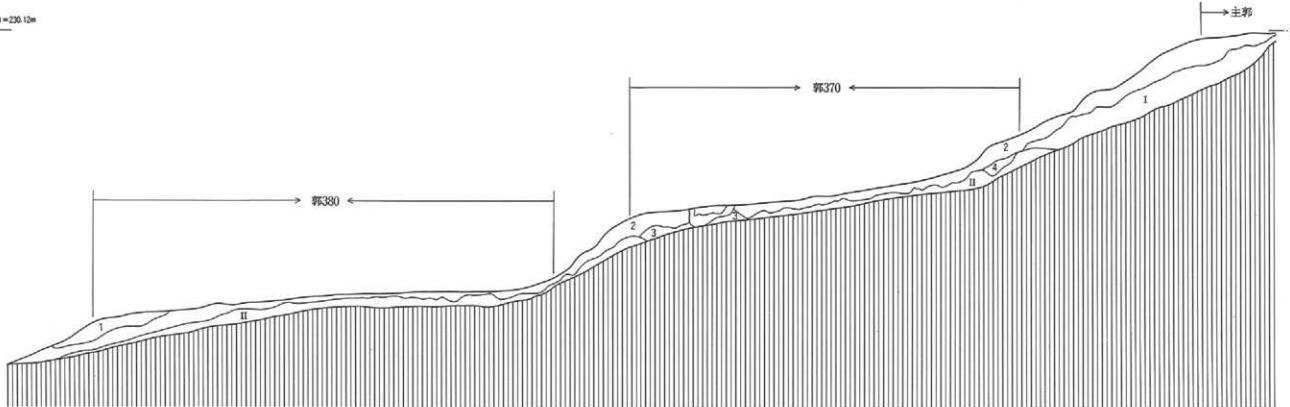
第47図 南西・西曲輪群平面図



0  
1 : 50  
2m

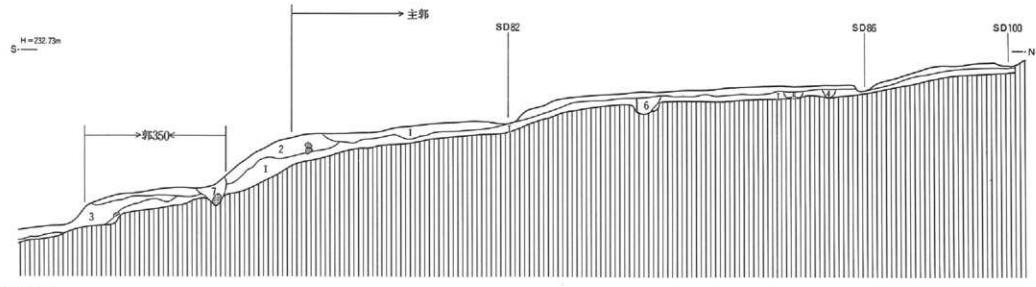
第48図 4トレンチ土層断面図

H=230.12m  
S.—



5 レンチ土層注記

|         |                |  |
|---------|----------------|--|
| 1 積地層 1 | 7SYR5/6 明褐色    | 粘土 条粒大的炭化物、小面積にあり、比較的もろい。                |
| 2 積地層 2 | 10YR5/6 寒褐色    | 粘土 硬が多く、細かい炭化物が少々混入、かなりもろい。              |
| 3 積地層 3 | 10YR 5/6 寒褐色   | 粘土 粘子の細かい炭化物が入っているため黒っぽい色。積地層2より小面積多く含む。 |
| 4 柱穴    | 10YR5/4 にじむ寒褐色 | 粘土 積層下部に層状に炭化物混入。地盤混じり。しまりあり。            |
| I 積 1   | 10YR6/8 明褐色    | 粘土 炭化鉄鉱岩の塊岩、しまっている。                      |
| II 積 2  | 7SYR5/8 明褐色    | 粘土 粘子細かく7312均質。しまっている。                   |



**6 レンチ土層注記**

|         |                |                                  |
|---------|----------------|----------------------------------|
| 1 積地層 1 | 7SYR5/6 明褐色    | 粘土、軽性ない、炭化物など少ない。                |
| 2 積地層 2 | 10YR5/6 寒褐色    | 粘土、小面積25cm内外の円錐混入。堅くしまる。         |
| 3 積地層 3 | 10YR5/6 寒褐色    | 粘土、炭化物少々、堆山が軟化時に混入、比較的軽らかい。      |
| 4 柱穴    | 10YR5/4 寒褐色    | 粘土、軽らかくもろい。                      |
| 5 柱穴    | 10YR5/4 にじむ寒褐色 | 粘土、4と似かかし柱穴大の炭化物含みしまりある。         |
| 6 柱穴    | 10YR5/4 寒褐色    | 粘土、4と似かかし柱穴大の炭化物含み、柱穴部で堆山ブロック風入。 |
| 7 滉     | 10YR4/4 細色     | 床面に巨礫を多く、軽らかい。                   |
| I 積     | 7SYR5/6 明褐色    | 粘土、炭化鉄鉱岩を多量含む。よくしまっている。          |

0  
(1:50)  
1m

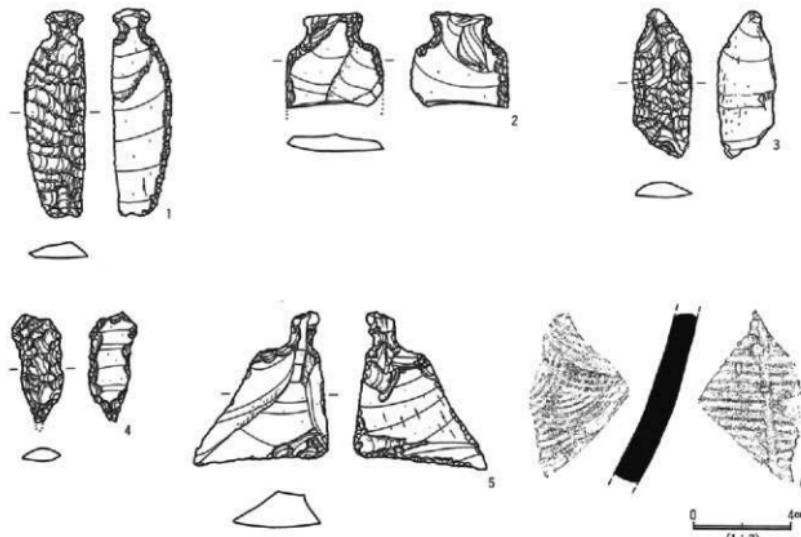
第49図 5・6トレント土層断面図

## V 出土した遺物

今回の調査では、整理箱にして14箱の遺物が出土している。内容は、石器、須恵器、陶磁器、土製品、石製品、金属製品、木製品などである。縄文時代の石器が5点、平安時代の須恵器が1点出土しているが、その他は戦国期から近世、近現代にわたる遺物である。以下、時期・種別ごとにその内容を概括する。

### 1 石器・須恵器（第50図）

(50-1) は石匙で、松原型と呼ばれるものである。時期は、縄文早期最終末～前期前葉と見られる。押圧剥離は右から左に整然と施されている。刀部再生が施され、正面右側辺部の剥離が急になっている。(50-3) はノッチが施されておらず、正面右側辺の押圧剥離が緩やかで刀部再生の痕跡が認められないことから、石匙の未製品と考えられる。(50-4) は石匙を再利用して石錐にしているものである。測辺がつぶれており、錐先端は欠けている。(50-5) は石匙である。ノッチはしっかりと調整しているが、刀部の剥離はラフである。古い資料の形態に多いが時期は不明である。(50-6) は須恵器壺の体部である。外面はタタキ、内面はアテによる成形がある。



第50図 石器・須恵器実測図

表-4 石器計測表

| No. | 器種 | 出土地点   | 石材   | 長さ(mm) | 幅(mm) | 厚さ(mm) | 重量(g) | No. | 器種 | 出土地点   | 石材   | 長さ(mm) | 幅(mm) | 厚さ(mm) | 重量(g) |
|-----|----|--------|------|--------|-------|--------|-------|-----|----|--------|------|--------|-------|--------|-------|
| 1   | 石匙 | SK73F2 | 珪質頁岩 | 85     | 25    | 7      | 18    | 4   | 石錐 | 20+25G | 珪質頁岩 | 46     | 19    | 6      | 5     |
| 2   | 石匙 | X-O    | 珪質頁岩 | 63     | 23    | 7      | 11    | 5   | 石匙 | 12+24G | 珪質頁岩 | 61     | 56    | 15     | 34    |
| 3   | 石匙 | SP219  | 珪質頁岩 | 39     | 40    | 8      | 16    |     |    |        |      |        |       |        |       |

## 2 輸入陶磁器（第51図）

輸入陶磁器は白磁、青磁、染付が出土している。器種構成は碗、皿、盤などである。以下、種別ごとに個々の特徴を述べていく。なお、時期区分・用語などは、白磁については『14~16世紀の白磁の分類と編年』（森田 勉）、青磁については『14~16世紀の青磁碗の分類について』（上田秀夫）、染付については『15~16世紀の染付碗、皿の分類と編年』（小野正敏）－（いずれも貿易陶磁研究No.2所収）を参考にしている。

**白磁** 白磁は2点出土している。51-1は推定口径122mmの皿である。口縁部のみの破片であり、底部の状況は不明であるが、体部は口縁部で外反しており、森田分類の皿E-2類に相当するものと考えられる。時期は16C前半と見られる。51-2も皿である。これも口縁部の破片のみである。口縁部は外反しており、51-1同様森田分類皿E-2類に相当する。

**青磁** 青磁は破片数で10点出土している。個体数では5点になるものと考えられる。51-3は盤である。底部の作りが厚く、20mmを測る。底径は推定96mmを測る。高台の内側は蛇の目状に釉が剥ぎ取られている。高台形状は不明である。見込みには貫入が入る。龍泉窯系のものであり、時期は15世紀に相当する。51-4は碗の腰部の残存である。外面にはロクロによる稜がやや明瞭に残っている。体部は丸みを帯びながら立ち上がっている。51-5は口縁部に雷文帯が入る。口縁部は厚く、体部は丸い胴を持つものと見られる。上田分類のC-II類に相当する。51-6は口縁部が外反する碗である。口縁端部の形状は丸みを帯びている。また、口縁部は被熱を受けている。上田分類のD-II類に相当し、時期は14世紀後葉から15世紀前葉にあたる。51-7は口縁部に雷文帯が入る碗である。51-8~13は接点こそ確認できないが、その釉色、厚さ、胎土などから同一個体と見られる。口縁部には波状の雷文帯を持っている。上田分類のC-III類に相当するものと考えられる。

**染付** 染付は破片数で8点出土している。51-14は口縁部の破片のみの残存である。体部外面には雷文帯が入り、内面には界線2本が入る。口縁端部は丸みを帯びている。小野分類碗E群に相当する。51-15は口縁部の破片のみの残存である。体部はやや内弯ぎみに立ち上がり、口縁部のつくりはシャープである。体部外面に文様が描かれているが、内容は不明である。51-16も口縁部の破片のみの残存である。口縁部外面には帯状の文様が描かれ、内面には界線が入る。内外面ともに貫入が入っている。51-17・18・20は体部の破片のみの残存である。いずれも外面に文様が描かれている。51-19は底部破片の残存である。高台断面はやや丸みを帯びたつくりで、先端部から内側にかけて釉が削り取られている。高台内部にはカンナ目が入る。腰部には界線が入り、体部は丸みを帯びて立ち上がる。小野分類皿E群に相当し、見込みには獅子か蛟龍が描かれているものと見られる。根来寺より出土しているE群26に類似する。時期は16世紀後半に相当する。51-21も底部破片のみの残存である。底径は推定70mm前後である。体部はやや丸みを持ちながら立ち上がり、体部外面には竈が入る。高台断面は逆三角形状を呈し、疊付は釉が削り取られ露胎である。高台部外面には帯状の文様が描かれている。見込みの文様は不明である。口径20cm前後の折り縁の中皿になるものと考えられる。時期は16世紀前半から後葉に相当する。



第51図 輸入陶磁器実測図

### 3 瀬戸・美濃（第52図）

瀬戸・美濃は破片数で21点出土している。17世紀前半の志野が1点の他はすべて大窯期の製品である。器種構成は天目茶碗1点、茶入れ1点の他はすべて皿である。以下、個々の特徴を述べる。なお時期区分、用語については『瀬戸市史陶磁史篇四』（瀬戸市史編纂委員会1993）を参考にした。

52-1は全面に灰釉が施された端反皿である。見込みには菊花の印花文が押印されている。また、見込みの釉は厚く溜まり、貫入が入る。断面逆三角形の付高台を有し口縁の外反度は大きい。高台先端は摩滅している。大窯第2段階にあたる。

52-2は、同一遺構から出土しており、接点はないが一個体になるものと見られる。全面に灰釉が施されており、断面逆三角形の付高台を有する。高台先端部は摩滅している。口縁はゆるやかに外反し、比較的器高が高く大振りであることから、大窯第1段階にあたるものと見られる。

52-3は高台から体部にかけての破片である。断面逆三角形の付高台であり、高台先端部まで灰釉が施されている。底部は厚いつくりで、口縁部近くで外反していることから端反皿と分かる。大窯第1段階～第2段階にあたる。

52-4～8は口縁部から体部にかけての破片資料である。いずれも大窯第1～2段階の灰釉が施された端反皿である。52-5は釉が厚くかけられており、体部外面には凹凸が見られる。口縁部の外反度は小さい。52-7は、口縁はゆるやかに外反し、52-4～6に比べ大振りな皿である。

52-9は口縁部のみの破片である。内外面には灰釉が施されている。口縁部に外反している様子は見られない。丸皿と考えられる。

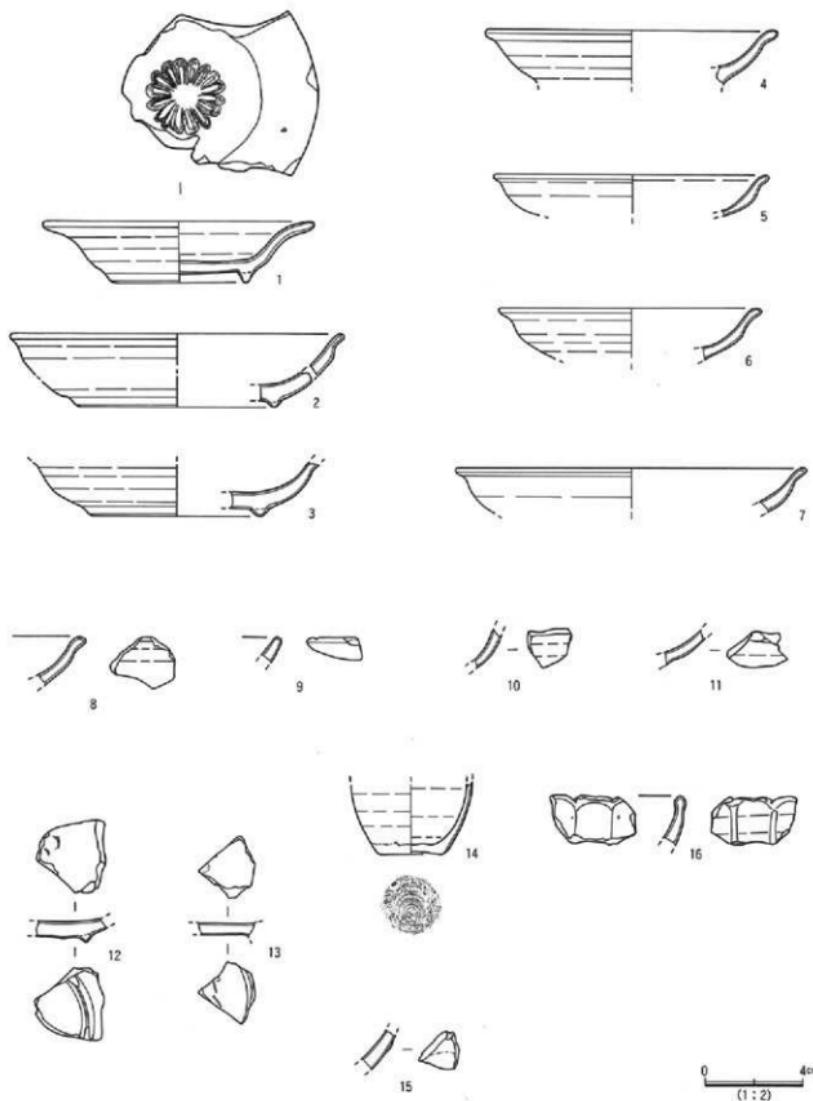
52-10・11は体部のみの破片である。いずれも大窯第1～2段階の灰釉が施された皿と考えられる。52-11は釉の厚みによる体部外面の凹凸が明瞭である。

52-12・13は皿の見込みの破片資料である。52-12の高台部は断面の形状が逆三角形の付高台で、高台内まで灰釉が施されている。疊付は摩耗している。見込みには押印された跡が残る。52-13の見込みにも印花らしき押印の跡が残る。高台内には輪ドチ痕が残る。52-12に比べ、薄いつくりである。

52-14は茶入れである。底部から体部にかけての残存形態は不明である。外面には鉄釉が施されている。体部内面と底部から体部下端にかけては露胎である。底部には回転糸切痕が明瞭に残り、体部下端には回転ヘラ削りが施されている。大窯第1～2段階にあたるものと考えられる。

52-15は体部のみの小破片であるが、天目茶碗片と考えられる。内面と外面の上半部には鉄釉が施され、外面の下半部には鋸釉が施されている。

52-16は志野の輪花皿である。口縁部のみの破片資料である。内外面ともに長石釉が施されている。幅2.5mmの縦ヘラによる鎬が約13mm間隔で口縁部から体部にかけて入る。口縁部のつくりは厚い。



第52図 濑戸・美濃系陶器実測図

#### 4 瓦質土器（第53図）

瓦質土器は53-15の1点のみ出土している。香炉か火鉢の口縁部の破片資料である。ロクロ成形の後、内外面横方向の細かいヘラミガキ調整が施されている。外面には亀甲文が入る。15世紀後半以降の奈良産と見られる。

#### 5 近世・近代陶磁器（第53～56図）

ここでは、陶器と磁器とに大別し、その様相を述べていく。

##### (1) 唐津・京・産地不明陶器

唐津系陶器 唐津系陶器は破片数で5点出土している。53-1は皿である。灰オリーブ色の灰釉が施されているが、腰部から高台部にかけては露胎である。53-2は碗の口縁部のみの残存である。口縁部で折り返されている。ロクロによる稜が明瞭に残っている。外面には灰釉が施され、内面にはハケ目痕が残る。53-3・4はいずれも鉢の口縁部と見られる。53-4は口縁部内面に凹線が巡り、溝縁状を呈する。口縁端部まで灰釉が施され、体部内面にはハケ目痕が見られる。53-5は口縁部に凹線が巡らされた溝縁皿である。体部内面は全面に、外面は口縁部のみ鉄釉が施されている。53-10は碗の口縁部である。外面には暗オリーブ色の灰釉が施されている。17世紀末から18世紀のものである。

京・信楽系陶器 京・信楽系陶器は破片数で3点、個体数では2点になる。53-6・7は同一個体である。全面に灰釉が施された小杉茶碗と見られる。53-8は碗の口縁部のみの破片資料である。口縁部は斜め上方に立ち上がる。体部内面、外面口縁部には灰釉が施され、外面胴部には緑釉が施されている。53-11は香炉である。筒型状を呈し、体部外面には灰釉が施されている。体部内面は露胎である。

産地不明陶器 53-9はうがい茶碗の底部と見られる。見込みには素地に呉須で紅葉の文様が下絵付された後に上釉がかけられている。53-12～14は擂鉢である。53-12の鉗目は2cmで6本入り、14本づつで切り合っている。

##### (2) 肥前系・産地不明磁器

磁器は、近世肥前磁器の他に、近現代の磁器が出土している。ここでは、初期伊万里（1630～1650年）、1650～1700年代の肥前磁器、18～19世紀の肥前磁器、産地不明磁器とに大別し、特徴ある遺物について概述していく。

初期伊万里 54-1～8が1630～50年頃の初期伊万里にあたる。初期伊万里の遺物は、すべてグリッドで取りあげたものである。54-1・2は皿である。54-1の見込みには草花文が描かれている。54-3は碗である。口縁部の形状は不明であるが、体部は湾曲しながら立ち上がる。体部外面には網目文が描かれている。54-4は碗の底部破片資料である。腰部と高台外面には圓線が描かれ、内外面ともに貫入が入る。54-5は碗の底部である。高台部が比較的高い。また、腰部は削られた部分があり溝状を呈する。発色がよくない。54-6・7は碗の口縁部である。いずれも外面には網目文が描かれている。54-7の口縁部のつくりは、厚くぼってりとしている。54-8は肥前系青磁碗の体部である。内外面ともに貫入が入っている。出土した初

期伊万里の特徴として、54-1～5は高台部が、54-7は体部外面に被熱を受けた跡が見られることがあげられる。

**17世紀後半の肥前磁器** 54-9～17が17世紀中葉から末ごろの肥前磁器にあたる。54-9は皿である。高台断面は逆三角形状に鋭く尖り、先端部まで釉が施されている。口径に対し比較的広い高台径を持つ。高台内部、腰部には圓線が描かれる。見込みには花卉の文様が描かれているものと見られる。時期は1650～60年頃に相当する。54-12・13は、接点は確認できないが同一個体と見られる。体部には草花文が描かれ、口縁部には二重圓線が施されている。54-13は筒型碗である。文様は不明である。54-14は皿である。疊付のつくりは厚く、高台内側、体部下半は露胎である。見込みには蛇の目状に釉が剥ぎ取られている。時期は1680～70年頃に相当する。54-15も皿である。体部下半は露胎である。見込みには文様があると見られるが不明である。54-17は碗の口縁部の破片資料である。体部外面にはコンニャク判が施されている。

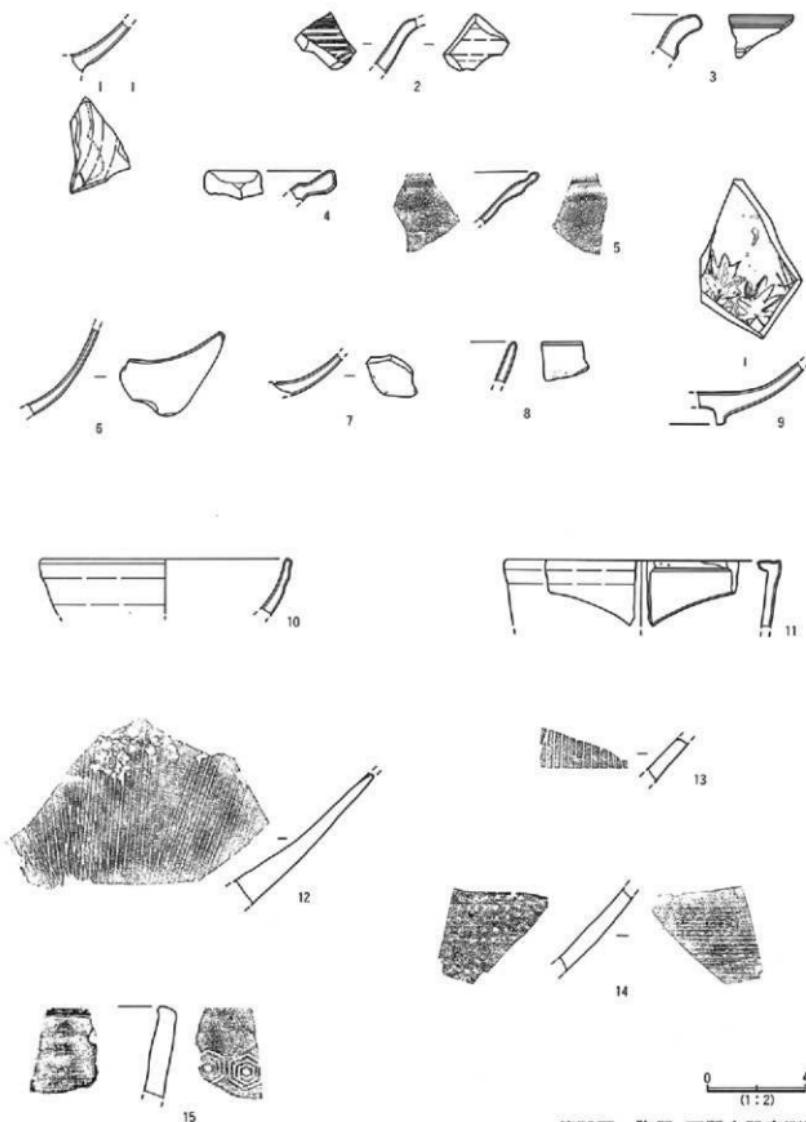
**18世紀の肥前磁器** 55-1～12が18世紀の肥前磁器にあたる。55-1・2は同一個体である。外面に梅樹文が描かれる。18世紀前葉に相当する。55-3～10は波佐見系の碗である。55-3は高台部から腰部にかけて残存している。底部のつくりが厚い。高台部は破損しており、形状は不明である。55-4～6は体部外面に梅樹文が描かれる。体部のつくりは厚く、断面は半円球状を呈する。いずれも18世紀後半に相当する。55-7・8は外面に二重網目文が描かれる。55-7は体部のつくりが厚い。55-8は内面にも網目文が描かれる。55-11は筒型碗の口縁部である。体部は薄く作られている。文様は不明である。55-12は長頸瓶である。外面には草花文が描かれ、内面は露胎である。

**19世紀の肥前磁器** 55-13～16がこの時期に該当する。55-14は梅樹文碗である。高台部から体部にかけて残存している。高台内側には銘款があるが、その内容については不明である。55-15は端反碗の体部から口縁部にかけての破片資料である。外面に文様が描かれている。55-16は小丸碗である。腰部には雷文が描かれている。体部の文様は不明である。いずれも19世紀前半に相当する。

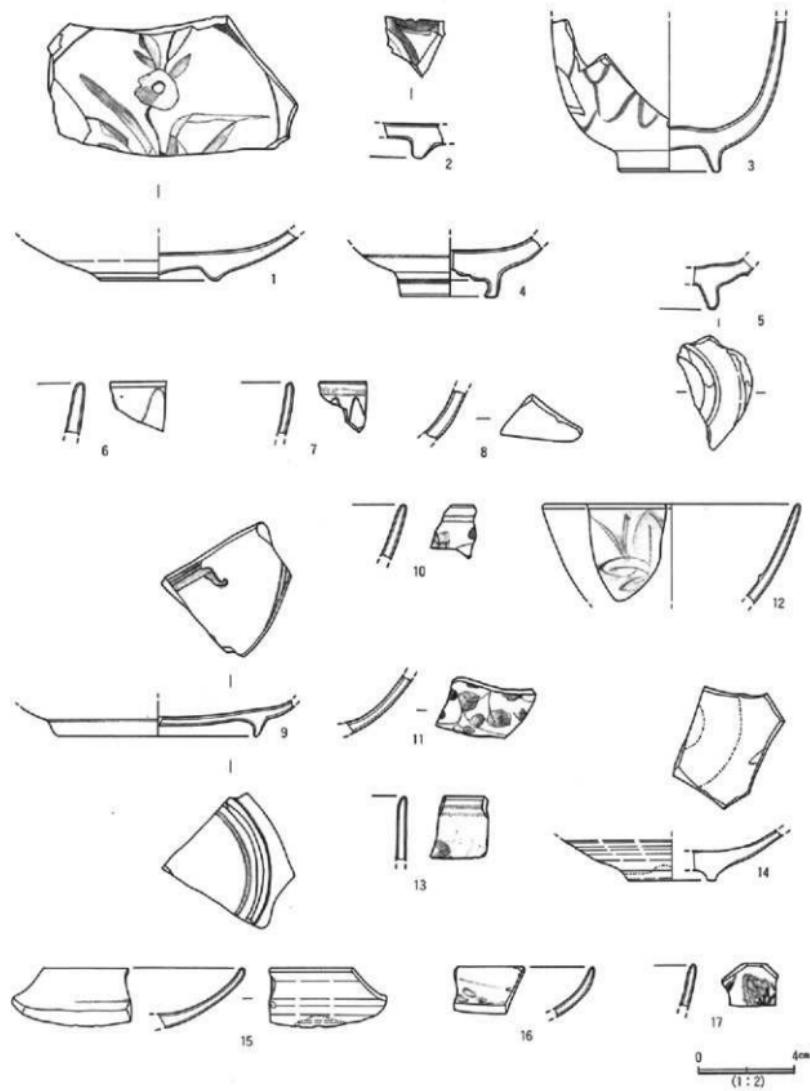
このほか、55-17・18、56-1～9が肥前磁器と見られるがいずれも時期は不明である。55-18は深めの皿である。56-1～3は碗の口縁部である。56-4は筒型碗である。口縁部には雷文らしき文様が描かれている。56-8は仏壇器か小壺の口縁部と見られる。56-8は皿の見込みである。二重圓線が描かれている。

**産地不明磁器** 56-10～26が産地不明の磁器である。産地不明磁器として取り上げたもののはほとんどは主郭北東側の三重の土塁と空堀からの出土である。この区域からは56-16のガラス製品も伴出している。56-12・13は端反碗で同一製品である。見込みには目跡が4ヶ残る。瀬戸産と見られる。56-16は空堀内のS E 220から出土している。外面には「壽」文が描かれる。56-21・22は猪口である。同一製品である。56-23は草花文皿である。高台部は残存していないが、腰部で外面の釉が切れている。56-24・25は同一製品の皿である。見込みには折り鶴が描かれる。

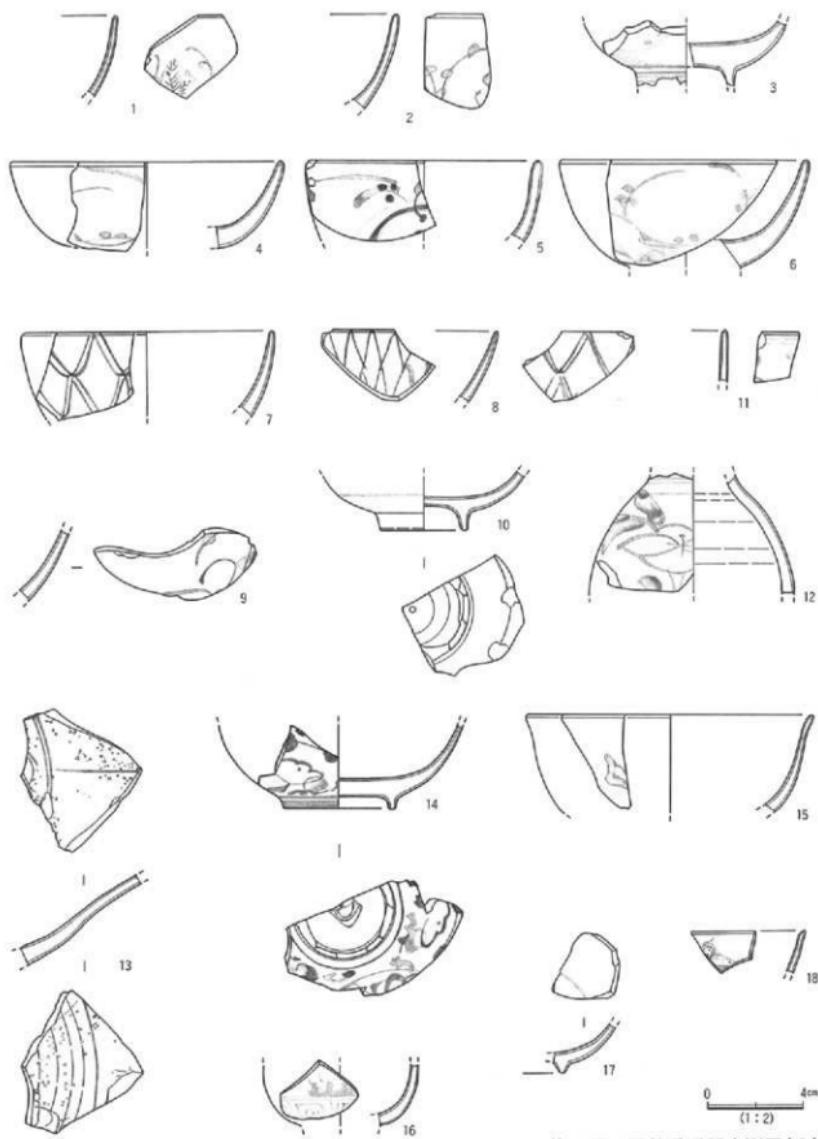
出土した遺物



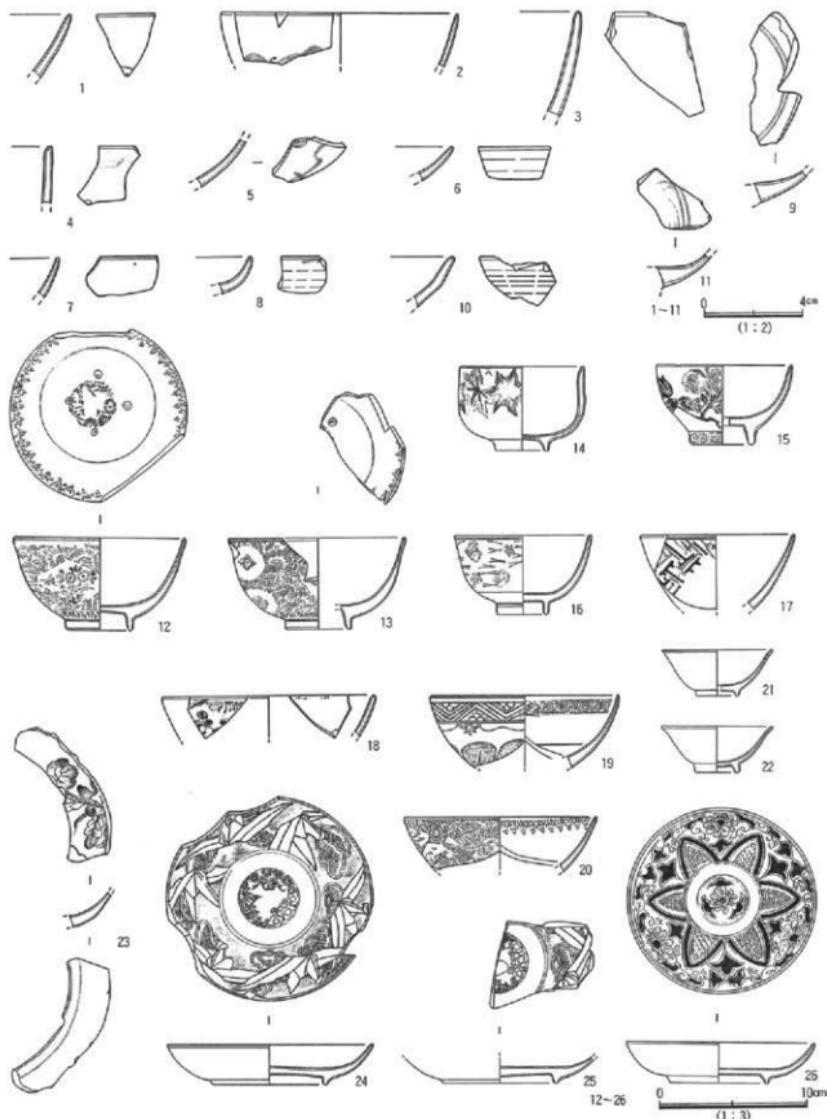
第53図 陶器・瓦質土器実測図



第54図 肥前系磁器実測図(1)



第55図 肥前系磁器実測図(2)



第56図 肥前系磁器(3)・磁器実測図

表-5 陶磁器観察表1

| 標目<br>番号 | 遺物<br>番号 | 種別   | 器種  | 出土位置         | 計測値 (mm) |      |      | 釉 施<br>底径<br>高さ<br>厚 | 胎 土 色       | 制作地    | 制作年代       | 備 考             |
|----------|----------|------|-----|--------------|----------|------|------|----------------------|-------------|--------|------------|-----------------|
|          |          |      |     |              | 口径       | 底径   | 高さ   |                      |             |        |            |                 |
| 第1回      | 1 白磁     | 壺    | 灰土埋 | 24-9G (125)  | -        | -    | 4    | SGYT/1明オーリーブ灰        | 2.5YT/4灰黄   | 明      | 16C前半      | 森田分類I群          |
|          | 2 白磁     | 壺    | 灰土埋 | 24-18G       | -        | -    | 4    | 10CY6/1灰黄            | 2.5YT/3灰黄   | 明      | 16C前半      | 森田分類II群         |
|          | 3 青磁     | 壺    | 灰   | 15-15G       | -        | -    | 20   | 10Y5/2オーリーブ灰         | 5YT/1灰      | 明      | 15C        | 高台内鉢無           |
|          | 4 青磁     | 壺    | 灰   | 22-22G       | -        | -    | 9    | 10Y7/2オーリーブ灰         | 5YT/1灰白     | 明      | 15~16C     | 龍泉系O期           |
|          | 5 青磁     | 壺    | 灰   | 29-14G       | -        | -    | 5    | 2.5GY6/1オーリーブ灰       | 5YT/3灰色     | 明      | 15C前半      | 露款、O-II群        |
|          | 6 青磁     | 壺    | 灰   | 14-15G       | -        | -    | 5    | 10CY6/1緑灰            | 2.5YT/4灰黄   | 明      | 15C前半      | 口縁部被熱、露文帯       |
|          | 7 青磁     | 壺    | 灰   | SDH41P       | -        | -    | 4    | 10Y7/2オーリーブ灰         | 5YT/1灰白     | 明      |            | 口縁部被熱           |
|          | 8 青磁     | 壺    | 灰   | 15-20G       | -        | -    | 4.5  | 10Y5/2オーリーブ灰         | 2.5YT/1灰白   | 明      |            | 龍泉系             |
|          | 9 青磁     | 壺    | 灰   | 15-19G       | -        | -    | 5    | 10Y5/2オーリーブ灰         | 5YT/1灰白     | 明      | 15~16C     | 龍泉系、露文帯         |
|          | 10 青磁    | 壺    | 灰   | 16-19G       | -        | -    | 4.5  | 2.5GY6/1オーリーブ灰       | 5YT/1灰白     | 明      |            | 露文帯             |
|          | 11 青磁    | 壺    | 灰   | 15-19G       | -        | -    | 5    | 10Y5/2オーリーブ灰         | 2.5YT/1灰白   | 明      |            |                 |
|          | 12 青磁    | 壺    | 灰   | 16-19G       | -        | -    | 4    | 10Y5/2オーリーブ灰         | 2.5YT/1灰白   | 明      |            | 龍泉系             |
|          | 13 青磁    | 壺    | 灰   | 15-18G       | -        | -    | 4    | 10Y5/2オーリーブ灰         | 5YT/1灰白     | 明      | 15~16C     | 露文              |
|          | 14 染付    | 壺    | 灰   | 17-13G       | -        | -    | 3    | 透明白                  | 1.5YT/0灰白   | 明      | 1500~      | 口縁部露文           |
|          | 15 染付    | 壺    | 灰   | 13-19G       | -        | -    | 3.5  | 透明白                  | 5YT/1灰白     | 明      | 1700~      |                 |
|          | 16 染付    | 壺    | X-O | -            | -        | -    | 4    | 透明白                  | 5YT/1灰白     | 明      | 16C末       | 口縁部文様あり         |
|          | 17 染付    | 壺    | 灰   | SP19         | -        | -    | 4    | 透明白                  | 5YT/1灰白     | 明      |            |                 |
| 第2回      | 18 染付    | 壺    | 灰   | SP117        | -        | -    | 4    | 透明白                  | 5YT/1灰白     | 明      | 1500~      | 16C             |
|          | 19 染付    | 壺    | 灰   | 36-14G       | -        | 68   | 4    | 透明白                  | 5YT/1灰白     | 明      | 1575~1600  | 小野分類III群、底部カンナ目 |
|          | 20 染付    | 壺    | 灰   | SSR1029      | -        | -    | 4    | 透明白                  | 5YT/1灰白     | 明      |            | 草花文             |
|          | 21 染付    | 壺    | 灰   | 13-19G       | -        | 72   | 5    | 透明白                  | 5YT/1灰白     | 明      | 1500~1550  | 高台下半裏地、しのぎ      |
|          | 1 染付     | 壺    | 灰土埋 | SDH69P       | 112      | 58   | 25   | 4.5 灰釉、5Y8/3赤黄       | 2.5YT/4灰黄   | 鹿戸・吳須  | 1800~1850  | 大窯3、見込み物        |
|          | 2 染付     | 壺    | 灰土埋 | SDH33        | (130)    | (82) | (35) | 6 灰釉、10Y7/2灰白        | 2.5YT/3灰黄   | 鹿戸・吳須  |            | 灰地、大窯1・2        |
|          | 3 染付     | 壺    | 灰土埋 | 15-15G       | -        | 74   | 5    | 灰釉、7.5YT/3灰黄         | 2.5YT/3緑灰   | 鹿戸・吳須  | 1500~1520  | 村高台、大窯1         |
|          | 4 染付     | 壺    | 灰土埋 | SDT79        | (120)    | -    | 4    | 灰釉、7.5YT/3灰黄         | 2.5YT/4灰黄   | 鹿戸・吳須  | 1500~1520  | 灰地、大窯3、端裏地      |
|          | 5 染付     | 壺    | 灰土埋 | 26-24G       | (114)    | -    | 4    | 灰釉、10Y5/2オーリーブ       | 2.5YT/4にない黄 | 鹿戸・吳須  | 1500~1520  | 灰地、大窯3カ         |
|          | 6 染付     | 壺    | 灰土埋 | SP92         | (114)    | -    | 4    | 灰釉、10Y5/1オーリーブ       | 2.5YT/4にない黄 | 鹿戸・吳須  | 1500~1520  | 灰地、大窯3カ         |
|          | 7 染付     | 壺    | 灰土埋 | 18-14G       | (114)    | -    | 4    | 灰釉、5YT/1灰            | 2.5YT/5にない黄 | 鹿戸・吳須  |            | 灰地、越後り組         |
|          | 8 染付     | 壺    | 灰土埋 | SDQ49        | -        | -    | 4    | 灰釉、10Y7/2灰白          | 2.5YT/2灰白   | 鹿戸・吳須  | 1500~1520  | 大窯1~2           |
|          | 9 染付     | 壺    | 丸   | SP99         | -        | -    | 4    | 灰釉、7.5YT/2灰白         | 2.5YT/2灰白   | 鹿戸・吳須  |            | 大窯              |
|          | 10 染付    | 壺    | 丸   | 7トレ          | -        | -    | 4    | 灰釉、10Y7/2灰白          | 2.5YT/2灰白   | 鹿戸・吳須  |            | 灰地              |
|          | 11 染付    | 壺    | 丸   | SP94P        | -        | -    | 4.5  | 灰釉、7.5YT/2オーリーブ      | 2.5YT/2灰白   | 鹿戸・吳須  |            | 輪たまり            |
|          | 12 染付    | 壺    | 丸   | 20-18G       | (54)     | -    | 4.5  | 灰釉、10Y5/2オーリーブ       | 2.5YT/2灰白   | 鹿戸・吳須  | 1500~1520  | 付け高台            |
|          | 13 染付    | 壺    | 丸   | 11-19G       | -        | -    | 5    | 灰釉、7.5YT/3灰黄         | 2.5YT/3灰黄   | 鹿戸・吳須  |            | 付け高台、見込み文様      |
|          | 14 染付    | 壺    | 丸入  | SDH96        | -        | 26   | 3    | 灰釉、7.5YR1.1/1墨       | N8/1灰       | 鹿戸・吳須  | 1500~1520  | 灰地、大窯2カ         |
|          | 15 染付    | 壺    | 天目系 | SDH5F        | -        | -    | 5.5  | 灰釉、10YR1.1/1墨        | 10YR6/3にない黄 | 鹿戸・吳須  |            | 大窯、鉢脚           |
|          | 16 染付    | 壺    | 輪花  | 25-19G       | -        | -    | 5    | 良石釉、5Y8/1灰白          | 2.5YT/4灰黄   | 鹿戸・吳須  |            | 内面、底部上端黒地       |
| 第3回      | 1 康津     | 壺    | 温   | 28-24G       | -        | -    | 5    | 灰釉、10Y5/2オーリーブ       | 10YR6/3にない黄 | 唐津     | 17C初め      | 体部下半黒地          |
|          | 2 康津     | 壺    | 温   | SD22         | -        | -    | 5.5  | 灰釉、5Y8/2オーリーブ        | 10YR6/2灰黒   | 唐津     | 17C後半~18C初 | ハケメ             |
|          | 3 康津     | 壺    | 温   | 14-18G       | -        | -    | 7    | 2.5R12/3串掛           | 10YR6/1緑灰   | 唐津     |            |                 |
|          | 4 康津     | 鉢    | 温   | 14-18G       | -        | -    | 8    | 灰釉、3.5YR1.1/3オーリーブ   | 唐津          | 17C    |            |                 |
|          | 5 康津     | 満月皿  | 温   | 19-14G       | -        | -    | 3    | 灰釉、5YR2.1/1黒         | 10YR6/3にない黄 | 唐津     |            |                 |
|          | 6 康津     | 小竹茶碗 | 温   | 17-19G       | -        | -    | 4    | 灰釉、2.5YT/3灰黄         | 2.5YT/2灰白   | 京・信楽   | 18C後半      | 志摩、輪はいる         |
|          | 7 康津     | 小竹茶碗 | 温   | 21-11G       | -        | -    | 4    | 灰釉、2.5YT/3灰黄         | 2.5YT/2灰白   | 京・信楽   |            | S5-6と同一個体       |
|          | 8 康津     | 碗    | 温   | 18-18G       | -        | -    | 3.5  | 灰釉、3.5YT/3オーリーブ      | 2.5YT/2灰黄   | 京・信楽   |            | 口縁部のらん輪         |
|          | 9 康津     | 茶碗   | 温   | 16-13G       | -        | -    | 5    | 透明物                  | 10YR6/3にない黄 | -      |            |                 |
|          | 10 康津    | 碗    | 温   | 14-18G (104) | -        | -    | 3    | 灰釉、2.5YT/3灰黄         | 2.5YT/2灰白   | 京・信楽   | 18C後半      |                 |
|          | 11 康津    | 香炉   | 温   | 21-11G (114) | -        | -    | 4    | 透明物                  | 7.5YT/1灰    | 唐津     | 17C後半~18C初 |                 |
|          | 12 康津    | 壺    | 温   | 子南SD         | -        | -    | 8    | 7.5YT/2灰             | -           |        |            | 2cmで6本の即目       |
|          | 13 康津    | 壺    | 温   | 19-18G       | -        | -    | 6    | 2.5YT/3灰             | -           |        |            |                 |
|          | 14 康津    | 壺    | 温   | 19-17G       | -        | -    | 6    | 2.5YT/4/3にない青        | -           |        |            |                 |
|          | 15 瓦質    | 火鉢   | カ   | SP178P       | -        | -    | 9    | -                    | 奈良か         | 15C後半~ | 龟甲文        |                 |
| 第4回      | 1 染付     | 壺    | 温   | 26-19G       | -        | 49   | 6    | 透明物                  | N8/0灰白      | 肥前     | 1630~1650  | 初期伊万里、草花文       |
|          | 2 染付     | 壺    | 温   | 18-19G       | -        | -    | 5.5  | 透明物                  | 7.5YT/1灰白   | 肥前     | 1630~1650  | 初期伊万里、草花文       |
|          | 3 染付     | 壺    | 温   | 19-19G       | -        | 42   | 6    | 透明物                  | 5YT/1灰白     | 肥前     | 1630~1650  | 初期伊万里、露文帯       |
|          | 4 染付     | 壺    | 温   | 16-16G       | -        | -    | 8    | 透明物                  | N8/0灰白      | 肥前     | 1630~1650  | 初期伊万里、高台・腰部黒地   |
|          | 5 染付     | 壺    | 温   | 23-19G       | -        | -    | 6    | 透明物                  | 7.5YT/1灰白   | 肥前     | 1630~1650  | 高台部被熱、発色良い      |

表-6 陶磁器観察表2

| 序号      | 遺物<br>番号 | 種別 | 器種   | 出土位置   | 計測値 (mm) |      |    | 輪 楽・色 調          | 胎 土 色     | 制作地 | 制作年代       | 備 考          |
|---------|----------|----|------|--------|----------|------|----|------------------|-----------|-----|------------|--------------|
|         |          |    |      |        | 口径       | 底径   | 高さ |                  |           |     |            |              |
| 54<br>回 | 6        | 染付 | 碗    | 10-16G | -        | -    | -  | 5 透明胎            | NB/G灰白    | 肥前  | 1630~1660  | 初期伊万里、調査文    |
|         | 7        | 染付 | 碗    | 13-19G | -        | -    | -  | 4 透明胎            | NB/G灰白    | 肥前  | 1630~1660  | 口縁部被鉛、調査文    |
|         | 8        | 青磁 | 碗    | 23-26G | -        | -    | -  | 4 青磁胎7.5GYT/1明暦款 | NB/G灰白    | 肥前  | 1630~1660  | 入人入る、肥前系青磁   |
|         | 9        | 染付 | 皿    | 15-25G | -        | (82) | -  | 5 透明胎            | NB/G灰白    | 肥前  | 1630~1660  | 草花文          |
|         | 10       | 染付 | 碗    | X-O    | -        | -    | -  | 3.5 透明胎          | NB/G灰白    | 肥前  | 1660~1670  | 草花文          |
|         | 11       | 染付 | 碗    | 20-14G | -        | -    | -  | 4 透明胎            | NB/G灰白    | 肥前  | 1660~1670  | 54-10と同一個体   |
|         | 12       | 染付 | 碗    | 22-18G | (106)    | -    | -  | 5 透明胎            | NB/G灰白    | 肥前  | 1660~1680  | 草花文          |
|         | 13       | 染付 | 盤型碗  | 12-19G | -        | -    | -  | 3.5 透明胎          | NB/G灰白    | 肥前  | 17C中葉      | 草花文、口縁部二重輪絵  |
|         | 14       | 染付 | 碗    | SD205F | -        | (36) | -  | 3 透明胎            | 7.5YR/1灰白 | 肥前  | 17C後半~18C初 | 見込み鉛の目録剥が    |
|         | 15       | 染付 | 碗    | 16-17G | (124)    | -    | -  | 3 透明胎            | NB/G灰白    | 肥前  | 17C後半~18C初 | 腰輪絵          |
|         | 16       | 染付 | 皿    | X-O    | -        | -    | -  | 4 透明胎            | NB/G灰白    | 肥前  | 17C後半~末    | 見込み繪付不明      |
|         | 17       | 染付 | 碗    | 16-18G | -        | -    | -  | 4 透明胎            | 10YR/1灰白  | 肥前  | 1690~1710  | コヨニヤク判       |
|         | 1        | 染付 | 碗    | 21-19G | -        | -    | -  | 3 透明胎            | NB/G灰白    | 肥前  | 1710~1740  | 梅桜文          |
|         | 2        | 染付 | 碗    | 21-19G | -        | -    | -  | 3 透明胎            | NB/G灰白    | 肥前  | 18C中後半     | 梅桜文、55-1と同一体 |
|         | 3        | 染付 | 碗    | 19-17G | -        | (46) | -  | 8 透明胎            | NB/G灰白    | 肥前  | 1730~1780  | 故伝見系、繪付不明    |
|         | 4        | 染付 | 碗    | 12-19G | (110)    | -    | -  | 5 透明胎            | 2.5YR/1灰白 | 肥前  | 18C後半      | 梅桜文          |
|         | 5        | 染付 | 碗    | SD208  | (98)     | -    | -  | 4.5 透明胎          | 5YR/1灰白   | 肥前  | 18C後半      | 「くらわんか」、梅桜文  |
|         | 6        | 染付 | 碗    | X-O    | (104)    | -    | -  | 5 透明胎            | 10YR/1灰白  | 肥前  | 18C後半      | 「くらわんか」、梅桜文  |
|         | 7        | 染付 | 碗    | 15-13G | -        | -    | -  | 4 透明胎            | 5YR/1灰白   | 肥前  | 18C後半      | 「くらわんか」、二重輪絵 |
|         | 8        | 染付 | 碗    | 16-20G | -        | -    | -  | 3 透明胎            | 2.5YR/1灰白 | 肥前  | 18C後半      | 内側輪絵文        |
|         | 9        | 染付 | 碗    | 13-18G | -        | -    | -  | 4.5 透明胎          | NB/G灰白    | 肥前  | 18C後半      | 梅桜文          |
|         | 10       | 染付 | 碗    | 9-15G  | -        | 36   | -  | 4 透明胎            | 10YR/1灰白  | 肥前  | 18C後半      | 腰輪絵          |
|         | 11       | 染付 | 周開周  | 12-19G | -        | -    | -  | 3.5 透明胎          | 10YR/1灰白  | 肥前  | 18C後半      | 繪付不明         |
|         | 12       | 染付 | 長颈瓶  | X-O    | -        | -    | -  | 4 透明胎            | 5YR/1灰白   | 肥前  | 18C後半~19C初 | 草花文          |
|         | 13       | 染付 | 皿    | SD68   | -        | -    | -  | 6 透明胎            | 7.5YR/1灰白 | 肥前  | 18C後半~19C初 | 梅桜文          |
|         | 14       | 染付 | 碗    | 9-19G  | -        | (46) | -  | 4 透明胎            | NB/G灰白    | 肥前  | 1830~1860  | 高台内側輪紋、草花文   |
|         | 15       | 染付 | 瓶    | 18-18G | (120)    | -    | -  | 3.5 透明胎          | NB/G灰白    | 肥前  | 19C        | 輪裏り型         |
|         | 16       | 染付 | 小丸瓶  | 20-14G | 胸徑42     | -    | -  | 3 透明胎            | NB/G灰白    | 肥前  | 1820~1860  | 体部下半輪文       |
|         | 17       | 染付 | 皿    | 18-18G | -        | -    | -  | 4 透明胎            | 7.5YR/1灰白 | 肥前  | 18C        | 赤褐色の質、朱付露胎   |
|         | 18       | 染付 | 皿    | 20-14G | -        | -    | -  | 3 透明胎            | 5YR/1灰白   | 肥前  | 18C        | 周の墨          |
| 55<br>回 | 1        | 染付 | 碗    | 16-20G | -        | -    | -  | 3.5 透明胎          | NB/G灰白    | 肥前  | -          | 繪付不明         |
|         | 2        | 染付 | 碗    | SD200F | (98)     | -    | -  | 2.5 透明胎          | NB/G灰白    | 肥前  | -          |              |
|         | 3        | 染付 | 碗    | X-O    | -        | -    | -  | 5 透明胎            | NB/G灰白    | 肥前  | -          |              |
|         | 4        | 染付 | 碗    | 23-16G | -        | -    | -  | 3 透明胎            | NB/G灰白    | 肥前  | -          | 蘭文           |
|         | 5        | 染付 | 碗    | SD68   | -        | -    | -  | 3 透明胎            | NB/G灰白    | 肥前  | -          | 繪付不明         |
|         | 6        | 染付 | 皿    | 21-28G | -        | -    | -  | 3 透明胎            | 7.5YR/1灰白 | 肥前  | -          |              |
|         | 7        | 染付 | 皿    | 16-19G | -        | -    | -  | 3 透明胎            | 10YR/1灰白  | 肥前  | -          |              |
|         | 8        | 染付 | 仏壇置き | 14-15G | -        | -    | -  | 4 透明胎            | 2.5YR/1灰白 | 肥前  | -          | 平べったい墨形      |
|         | 9        | 染付 | 皿    | 14-20G | -        | -    | -  | 5 透明胎            | NB/G灰白    | 肥前  | -          | 見込み二重輪絵      |
|         | 10       | 染付 | 皿    | 16-14G | -        | -    | -  | 3.5 透明胎          | NB/G灰白    | -   | -          | ロクロによる模が明瞭   |
|         | 11       | 染付 | 皿    | 17-21G | -        | -    | -  | 6 透明胎            | NB/G灰白    | -   | -          | 繪付不明         |
|         | 12       | 染付 | 碗    | 北山土器   | 108      | 40   | 58 | 3 透明胎            | NB/G灰白    | -   | -          | 見込みみ口縁4ヶ所    |
|         | 13       | 染付 | 瓶    | B-16G  | (108)    | 40   | 56 | 4 透明胎            | NB/G灰白    | -   | -          | 目跡あり、木盤打ち込み  |
|         | 14       | 染付 | 碗    | 10-38G | 74       | 33   | 53 | 5 透明胎            | NB/G灰白    | -   | -          | 伏見村、紅葉文      |
|         | 15       | 染付 | 碗    | S-16G  | 84       | 40   | 49 | 5 透明胎            | NB/G灰白    | -   | -          | 牡丹文          |
|         | 16       | 染付 | 碗    | SE220  | 84       | 33   | 48 | 4 透明胎            | NB/G灰白    | -   | -          | 梅文           |
|         | 17       | 染付 | 皿    | X-O    | (96)     | -    | -  | 3.5 透明胎          | NB/G灰白    | -   | -          | 桃子文          |
|         | 18       | 染付 | 碗    | 21-12G | -        | -    | -  | 3 透明胎            | NB/G灰白    | -   | -          | 草花文          |
|         | 19       | 染付 | 碗    | 11-24G | (114)    | -    | -  | 4 透明胎            | NB/G灰白    | -   | -          | 波瀾文、幾何学分     |
|         | 20       | 染付 | 皿    | 9-15G  | (116)    | -    | -  | 3 透明胎            | NB/G灰白    | -   | -          |              |
| 56<br>回 | 21       | 染付 | 諸口   | 9-19G  | 65       | 27   | 28 | 3 透明胎            | NB/G灰白    | -   | -          |              |
|         | 22       | 染付 | 諸口   | 8-18G  | 70       | 28   | 28 | 3 透明胎            | NB/G灰白    | -   | -          | 55に同じ        |
|         | 23       | 染付 | 皿    | ZD-11G | -        | -    | -  | 5 透明胎            | NB/G灰白    | -   | -          | 高台無輪胎の器皿、草花文 |
|         | 24       | 染付 | 皿    | 9-19G  | 128      | 70   | 25 | 3.5 透明胎          | NB/G灰白    | -   | -          | 折り鶴・桃竹梅文     |
|         | 25       | 染付 | 皿    | B-16G  | -        | 70   | -  | 5 透明胎            | NB/G灰白    | -   | -          | 折り鶴・桃竹梅文     |
|         | 26       | 染付 | 皿    | X-O    | 115      | 60   | 26 | 4 透明胎            | NB/G灰白    | -   | -          | 鏡向字文         |

## 6 石製品・土製品

石製品は石鉢・茶臼・砥石、円盤状有孔石製品、紡錘車、碁石などが、土製品は紡錘車が、主に主郭から出土している。ここでは、石鉢・茶臼・砥石、円盤状有孔石製品、紡錘車、碁石の5項目に分け、それぞれの特徴について概括する。

### (1) 石鉢・茶臼（第57～60図）

ここでは、礫を球状に成形した後、中をくり抜いたものを石鉢A類とし、断面逆台形を呈し内外面に明瞭なノミ痕が残るものと石鉢B類とし、茶臼とは区別して扱っていく。

**石鉢A類** 出土した石鉢A類は個体数で9点に上る。このうち実測可能な8点を図化した。S D 250の覆土内、整地層から出土したものが多く、16世紀代に使われ、廃棄されたものと考えられる。最大径が300mmに近い大型のもの（57-1～4、58-1）と、200mm前後の小型のもの（58-2・3）がある。57-1はSF 500の盛土内から出土した。口径、底径が広く安定した形である。底部は比較的平坦で、器内部は深い。57-2～4、58-1は器厚が厚く、内面はゆるやかに落ち込む。底部は狭く安定していない。器内部は浅く、断面形は丸い形状である。58-2・3は小型の石鉢である。58-2は器内部が直角的に落ち込み、床面は平坦で広い。器厚は薄いつくりである。58-3は体部が丸いつくりである。口縁部は鋭角的で、器内部はゆるやかに落ち込む。器厚は厚い。石臼は玄武岩、安山岩などの火成岩質の石材を利用して作られている。内外面にはノミ痕の残るものもある。用途は不明であるが、石鉢A類がまとまって出土した例は、県内では確認されていない。

**石鉢B類** 石鉢B類は2点出土している（60-3・4）。いずれも器壁が厚く直線的に立ち上がる。内面には煤痕が残り調理具として利用されたものと考えられる。

**茶臼** 茶臼は4点出土している。4点とも下臼のみで上臼は出土していない。59-1はほぼ全形が観察できるが、その他はすべて破片資料である。59-1の摺り面は放射状で、副溝はほぼ等間隔で並ぶが、一ヵ所に2本並んでいる溝もある。皿部は中心部に向かって緩やかに立ち上がる。59-2は摺り面が平坦で、8分角になるものと見られる。副溝は5本で切り合いがあり、目立てをしたと思われる。溝の断面形はU字状を呈し深さは約0.5mm前後である。ほぼ等間隔に並ぶ。60-1・2はいずれも皿部の破片資料である。茶臼はすべて火成岩を石材として使用している。

### (2) 砥石（第61～62図）

砥石は金属製品を研ぐために使われている。陸台館跡でも武具、建築部材などの金属製品が出土しており、これらのものを研磨するために使われたものと考えられる。出土量も多く、主に主郭を中心に21点が出土している。これらを断面の形状により次の4類に分類し、以下その特徴について概括していく。なお、分類にあたっては「仙台市文化財調査報告書第58集 今泉城跡」を参考とした。

I類…断面形が方形状を呈する一群（61-1～10）。

断面が方形状を呈するものは10点と約半数をしめる。61-1は5面に擦り痕が残る。6面とともに平らに面取りされている。61-3は側面に切り離し痕が残る。擦り面は2面に観察できる。

61-4～6は比較的小型の砥石である。先端部は丸みを帯びている。61-1～9の石材は砂岩と見られる。比較的粒が細かいものが多い。61-10は擦り面が窪んでいる。石材はチャートと見られる。I類の場合、最も使用されたと思われる面が他の面に比べ中央部が窪んでおり、使用頻度の高さを伺わせる。

II a類…断面形が長方形を呈し、薄く扁平な一群 (62-1～4)。

II類は、I類に比して断面形が扁平な一群である。62-2・3は小型のものである。62-3の擦り面は凹型で比較的細かい擦り痕が残る。62-4は切断痕が裏面に残る。擦り面の端部には溝状の窪みが見られる。II類の石材は62-1・3・4が砂岩と見られる。

II b類…断面形は薄く扁平で、末端が石斧の形をしたようなもの (62-5)。

62-5の1点のみ該当する。擦り痕は少ない。目も粗く仕上げ砥以外の目的で使用したものと考えられる。石材は砂岩である。

III類…いずれにも属さない不定型な一群 (62-6～11)。

62-7は1面のみ面取りされている。表面はざらついており、擦り痕は少なく敲打痕による凹痕が確認される。62-9・11も敲打痕が多く、断面は丸みを帯びている。これら3点は仕上げ砥以外の目的で使用されたものと思われる。62-9は柱穴から出土しており、根石に転用されたものと考えられる。

#### (3) 紡錘車 (第63図)

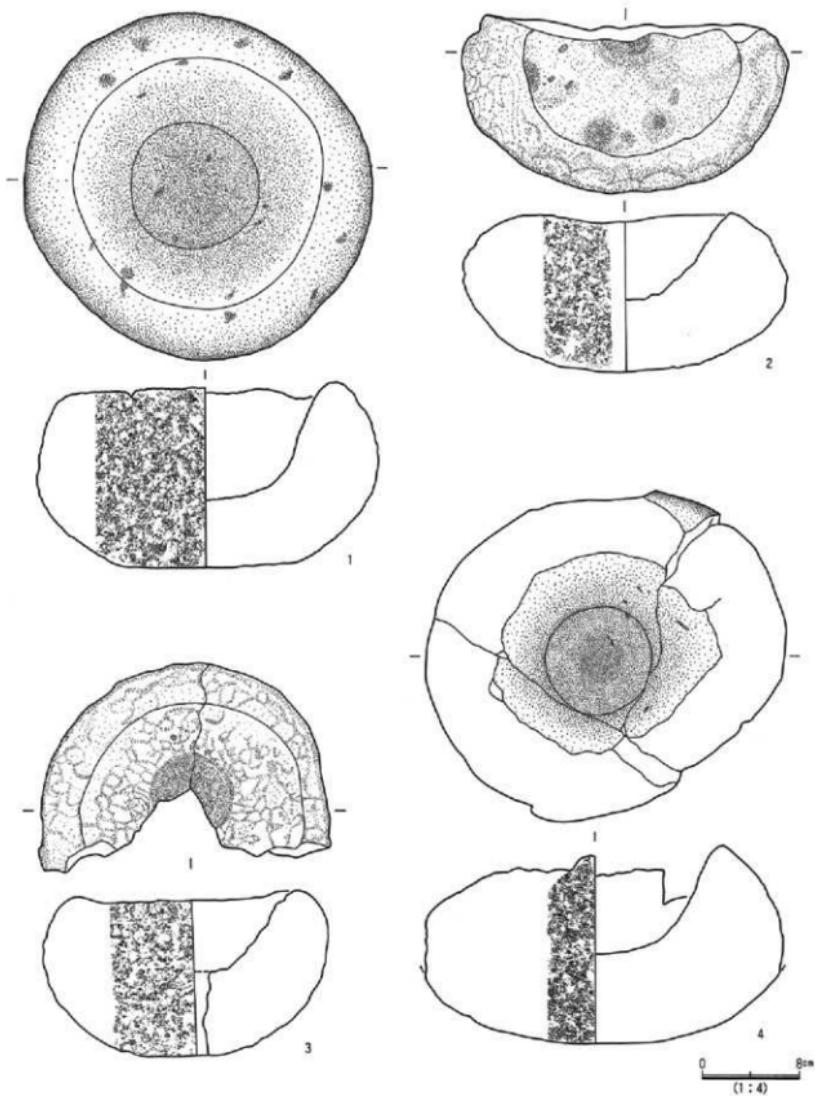
紡錘車は土製品が2点、石製品が1点出土している。63-5は石製の紡錘車である。石材は火成岩質のものである。断面は丸みを帯びている。63-6・7は土製の紡錘車である。いずれも径55mm前後である。63-6は歪みが見られる。断面形は方形で、中央部がくぼんだ形になっている。63-7の断面形も方形を呈する。

#### (4) 基石 (第63図)

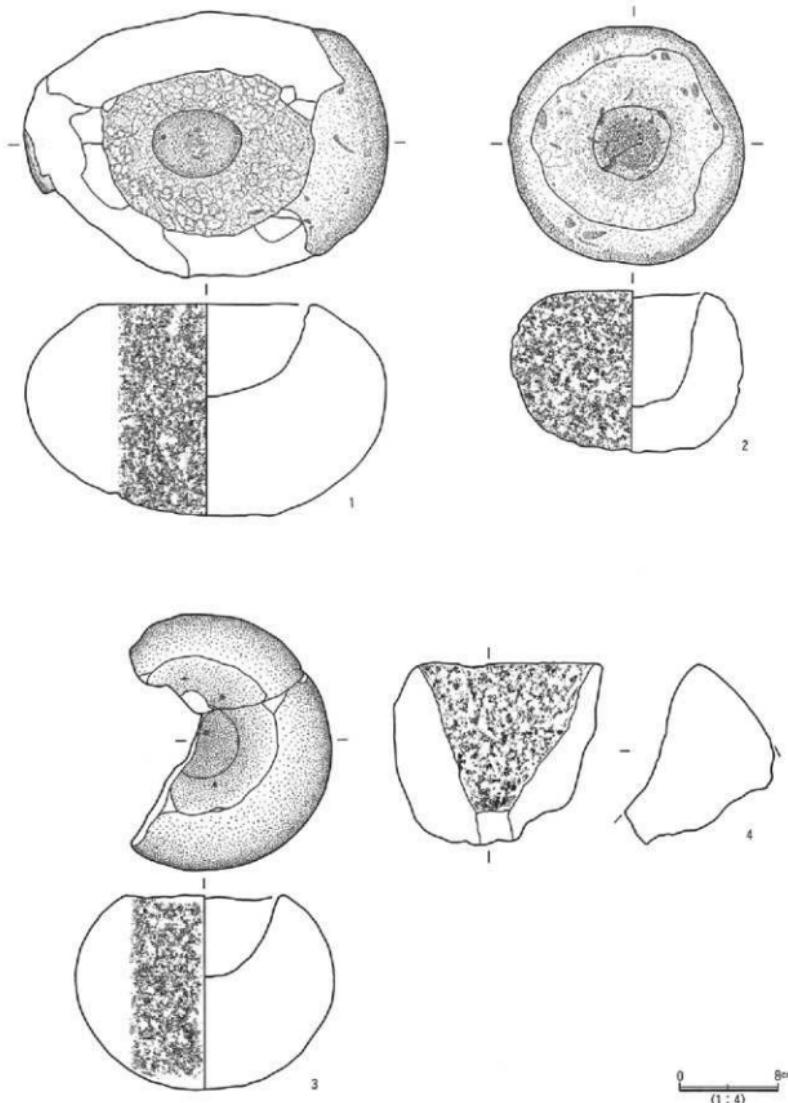
基石と見られる石製品は7点出土している。S P 96の床面から投棄された状態で出土している。平面形はいずれも不整円形で、径11～18mmの範囲内であり、厚さは5～7.5mmと扁平な形をしている。重さは1.1～2.5gの範囲に入る。色調は暗灰色を呈するものが4点、他は灰、灰白、青灰色を呈するものがそれぞれ1点ずつである。石材は暗灰色を呈するものが安山岩、灰白・青灰色を呈するものが砂岩のものと見られる。いずれも表面を磨き円形に成形しているものと考えられる。

#### (5) 円盤状有孔石製品 (第63図)

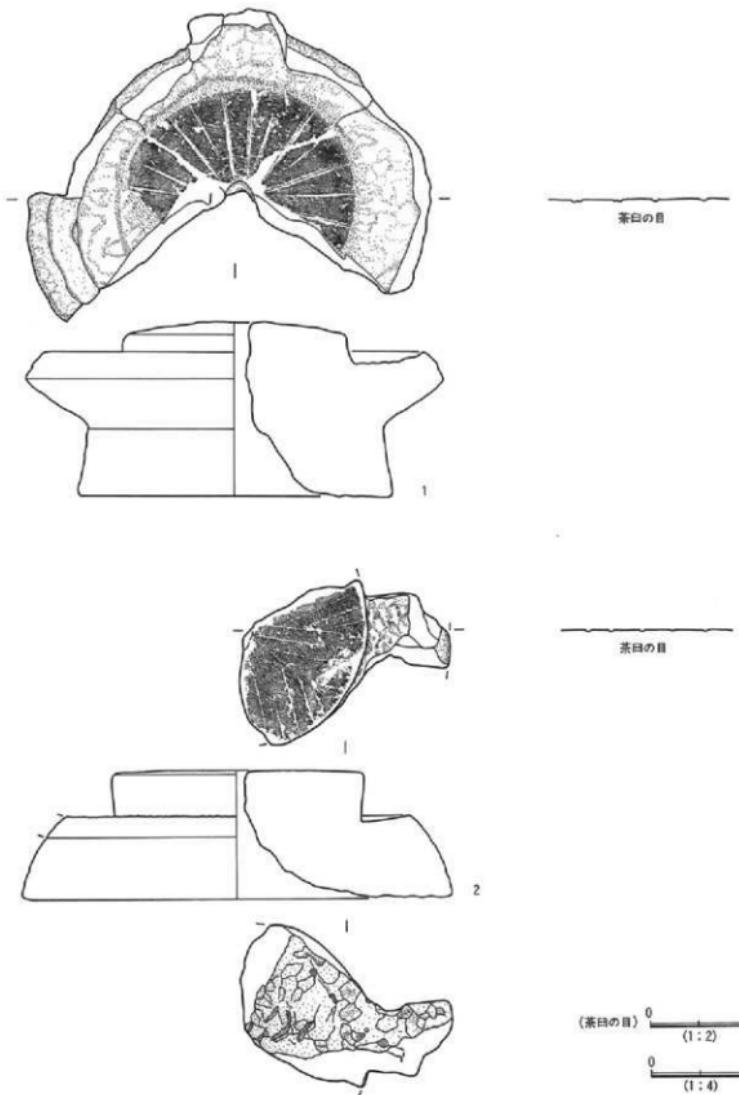
S D 298の覆土内から4点まとめて出土した。平面形は径82～86mmの歪みある円形を呈し、中央部に径5～6mmの軸孔を有する。厚さは16～17と均一的であるが、重さは85～106gと差がある。63-2・3には、幅5mm、深さ1mm前後の窪みが軸孔を開むように加工されている。また、63-1・4、63-2の裏面には、軸孔を開むように不定形の深い窪みがある。側面には横方向の擦り痕が走り、表面には溝状の擦り痕が確認される。石材は灰白色を呈する火成岩質のものを使っている。4点とも火を受けた痕跡が残っている。車輪や戸車として用いられた可能性もあるが、対にして使ったものか、一列に並べて使ったものか用途は不明である。



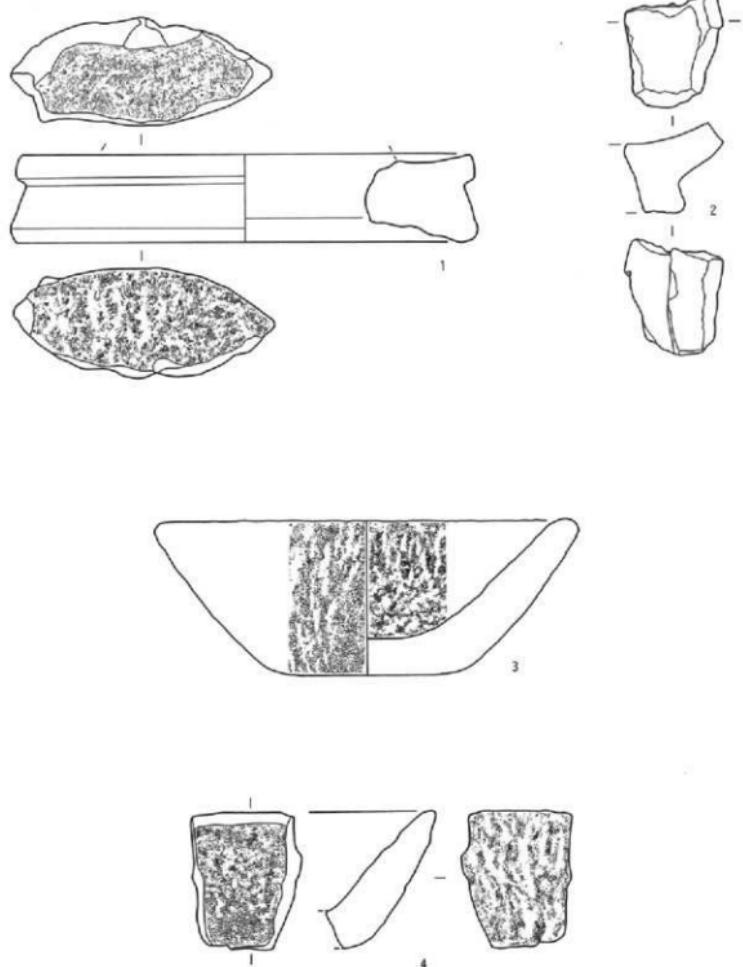
第57図 石鉢A類実測図(1)



第58図 石鉢A類実測図(2)



第59図 茶臼実測図(1)



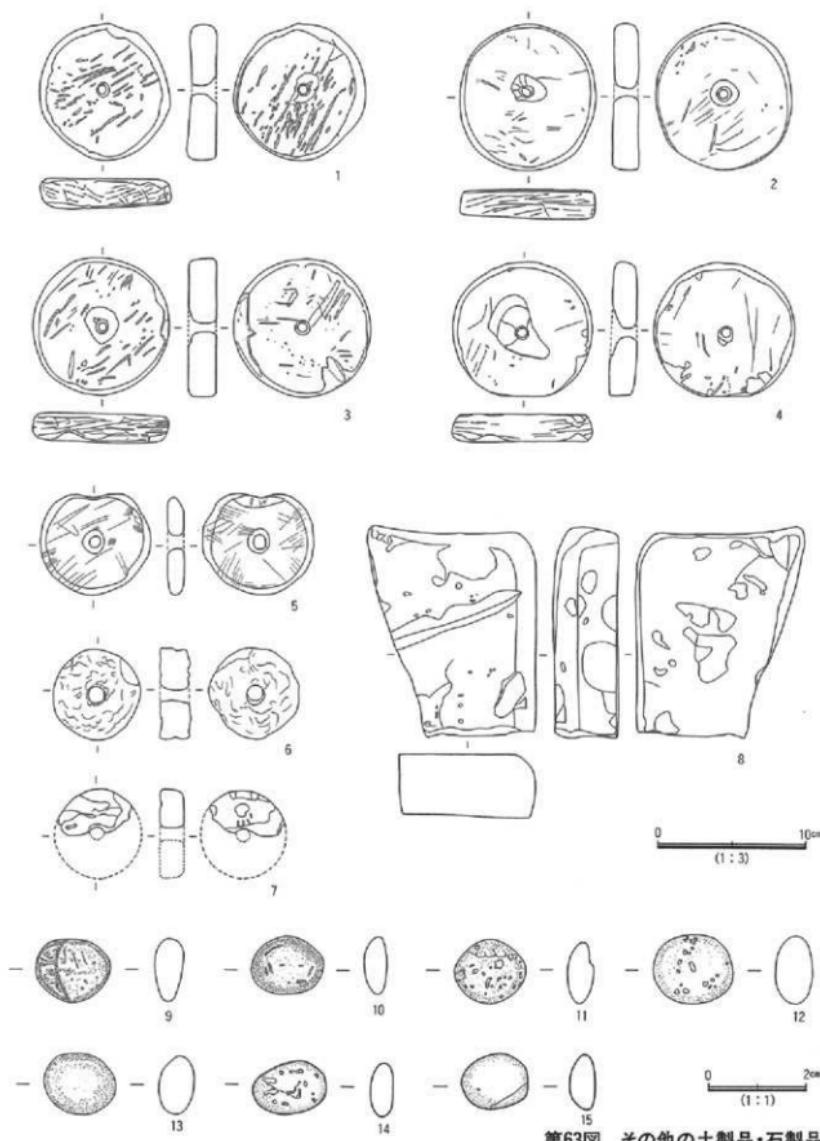
第60図 茶臼(2)・石鉢B類実測図



第61図 磨石実測図(1)



第62図 磚石実測図(2)



第63図 その他の土製品・石製品

表-7 石臼・茶臼・石鉢観察表

| 序番<br>番号     | 遺物<br>番号 | 種別  | 計測値 (mm) |       |     |       |     | 出土状況    | 登録番号               | 備考                   |
|--------------|----------|-----|----------|-------|-----|-------|-----|---------|--------------------|----------------------|
|              |          |     | 口径       | 最大径   | 高さ  | 深さ    | 厚さ  |         |                    |                      |
| 第<br>57<br>回 | 1        | 石鉢A | 216      | 282   | 148 | 92    | 56  | 120     | SP500              | RQ4                  |
|              | 2        | 石鉢A | 168      | 265   | 135 | 70    | 60  | 48      | SD323P1            | RQ41                 |
|              | 3        | 石鉢A | 170      | 232   | 135 | 65    | 70  | 74      | 16-23G             | 1/2残存、歪みあり。          |
|              | 4        | 石鉢A | 204      | 294   | 161 | 88    | 73  | 90      | SD250P2            | 内外面ノミ痕残る。            |
| 第<br>58<br>回 | 1        | 石鉢A | 180      | 297   | 173 | 75    | 98  | 70      | 12-14G             | 歪みあり。                |
|              | 2        | 石鉢A | 122      | 192   | 132 | 55    | 37  | 54      | 12-16G             | 完形。                  |
|              | 3        | 石鉢A | 130      | 209   | 162 | 68    | 94  | 20      | SD318P1            |                      |
|              | 4        | 石鉢A | -        | -     | -   | -     | -   | 12-14G  | 口縁部から体部にかけて残存。     |                      |
| 第<br>59<br>回 | 1        | 高臼  | 180      | 142   | 304 | -     | -   | 362     | SD250P             | 3/4残存、散射状の顕面。石材安山岩か。 |
|              | 2        | 高臼  | (206)    | 105   | -   | -     | -   | (342)   | SD250P             | 散射状の顕面残存。            |
| 第<br>60<br>回 | 1        | 茶臼  | -        | -     | -   | (364) | -   | (374)   | SD250P             | 底部から底部にかけて残存。        |
|              | 2        | 高臼  | -        | -     | -   | -     | -   | 22-16G  | 底部から底部にかけて1/3破片残存。 |                      |
|              | 3        | 石鉢B | 336      | 127   | 97  | 30    | 120 | SP286F  |                    | 内外面にノミ痕残る。           |
|              | 4        | 石鉢B | (300)    | (113) | 78  | 25    | -   | SD250P2 |                    | 内外面にノミ痕残る。           |

表-8 砥石観察表

| 序番<br>番号     | 遺物<br>番号 | 計測値 (mm x) |     |    |     |           | 出土状況           | 色調  | 分類         | 備考 |
|--------------|----------|------------|-----|----|-----|-----------|----------------|-----|------------|----|
|              |          | 長さ         | 幅   | 高さ | 厚さ  | 底径        |                |     |            |    |
| 第<br>61<br>回 | 1        | 127        | 42  | 44 | 290 | 25-13G    | 10YR8/3灰黄      | I   | 擦痕面、擦痕多い   |    |
|              | 2        | 136        | 55  | 48 | 493 | X-O       | 5Y6/1灰         | I   | 敲打痕、擦痕3面   |    |
|              | 3        | 89         | 42  | 26 | 158 | 14-18G    | 7.5YR7/3にない複数  | I   |            |    |
|              | 4        | [52]       | 32  | 24 | 78  | 15-15G    | 5YR7/4にない複数    | I   | 擦痕面、側面凹凸あり |    |
|              | 5        | [61]       | 30  | 30 | 82  | 13-15G    | 10Y1/4灰白       | I   | 擦痕比較的少ない   |    |
|              | 6        | [67]       | 37  | 18 | 75  | SB110-2E2 | 10YR8/2灰白      | I   | 擦痕面、擦石軽用か。 |    |
|              | 7        | 88         | 35  | 20 | 141 | SD319     | 5Y6/1灰         | I   | 擦痕面        |    |
|              | 8        | 142        | 44  | 34 | 281 | 18-29G    | 2.5GY7/1明瞭リープ灰 | I   | 擦痕面        |    |
|              | 9        | [52]       | 75  | 26 | 106 | SD40F     | 2.5Y6/1黄灰      | I   | 2面擦痕、凹面    |    |
|              | 10       | [70]       | 63  | 23 | 111 | 9-11G     | 2.5YR8/4にない赤褐  | I   | 擦痕面、凹面     |    |
| 第<br>62<br>回 | 1        | 149        | 41  | 15 | 122 | 25-8G     | 10YR8/2灰白      | IIa | 擦痕2面、断面薄い  |    |
|              | 2        | 45         | 26  | 7  | 8   | 17-18G    | 7.5YR8/4にない複数  | IIa |            |    |
|              | 3        | 93         | 42  | 6  | 34  | 11-20G    | 10YR6/4にない黄褐   | IIa | 2面擦痕、擦痕多い  |    |
|              | 4        | 131        | 53  | 19 | 151 | 21-13G    | 10YR6/3にない黄褐   | IIa | 2面擦痕、切削板   |    |
|              | 5        | 115        | 43  | 19 | 141 | 22-18G    | 10Y6/2オリーブ灰    | IIb | 擦痕少        |    |
|              | 6        | [107]      | 43  | 22 | 218 | 11-29G    | 5GYR8/1灰白      | III |            |    |
|              | 7        | [67]       | 90  | 33 | 165 | SD298     | 2.5Y7/1黄灰      | III | 面凹1面       |    |
|              | 8        | [92]       | 90  | 40 | 235 | 13-13G    | 2.5GY8/1灰白     | III | 側面斜打痕、3面擦痕 |    |
|              | 9        | [72]       | 137 | 25 | 351 | SP219     | 2.5YS/1黄灰      | III | 目盛り        |    |
|              | 10       | [87]       | 63  | 74 | 334 | SD40F     | 2.5Y8/2灰白      | III | 2面擦痕       |    |
|              | 11       | [115]      | 75  | 45 | 642 | SP4       | 2.5GY8/1灰白     | III |            |    |

表-9 その他の石製品・土製品観察表

| 序番<br>番号     | 遺物<br>番号 | 種別  | 器種   | 計測値 (2.5g範囲) |     |      |      |      | 出土状況    | 登録番号  | 備考               |
|--------------|----------|-----|------|--------------|-----|------|------|------|---------|-------|------------------|
|              |          |     |      | 長さ(径)        | 軸径  | 幅    | 厚さ   | 重量   |         |       |                  |
| 第<br>63<br>回 | 1        | 石製品 | 車輪力  | 55           | 6   | -    | 17   | 85   | SD298F  | RQ9-3 |                  |
|              | 2        | 石製品 | 車輪力  | 83           | 6   | -    | 16.5 | 102  | SD298F  | RQ9-2 | 軸孔の周りにくぼみあり。     |
|              | 3        | 石製品 | 車輪力  | 82           | 5   | -    | 17   | 106  | SD298F  | RQ9-1 | 軸孔の周りにくぼみあり。     |
|              | 4        | 石製品 | 車輪力  | 86           | 6   | -    | 16   | 103  | SD298F  | RQ9-4 |                  |
|              | 5        | 石製品 | 動輪車力 | 68           | 7   | -    | 16   | 30   | SD337P1 | RQ10  |                  |
|              | 6        | 石製品 | 動輪車力 | 55           | 10  | -    | 19   | 62   | 21-12G  | RQ1   | 断面にくぼみあり。        |
|              | 7        | 石製品 | 動輪車力 | (54)         | (9) | -    | 15   | (10) | SD86F   |       |                  |
|              | 8        | 石製品 | -    | 124          | -   | 99   | 38   | 667  | SD168P1 |       | 性格不明。側面丸みを帯びている。 |
|              | 9        | 石製品 | 磨石力  | 18           | -   | 15.5 | 5.5  | 1.5  | SP96F   | RQ9   | 色調-暗灰            |
|              | 10       | 石製品 | 磨石力  | 12           | -   | 14   | 5    | 1.54 | SP96F   | RQ9   | 色調-暗灰            |
|              | 11       | 石製品 | 磨石力  | 13           | -   | 14   | 5    | 1.55 | SP96F   | RQ9   | 色調-暗灰            |
|              | 12       | 石製品 | 磨石力  | 14           | -   | 16   | 7.5  | 2.5  | SP96F   | RQ9   | 色調-灰             |
|              | 13       | 石製品 | 磨石力  | 12           | -   | 14   | 7    | 1.75 | SP96F   | RQ9   | 色調-灰白            |
|              | 14       | 石製品 | 磨石力  | 11           | -   | 15   | 4.5  | 1.1  | SP96F   | RQ9   | 色調-暗灰            |
|              | 15       | 石製品 | 磨石力  | 12           | -   | 15   | 5    | 1.25 | SP96F   | RQ9   | 色調-青灰            |

## 7 金属製品・銭貨・木製品・その他の出土遺物

### (1) 金属製品（第64図）

出土した金属製品の大部分は性格が不明なものであるが、その中には武具、建築部材なども含まれている。つぎに主な遺物について概述する。

**武器・武具類** 武具は、刀子、鉄鎌、鉄砲玉、鞘などが出土している。64-1は刀子である。上部が欠損しており、長さは不明である。最大幅は33mm、厚さ12mmを測る。S T 234の3層から出土している。64-2は刀子と考えられる。刀部から柄が細くでいる。64-3は鉄鎌と考えられる。雁又式であるが箭頭部は欠損している。割れ口の断面は板状を呈する。柄部には凹凸が見られる。64-15は鉄砲玉と考えられる。鉛製で径10mm前後であるが歪みが見られる。重さは4.17gを測る。64-16は鐸である。青銅製である。一枚の板状の部材を折り曲げ、接点には別の部材でつないでいる。

**建築用具** 建築用具と見られる金属製品は、柱穴からの出土が多い。64-10は鉄釘と考えられる。長さは75ミリを測り、断面は方形を呈する。64-12も鉄釘と考えられる。頭部は円形を呈する。端部は欠損している。この他性格は不明であるが、64-11・13・14なども建築部材と見られる。

### (2) 銭貨（第65図）

銭貨は9点出土している。このうち、65-1・2・8が重なって出土したものである。65-1の「至道元寶」、2の「熙寧元寶」、3の「政和元寶」が北宋銭で、65-4の「洪武通寶」、5の「宣德通寶」が明銭である。65-7・8は無文である。65-9の「一錢」は昭和15年鑄造のもので、この地にあった福荷社への賽銭と考えられる。

### (3) 木製品（第65図）

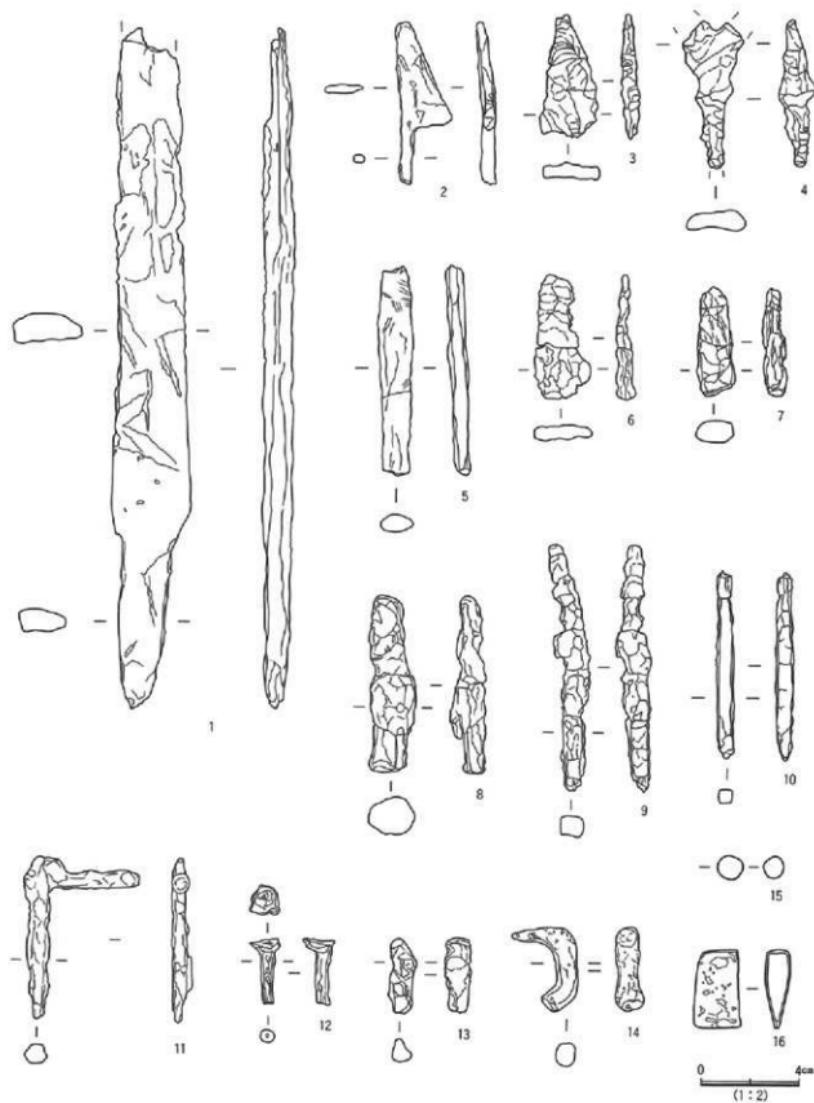
出土した木製品は、すべてSB50の柱根である。遺存状態は良くない。65-10は比較的の残存しているものであり、幅83mm前後の角材である。65-13も角が面取りされた様子が分かる。

### (4) その他の出土遺物

65-14は籠甲製の簪である。西側曲輪から出土している。長さ127mm、幅9mm、厚さ5mmを測り、断面は隅丸方形状を呈する。刀部は耳搔き状になり、足は分かれていません。幕末期の簡略化した簪と考えられる。

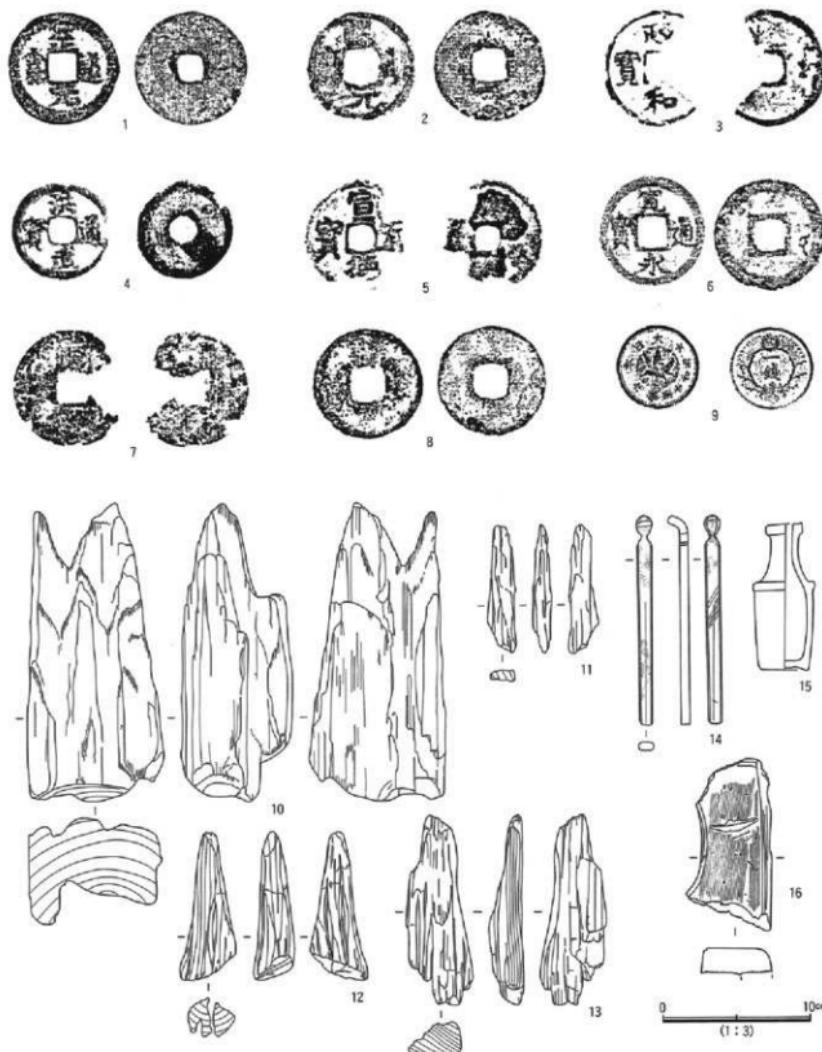
ガラス製品は掘手の三重土壙から出土している。個体数では3~4点に上ると見られるが、実測可能な1点のみ図下した。65-15は、高さ88mmを測り、断面形は体部と頸部の境と口縁部が張り出した構造である。色は無色透明で、薬瓶と考えられる。

65-16は行火である。土製のもので方形状を呈する。掘手の三重土壙から出土した遺物で、上記のガラス製品、56-12~16の陶磁器などとまとめて出土している。



第64図 金属製品実測図

出土した遺物



第65図 錢貨・その他の出土遺物

表-10 金属製品観察表

| 辨別<br>番号 | 遺物<br>番号 | 品 別   | 材 質 | 寸 法 (mm) |      |    | 出 土 位 置 | 備 考                       |
|----------|----------|-------|-----|----------|------|----|---------|---------------------------|
|          |          |       |     | 長さ       | 幅(径) | 厚さ |         |                           |
| 第<br>54  | 1        | 刀子    | 鉄   | 290      | 30   | 10 | ST2341P | R48。上端欠損。                 |
|          | 2        | 刀子    | 鉄   | 65       | 15   | 8  | SD120   | 折がのびる刀子か。                 |
|          | 3        | 刀子カ   | 鉄   | 54       | 28   | 6  | SP197   | 断面方形。下端欠損。                |
|          | 4        | 鉄劍    | 鉄   | 62       | 34.5 | 7  | ST2341P | 二叉に分かれ。圓盤式の鉄劍。端部欠損。       |
|          | 5        | 板状鉄製品 | 鉄   | 120      | 15   | 8  | ST2341P | 表面微方向の傷あり。                |
|          | 6        | 板状鉄製品 | 鉄   | 51       | 23   | 10 | SD164   |                           |
|          | 7        | 板状鉄製品 | 鉄   | 39       | 10   | 5  | SD25    | 両端部欠損。                    |
|          | 8        | 板状鉄製品 | 鉄   | 74       | 24   | 21 | SP92    |                           |
|          | 9        | 板状鉄製品 | 鉄   | 106      | 25   | 10 | SP158   | 先端部尖る。                    |
|          | 10       | 釘カ    | 鉄   | 75       | 5    | 8  | SP203   | 断面方形。先端部尖る。               |
| 第<br>55  | 11       | 板状鉄製品 | 鉄   | 71       | 49   | 8  | SD318P  | 駆け引げ。直角に曲がる。端部部材か。        |
|          | 12       | 釘カ    | 鉄   | 29       | 13   | —  | SP217   | 断面円形。上端部一回り大きい円孔。         |
|          | 13       | 板状鉄製品 | 鉄   | 32       | 14   | 13 | SD40    | 断面円形。底角に曲がる端部部材か。         |
|          | 14       | 金銀製品  | 純   | 32       | 10   | 9  | SP222   | 「U」字型を呈する。                |
|          | 15       | 銅鏡玉カ  | 銅   | —        | 10   | —  | 12-17G  | 歪みあるは形。重量4.17g。           |
|          | 16       | 鏡     | 銅   | 32       | 19   | 10 | 15-29G  | 板状の部材を曲げ、接合部には割の部材をあてている。 |

表-11 錢貨観察表

| 辨別<br>番号 | 遺物<br>番号 | 錢 貨 名 | 剪 券 年 | 計 測 値 (mm) |   |     | 材 質    | 出 土 位 置 | 備 考      |
|----------|----------|-------|-------|------------|---|-----|--------|---------|----------|
|          |          |       |       | 直 径        | 幅 | 厚 さ |        |         |          |
| 第<br>55  | 1        | 至道元寶  | 995年  | 23         | — | 1.2 | 銅      | 18-28G  | 北宋。      |
|          | 2        | 熙寧重宝カ | 1068年 | 22         | — | 1.1 | 銅      | 18-28G  | 北宋。      |
|          | 3        | 歐和元寶カ | 1111年 | 34         | — | 1.2 | 銅      | 18-28G  | 北宋。      |
|          | 4        | 洪武通寶  | 1368年 | 20         | — | 1.7 | 銅      | 20-31G  | 明。       |
|          | 5        | 宣德通寶  | 1433年 | 22         | — | 1.6 | 銅      | SD269P  | 明。       |
|          | 6        | 寛永通寶  | 1736年 | 22         | — | 1.1 | 銅      | 19-28G  |          |
|          | 7        | 不明    | —     | 24         | — | 1.4 | 銅      | 12-22G  | 両面篆文。    |
|          | 8        | 不明    | —     | 22         | — | 1.2 | 銅      | 18-28G  | 両面篆文。    |
|          | 9        | 一錢    | —     | 17         | — | 1.7 | アルミニウム | 11-23G  | 昭和15年鋳造。 |

表-12 木製品・その他の出土遺物

| 辨別<br>番号 | 遺物<br>番号 | 種 別   | 器 標 | 計 測 値 (mm) |     |      | 出 土 位 置  | 備 考          |
|----------|----------|-------|-----|------------|-----|------|----------|--------------|
|          |          |       |     | 長さ         | 幅   | 厚さ   |          |              |
| 第<br>55  | 10       | 木製品   | 柱樋  | 173        | 83  | 69   | SB56-E21 |              |
|          | 11       | 木製品   | 柱樋  | 76         | 15  | 10   | SB56-E22 |              |
|          | 12       | 木製品   | 柱樋  | 90         | 30  | 35   | SB56-E23 |              |
|          | 13       | 木製品   | 柱樋  | 115        | 41  | 20   | SB56-E24 | 14と同一個体。     |
|          | 14       | 龜甲製品  | 龜   | 127        | 9   | 5    | 22-28G   | 色調一明黄褐色。南宋期。 |
|          | 15       | ガラス製品 | 小瓶  | 高さ88       | 口径9 | 壁径29 | 2トレンチ    | 口縁沿みあり。葉瓶か。  |
|          | 16       | 土製品   | 行火か | (104)      | 52  | (16) | 9-14G    |              |

## VII まとめと考察

### 1 調査のまとめ

今回の調査は、東北横断自動車道酒田線（寒河江～西川間）建設工事にかかる緊急発掘調査である。調査の結果を要約すると次のような。

- (1) 睦合館跡は山形県西川町大字睦合地内に所在する。東流する寒河江川の左岸、河岸段丘上に立地し、標高は220～235m前後を測る。遺跡の面積は約45,000m<sup>2</sup>で、今回の発掘調査では事業区面積20,200m<sup>2</sup>のうち東側と西側の斜面については測量調査のみを行い、主郭のはば全域、土壘と空堀、曲輪の一部について精査を行った。その結果、16世紀を主体とする戦国期の館跡であることが分かった。また、当地には福荷社、秋葉神社があり、近世以降も人の出入りがあったことが分かる。
- (2) 睦合館跡は、現存する山の地形そのものが1つの大きな城郭といえる。中央部の主郭は南北約70m、東西約110mの菱形状を呈し、面積は約6,000m<sup>2</sup>に上る。そして、主郭の東から西側にかけては合計15段の曲輪を巡らし、街道筋からの攻撃に備えている。また、主郭の北側には三重の土壘と空堀を築き、尾根筋からの攻撃に備えている。主郭の東・西側は深い沢となっている。このように、自然の地形を巧みに利用しつつそれを改良した構造であることが分かる。
- (3) 主郭の虎口は東側と、南側に確認された。東側の虎口は掘手側から、南側の虎口は街道筋からの入り口である。街道筋から主郭への登り口は現在の睦合小学校裏からと、長流寺脇からの2カ所で確認できた。また、主郭内には30～50cmの階段状の段差がある。段差は主郭の縁部に顕著に現れており、主郭中央部と縁部では約2mの標高差がある。この段差は盛土と削り出しにより作られており、主郭の縁部には整地された跡が残る。整地された面の下から遺構も確認でき、修復された形跡が伺える。
- (4) 主郭内で登録した遺構は、掘立柱建物跡10棟、竪穴建物跡1棟、井戸跡1基、溝跡92条などである。検出された遺構は主郭中央部から北側にかけて集中しており、東・南側の遺構は希薄である。検出した建物跡の中で規模の大きな建物であるS B 50は、S D 25・238のL字型の区画溝を伴う。S B 110は、S A 130・S D 25の区画溝・柵列を伴う。主郭北東角に位置するS B 1・2は、S D 20・21のL字型溝跡により区画されている。これらのことが示すように、主郭内は前述した階段状の段差と溝跡により計画的に区割りされていることが指摘できる。竪穴建物跡は長軸8.4m、短軸3.2mを測り、比較的大きな建物である。覆土内からは刀子、雁股鎌などの武具が検出されており、倉庫として利用されたものと考えられる。

検出された溝跡の中には、S D 140・198などのように柱穴を伴い柵列をなす溝もある。また、前述した主郭内の段差の部分には平行した浅い溝跡が走る。溝跡は磁北から東に5°・10°・15°で傾く一群と、磁北から西に5°前後で傾く一群と大きく4群が確認できるが、出土遺物は少なく、切り合いも明確に前後関係が確認できないため新旧関係についての言及は避けたい。

(5) 主郭北側の土壘 S F 500・510は、主郭側からの盛土と、空堀側からの盛土により構築されている。S F 520・530は削土により段差を作り、三重の土壘と空堀が構築されたことが指摘できる。S F 510に設定した3トレンチからは柱根、柱穴跡が検出され、堀手の防衛施設は修復を受け現存する横堀と土壘が作られたといえる。S F 510の盛土内から出土した石鉢A類には、土壘を構築する際の祭祀的な意味合いも考えられる。

S F 500・510の北側の空堀SD600は一部薬研堀の様相を呈する。S F 500の南側整地層下からは、主郭北側から東側に廻る堀跡ともいべきSD250が検出された。SD250には配石列も確認されている。主郭の居住域を拡げるためにSD250が整地され、平坦にされたものと考えられる。S F 500は、中央部で分断され、SD600には土橋が架けられた。また、SD600の底からは井戸S E 220が検出されたが、これらは後に作られた遺構といえる。この付近からは近現代の陶磁器を含む生活用具が数多く出土している。

(6) 曲輪は主郭を南東角から西側にかけて取り囲むように構築されている。曲輪は1~3mの比高差により構築されており、西側の最下端郭410から主郭までは約6mの比高差がある。主郭下には郭390・340のような細長い腰曲輪を作る一方、その下側には郭380・400のような比較的広い曲輪を作り出していることが指摘できる。これらの曲輪は設定したトレンチにより盛土と削土により構築されていることが分かる。曲輪の縁部には溝跡が検出できたものもあるが、整地されていることなどもあり他の遺構については確認できなかった。また、土留め状の石積みが郭350で確認されている。

(7) 出土した遺物は、縄文時代の石器、古代の須恵器の他はすべて中世以降のものである。青磁・白磁・染付などの輸入陶磁器、瀬戸・美濃系陶器、肥前系・唐津系陶磁器、石鉢・茶臼・砥石・碁石などの石製品、武具・建築部材・錢貨などの金属製品、その他木製品、簪などで、整理用のコンテナにして計14箱に上る。陶磁器類については次節にて検討を加えるので、ここでは石製品、金属製品についてまとめる。

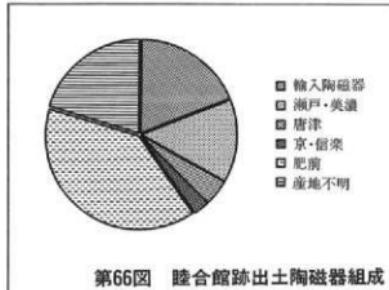
疊合館跡で出土した火成岩質の礫の内面を削り、外面を円形に成形したような石鉢A類は県内の出土例は知られていない。火薬の調合などに使われたものと考えられる。今後、中近世の発掘例を待ちたい。石鉢B類、茶臼については藤島城、荒川2遺跡、山形城など中近世の遺跡での発掘例が見られる。いずれも城館跡からの出土であり、疊合館の性格を特徴づけられるものと考える。碁石はSP96から一括で7点出土している。黒石・白石ともに石製である。鎌倉の北条時房・顯時邸跡の土坑内に投棄されたものと類似する。SD298から4点まとめて出土した円盤状有孔石製品は、車輪か戸車として使われたものとも考えられる。

金属製品は、武具として刀子、雁股鎌、鉄砲玉らしき球状の鉛製品などが出土している。鉄製の武具を扱うにあたり、使用されたと見られる砥石の出土量も多く、出土して砥石のうち80%が仕上げ砥として使われたものと見られる。この他、棒状や板状の金属製品が出土しているが、性格は不明なものが多い。

## 2 睦合館跡出土陶磁器の検討（第66～68図）

睦合館跡の出土遺物の中で最も出土量が多く破片数で181点が出土している。ほとんどの陶磁器片が遺物包含層からの出土であり、遺構との関係は不明なところが多いが、次の4時期に分け、分析していく。

- I期 15世紀後半～16世紀後半
- II期 16世紀末～17世紀前半
- III期 17世紀後半～19世紀前半
- IV期 19世紀後半～

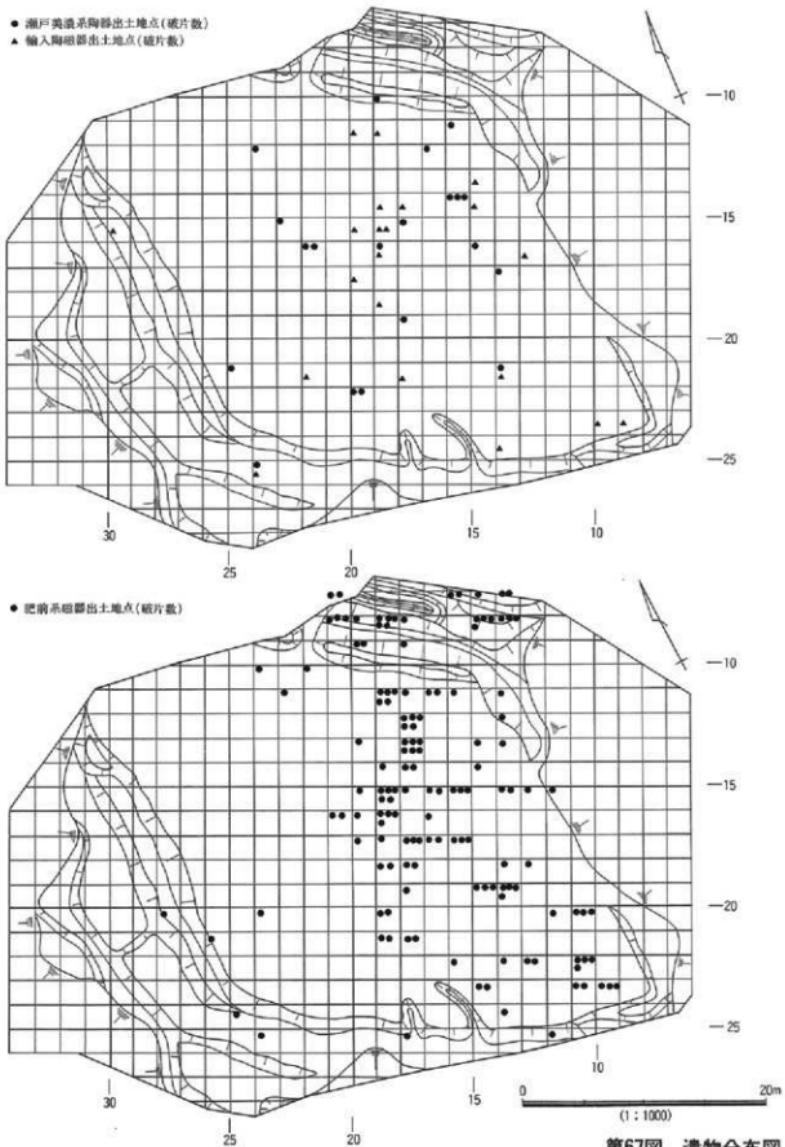


I期に当たる陶磁器は、青磁・白磁などの輸入陶磁器、瀬戸・美濃系陶器、瓦質土器などがあげられ、出土陶磁器全体の内、約3割に相当する。I期の年代は幅を持たせている。詳しくは次節で述べるが、この時期は睦合館跡周辺一体に寒河江大江氏や白鳥氏、東海林氏などの領地が入り乱れていた時期である。この時期の遺物は遺構の覆土内から出土しているものが比較的多い。瓦質土器片53-15が出土しているSD141、大窯期の端反り皿が出土しているSD283などはこの時期の遺構といえる。調理具の擂り鉢53-11などもこの時期の遺物と考えられるがその他の陶磁器はすべて供膳形態のものである。石臼、茶臼などの石製品の中には、SD250から出土しているものが多く含まれており、これらもI期に該当するものと考えられる。睦合館と同じ戦国期の城館跡である米沢市の荒川2遺跡から出土した輸入陶磁器・瀬戸・美濃系陶器の組成と類似していることが指摘できる。

II期は西村山一帯が最上氏領となる時期である。II期に当たる陶磁器は、輸入陶磁器の染付、肥前系の初期伊万里である。輸入陶磁器は51-19がII期に相当する。初期伊万里は、椀・皿の破片9点が出土している。初期伊万里は、西村山地方ではまだ類例が少ない、今後この流通経路について分析していく必要がある。出土した初期伊万里はすべて火を受けた痕跡がある。一方、III期遺構の遺物についてはこのような痕跡は見られない。睦合館の成立期がこの時期を下限としていることが考えられる。

III期は、最上氏が改易となつた後から近世末までの時期である。遺物包含層から出土したものが大半を占める。遺構内から出土したものもわずかに見られるが、これらは流れ込みといえる。この時期に該当する陶磁器には、肥前系磁器、唐津系陶器、京・信楽系陶器などがあるが、肥前系磁器の占める割合が高く、この時期の遺物の約9割に相当する。おもに、18世紀以降見られる「くらわんか」系の椀が多い。「くらわんか」系の椀は同じ西川町に所在する横畠櫛後、水沢館後でも出土しており、この時期には当地域においても一般的に流通していたものと考えられる。この他に、長頸壺、仏壇などの器種もわずかに見られる。本館跡には稻荷様・秋葉神社が祀られており、これらとの関係が指摘される。

IV期は明治以降、近現代の遺物である。瀬戸産の磁器を中心とする。主郭北側の三重の土塁と空堀からまとめて出土している。



第67図 遺物分布図

| 年<br>代 | 輸入陶器<br>(青磁・白磁・淡竹) | 酒器・米漬器類<br>青磁・灰瓦・角形 | 貯蔵系器皿(箱形)     |                | 國<br>原                          | 直<br>通         |
|--------|--------------------|---------------------|---------------|----------------|---------------------------------|----------------|
|        |                    |                     | 前             | 後              |                                 |                |
| 1500   | 54-5<br>54-6       |                     |               |                |                                 |                |
| 1550   | 55-1<br>55-4       | 55-2<br>55-1        |               |                |                                 |                |
| 1600   |                    | 55-19               | 55-7<br>55-16 | 55-6           | 55-2<br>55-15<br>55-16<br>55-15 | 55-11<br>55-9  |
| 1650   |                    |                     | 55-1<br>55-2  | 55-15<br>55-16 | 55-2<br>55-1                    | 55-11<br>55-9  |
| 1700   |                    |                     |               |                | 55-2<br>55-1                    |                |
| 1750   |                    |                     |               |                |                                 | 55-15          |
| 1800   |                    |                     |               |                |                                 | 55-16<br>55-18 |

第68図 跡合館跡出土遺物編年表

### 3 睦合館跡の年代観と周辺城館跡との関係について（第69～72図）

ここでは、睦合館跡の構造と年代観について触れた上で、周辺館跡との関係について考え、結びに変えたい。

#### (1) 調査区外の施設について

今回の発掘調査では、睦合館跡の主郭ほぼ全域と、土壘、空堀、曲輪の一部が調査対象区となり、その調査結果についてはこれまで述べたとおりである。ここでは、調査区外の曲輪群、掘手の施設について触みたい。なお、ここでは調査区外の遺構についても便宜上第69図のように番号をつけた。

曲輪群aの調査区外には、郭450・460の規模の大きな曲輪と、南端部に郭470の小さな平場が作られている。現在の睦合小学校裏からのつづら折りを登ると、最大の郭460に続く。郭460の上段には、曲輪の中では最大の規模となる郭450がある。郭450には現在秋葉神社が祀られている。曲輪群bの調査区外には、郭380の下段に郭480・490が配されている。いずれも南北端部に作られたものであり、先端部の曲輪ほど面積は狭くなる。長流寺脇からのつづら折りの道を登ってみると、途中で道は2つに分かれるが、これはいずれも郭490に続くものである。郭490の先端部には、小規模ではあるが土壘状の土盛がある。

掘手側にはこれまで述べてきたように、三重の土壘と空堀がある。これより北側は平場となっているが、この平場には、三重の土壘・空堀と直角に北にのびる土壘が2～3本平場を取り囲むように築かれている。何らかの施設があったことが考えられる。

一方、睦合館の眼下には、寒河江川に沿って六十里越街道が迫っている。第69図は、明治20年代に作られた睦合村の地籍図である。地籍図からも分かるように、この六十里越街道を挟んで両側には方形状の区割りが見られる。「台」という字名も残っており、家臣団の屋敷があったとも推測できる。

#### (2) 睦合館跡の年代観と支配体制について

睦合館は、文献や資料には現れない城館跡で、館主についても不明である。ここでは、寒河江市白岩以西の寒河江川左岸と範囲を広げ、領主の変遷などにも触れながら、睦合館の年代観について考えていく。

まず、睦合館の上限については、調査結果からの分析にとどめたい。S F 510土壘に設定したトレンチの土壤サンプルからは、先に述べたように西暦1,500年という分析結果が得られた。この年代測定結果と出土した輸入陶磁器の青磁の編年は若干異なるが、白磁の編年は合致している。本館の修復の可能性も考慮するとこの1,500年前後という年代が必ずしも上限とは断定できないが、16世紀初めには館跡として機能していたものと考えられる。当地域はこの時期「熱塩郷」と称され、白岩氏の支配下にあった。応仁二年（1468）7月2日、「出羽北寒河江あつしほ（熱塩）郷瀧之在家ノ旧家ヲ国分河内ニ交付ス」と伊達家の有力家臣である国分家の『国分文書』に記されている。白岩氏は、現在の寒河江市白岩から西川町岩根沢までの寒河江川左岸について領主権を確立しており、本館も白岩氏の支配下にあったものと推測される。この時期は前節の陶磁器分類のⅠ期に相当する。

天正12年（1584）、寒河江大江氏が山形城主最上義光との戦いに敗れた。これ以降、西川町全域は最上氏の支配となる。寒河江川左岸は白岩領となり、最上義光の甥に当たる白岩備前光広の治政下に組み入れられる。睦合館の東に隣接する長登楯は、天正年間白岩備前守光広の楯とされていることから、本館も白岩備前守光広の館、あるいは家臣の館と考えられる。元和元年（1614）、光広は庄内松根城（現柳引町松根）に移り、最上家も元和8年（1622）改易となる。睦合館もこれに伴い最上家の支配からは外れることとなるが、初期伊万里の出土状況などから何らかの形で1650年前後まで居館として成立していたものと考える。この時期を前節ではⅡ期として取り扱っており、これ以降居館として継続することはなかったものと推測できる。

### （3）戦国期の周辺館跡について

第2図の遺跡位置図からも分かるように、寒河江川沿いには数多くの中世城館址が確認されている。寒河江川右岸の吉川には鎌倉期に大江氏が本拠を構え、大江氏を中心に西村山の支配が展開されていった。その後戦国期には庄内の武藤氏に対する備えとして、大江氏や最上氏により多数の城館が築かれたものと考えられている（北畠教爾：山形県中世城館遺跡報告書第2集）。このうち、睦合館のように大規模な堀を重視した構造を持つ城館は、比較的新しい形であり、最上氏により築かれたものが多い。ここではこのような城館に注目し、睦合館との比較検討を行いたい。

**沼ノ平館（第71図）** 西川町綱取字上ノ山（第2図-14）に所在する。寒河江川の左岸に位置し、東側を寒河江川の支流である綱取川が南流する。南側に集落が開ける舌状台地上に位置する。主郭は馬の背状の峯に築かれ、面積は10a程である。主郭は高さ1.6m、幅2mの土塁により囲まれている。主郭部南側には深さ1.5～3mを測る二重の空堀で尾根が分断されている。軍記類では東海林隼人佐昌種の居城とし、その年代を天正期以降としている。

**宮内楯（第71図）** 寒河江市宮内、旧六十里越街道の北側に位置する。（第2図-32）。標高200m前後の舌状台地に立地する。主郭の南側には小規模な曲輪群を配置し、主郭の北側には大規模な堀切で尾根を遮断している。楯主は不明であるが、築城時期は戦国期とされている。

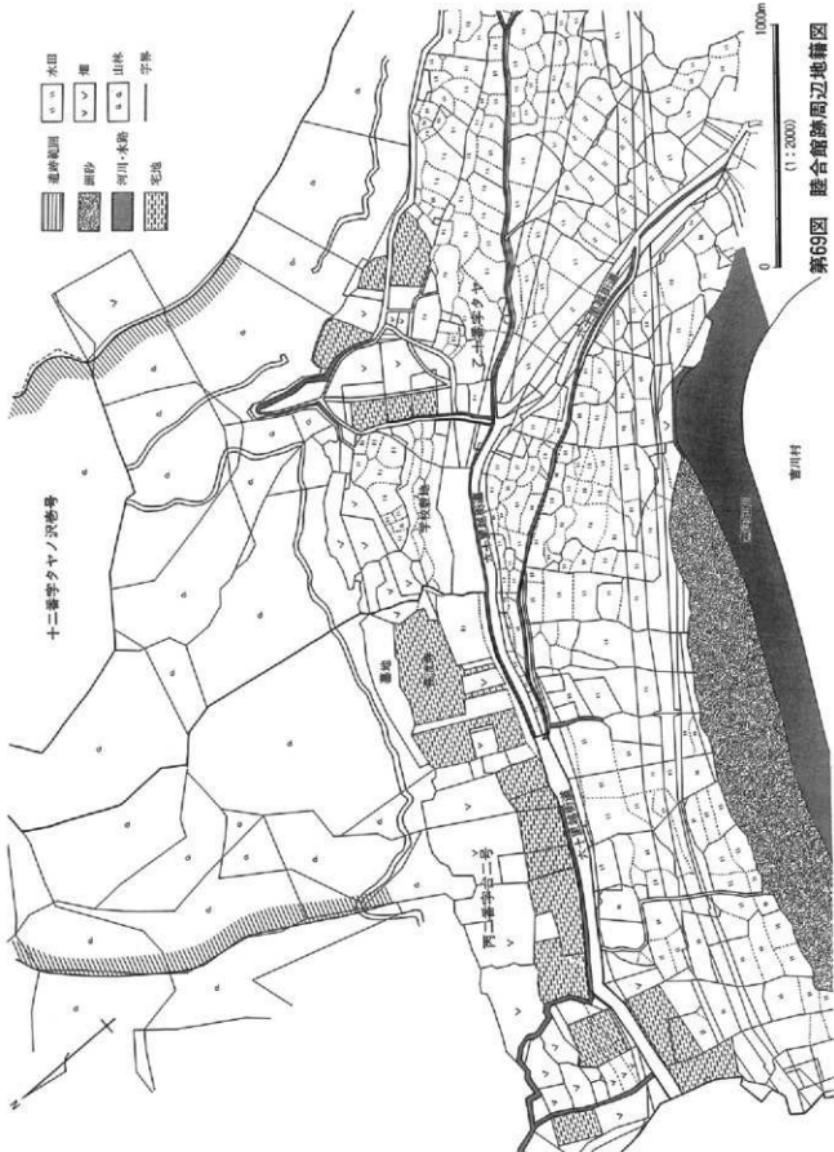
**東海林楯（第71図）** 寒河江市幸生、寒河江川の支流である熊野川沿いに位置する。主郭は東西30m、南北80m規模で、東側には帯曲輪が廻る。主郭の南西部一帯に横堀が廻り、堀の上部には土塁が築かれている。東海林康広により戦国期に作られたとされている。

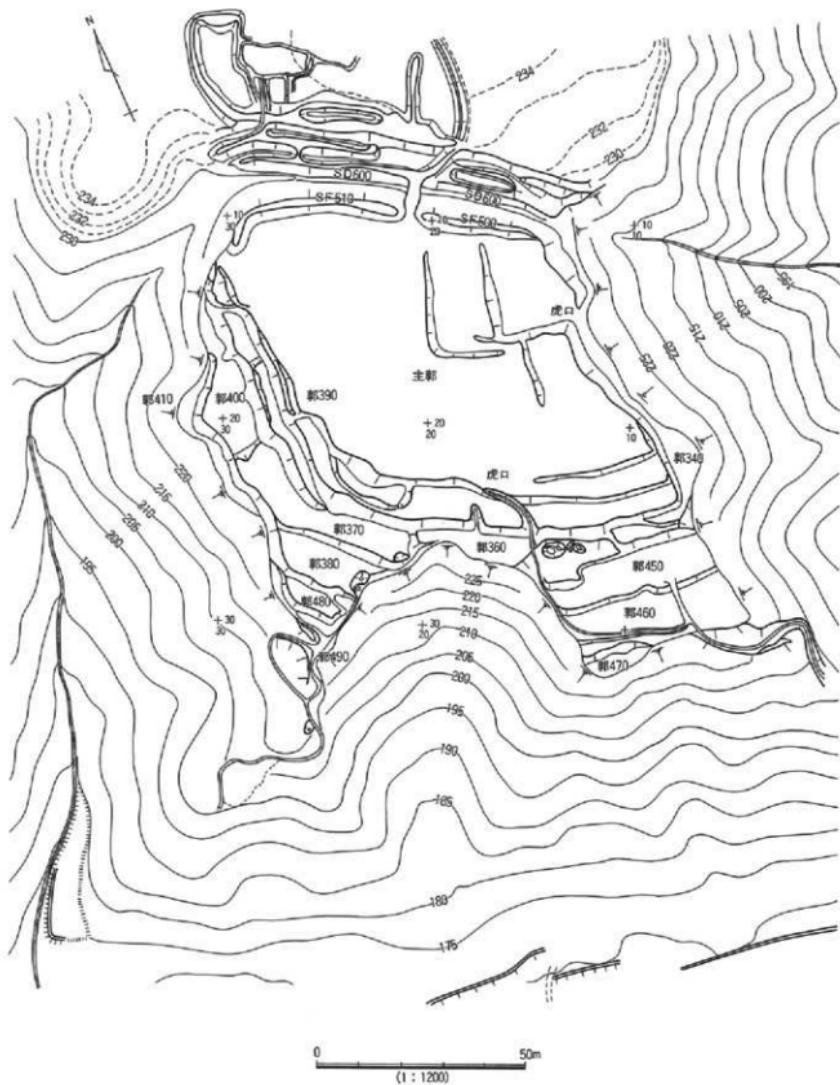
これらの3つの城館址はいずれも睦合館より規模は小さいものであるが、大規模な横堀により尾根続きを遮断するという共通点が見られる。このほかにも、睦合館の東に隣接する長登楯は開墾により破壊が著しいものであるが、主郭の南側には2～3段の曲輪群を配置し、主郭の北側は堀切で尾根続きを遮断している状況が観察できる。これらは、いずれも戦国期に造られた城館址で、横堀の発達を指摘できる例である。

西村山の城館址は天正12年に大江氏の滅亡以降、最上氏により庄内武藤氏に対する備えのために修復されているものが多い。睦合館跡も16世紀後半以降、最上氏の支配下になり手を

第69図 聖合駅周辺地籍図

吉川村





第70図 謎合館跡縄張り図

加えられ、現存する形となって残ったものであろう。しかし、他の城館址との関係、遺物の流通経路などまだまだ不明確な点が多く、改めて整理する機会を持ちたい。

最後に、寒河江川流域と同様に、最上地方に流れる鮭川、最上川沿いにも横堀の発達する城館址が多数存在する。これらも戦国期の末最上氏により手を加えられたものが多く、参考として例示したい。

**八向館** 新庄市大字本合海、最上川と新田川の合流地点の丘陵先端部に位置する。南側は断崖絶壁で最上川に直下する。三重堀で尾根続きを完全に遮断している。主郭にはわずかに土壘も残る。戦国期に築城されたと考えられる。

**京塚館** 鮭川村大字京塚、舌状丘陵部の先端に位置する。主郭南側には小規模な曲輪を数段配し、主郭北端部には土壘が築かれている。尾根続きは2条の堀切で遮断している。睦合館よりも小規模ではあるが、構造はよく似ている。

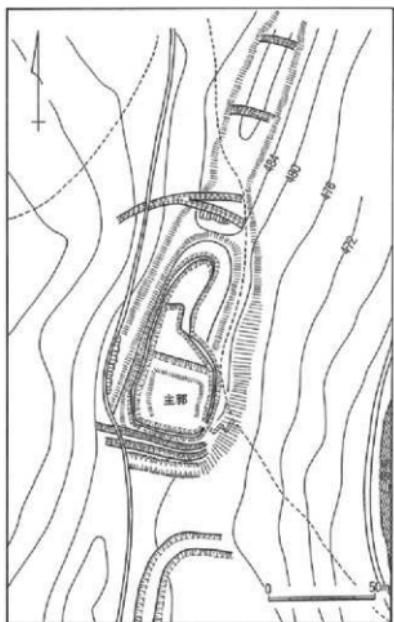
**庭月館** 鮭川村大字庭月、鮭川の右岸段丘上に位置する。主郭の南・西側には空堀（堀切）で地続きの平坦地を遮断している。主郭の西側には大規模な土壘をもうけている。空堀・土壘の規模は睦合館のS F 500土壘・S D 600空堀とほぼ同じである。

**鮭延城** 真室川町大字内町、真室川の東の台地上に位置する。この地の国人、鮭延氏の本拠で、睦合館よりも大規模な城である。主郭南東の尾根続きは三重の堀切と大きな土壘で遮断し、北東部、南西部には小規模な曲輪を何段にも構成している。

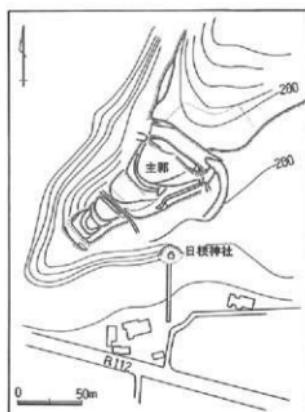
**樋山** 戸沢村大字古口、角川と最上川の合流地点、舌状丘陵の先端部に位置する。主郭の南側尾根続きを三条の堀切と土壘で遮断している。

#### ＜参考文献＞

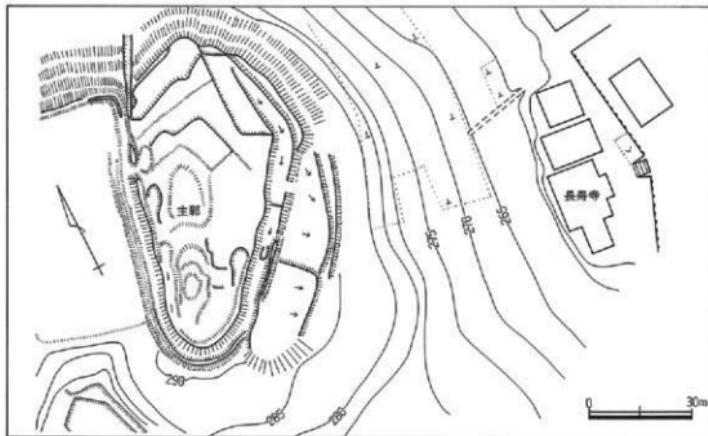
- 眞壁 建 他 1996 「横嶺跡・水沢跡発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第39集
- 須賀井新人 他 1997 「荒川2遺跡発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第43集
- 堀内 秀樹 1998 「消費遺跡出土陶磁器類の編年について」 東北中世考古学会第4回研究大会
- 森田 勉 1982 「14~16世紀の白磁の分類と編年」 貿易陶磁研究No.2
- 上田 秀夫 1982 「14~16世紀の青磁碗の分類について」 貿易陶磁研究No.2
- 小野 正敏 1982 「15~16世紀の染付、皿の分類と編年」 貿易陶磁研究No.2
- 瀬戸市史編纂委員会 編 1993 「瀬戸市史陶磁史篇四」
- 山形県教育委員会 編 1996 「山形県中世城館遺跡調査報告書第2集(村山地域)」
- 山形県教育委員会 編 1997 「山形県中世城館遺跡調査報告書第3集(庄内・最上地域)」
- 青森県八戸市教育委員会 編 1993 「根城・本丸の発掘調査」
- 新宿区厚生部遺跡調査会 編 1982 「内藤町遺跡」
- 福浦 正義 著 1993 「江戸発掘」
- 国土調査 1976 「土地分類基本調査 左沢」
- 仙台市教育委員会 編 1983 「仙台市文化財調査報告書第58集 今泉城跡」
- 西川町史編纂委員会 編 1995 「西川町史」
- 中世土器研究会 編 1995 「概説中世の土器・陶磁器」 真陽社
- 石井進・大三輪龍彦 編 1989 「よみがえる中世3 武士の都鎌倉」 平凡社



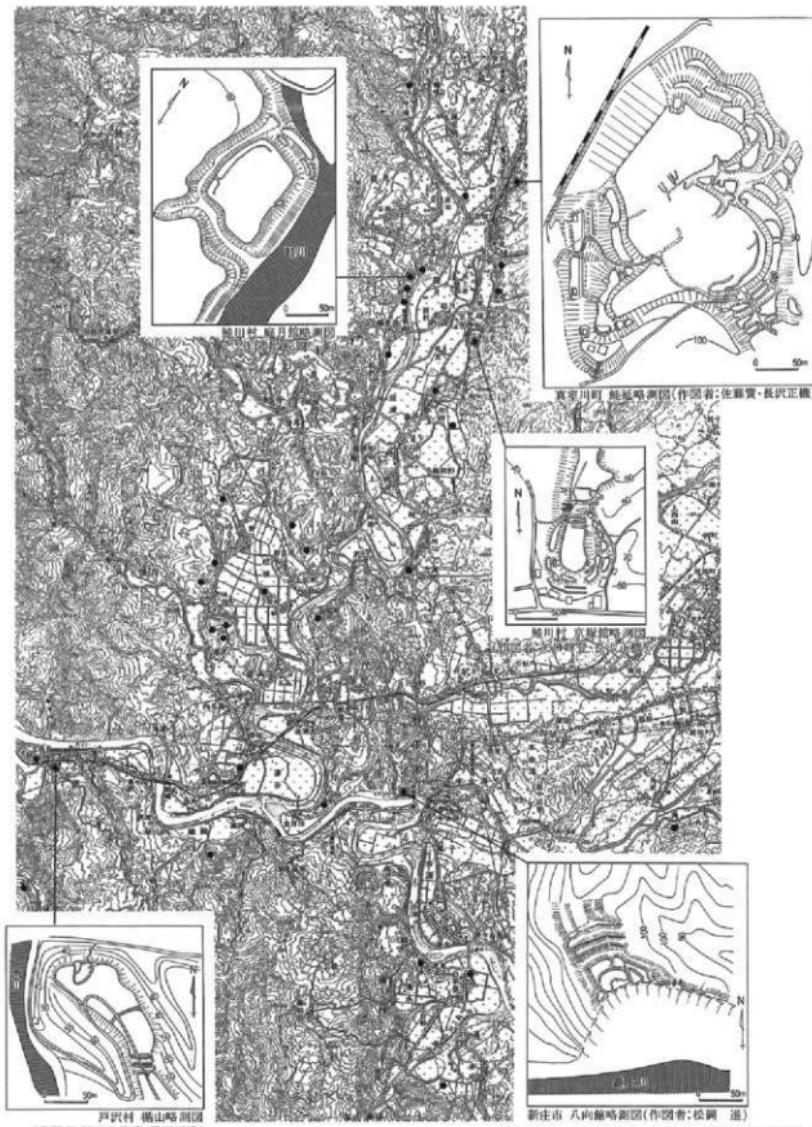
西川町 沼ノ平輪(作図者:鈴木聖雄)



寒河江市 宮内橋略測図(作図者:高橋慎示)



寒河江市 東海林橋略測図(作図者:高橋慎示)



第72図 最上郡最上川・鮭川周辺館跡

報告書抄録

|        |   |  |  |  |  |  |  |
|--------|---|--|--|--|--|--|--|
| ふりがな   | むつあいたてあとはくつちょうさほうこくしょ                       |  |  |  |  |  |  |
| 書名     | 睦合館跡発掘調査報告書                                 |  |  |  |  |  |  |
| 副書名    |   |  |  |  |  |  |  |
| 巻次     |   |  |  |  |  |  |  |
| シリーズ名  | 山形県埋蔵文化財センター調査報告書                           |  |  |  |  |  |  |
| シリーズ番号 | 第63集  |  |  |  |  |  |  |
| 編著者名   | 伊藤 元  |  |  |  |  |  |  |
| 編集機関   | 財団法人山形県埋蔵文化財センター                            |  |  |  |  |  |  |
| 所在地    | 〒999-3161 山形県上山市弁天二丁目15番1号 TEL 023-672-5301 |  |  |  |  |  |  |
| 発行年月日  | 1999年3月31日                                  |  |  |  |  |  |  |

| ふりがな<br>所収遺跡名                 | ふりがな<br>所在地                                 | コード  |                 | 北緯                | 東経                 | 調査期間                      | 調査面積m <sup>2</sup> | 調査原因                     |
|-------------------------------|---|------|-----------------|-------------------|--------------------|---------------------------|--------------------|--------------------------|
|                               |   | 市町村  | 遺跡番号            |                   |                    |                           |                    |                          |
| むつあいたてあとはくつちょうさほうこくしょ<br>睦合館跡 | やまがたけん<br>にしかわまち<br>西川町<br>おおざきごうもん<br>大字睦合 | 6322 | 平成<br>4年度<br>登録 | 38度<br>22分<br>45秒 | 140度<br>11分<br>12秒 | 19960716<br>～<br>19961120 | 10,800             | 東北横断自動車道酒田線（寒河江～西川間）建設工事 |

| 種別  | 主な時代          | 主な遺構   | 主な遺物  | 特記事項   |
|-----|---------------|--|---|--|
| 城館跡 | 戦国期<br>(16世紀) | 掘立柱建物跡10<br>竪穴建物跡 1<br>井戸跡 1<br>土杭 8<br>溝跡<br>曲輪<br>土塁<br>空堀 | 輸入陶磁器<br>(青磁・白磁・染付)<br>瀬戸・美濃系陶器<br>(皿・茶入れ)<br>唐津系陶器<br>肥前系磁器(碗・皿)<br>石製品<br>(石鉢・茶臼・砥石)<br>金属製品<br>(刀子・建築部材) | 主郭は三重の土塁と空堀、曲輪に囲まれる。16世紀～17世紀中葉にかかる館跡。<br>(出土箱数 14箱) |

図 版





遺跡遠景（南東から）



遺跡近景（西から）



遺跡近景（東から）

図版2



重機械表土除去（北から）



グリッド設定（北東から）



主郭遺構検出（南から）



土壠面整理（北から）



曲輪面整理（北東から）



遺構精査（東から）



土壠断面記録（南から）



調査説明会（西から）



調査区全景（手前南）



南虎口（南から）



南虎口（北から）



東虎口（北から）



土橋（南から）

図版4



主郭東南端区画段差（西から）



主郭東端区画段差（東から）



主郭中央部区画段差（北から）



主郭西端区画段差（北から）



主郭北中央部遺構検出状況（北から）



主郭北部遺構検出状況（南から）



主郭南西部遺構検出状況（東から）



主郭西部遺構検出状況（北から）



SX299検出状況（北から）



SX300検出状況（東から）



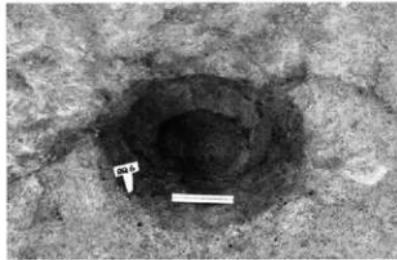
7トレンチ土層（南西から）



7トレンチ土層（南東から）



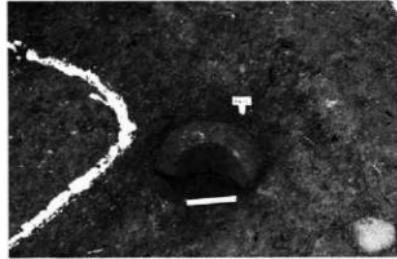
RP1紡錘車出土状況（西から）



RQ6石鉢A類出土状況

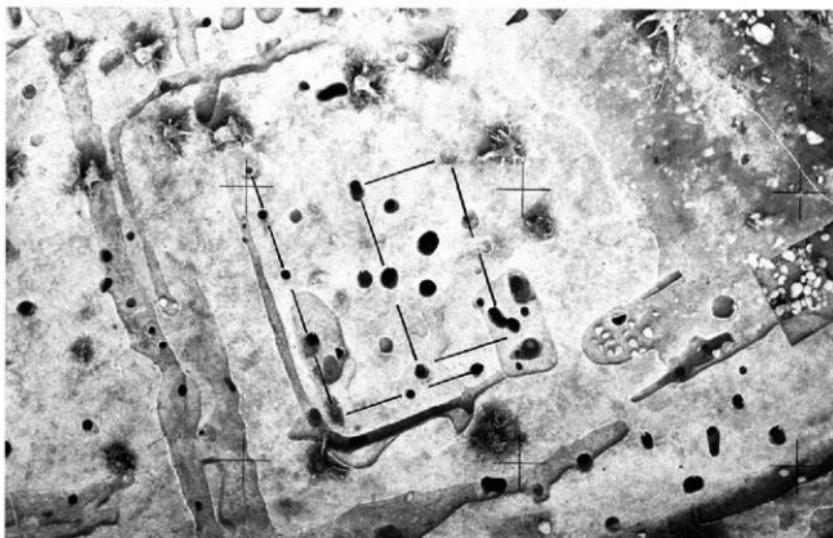


RQ7茶臼出土状況（東から）

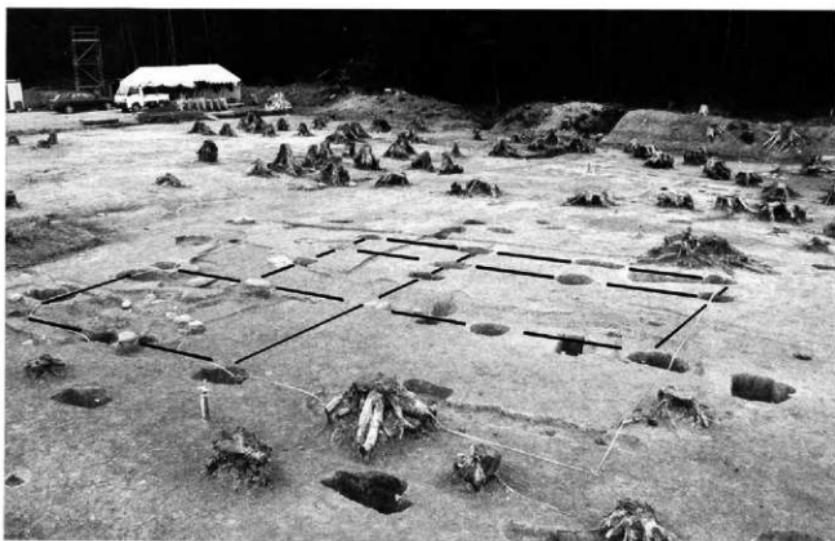


RQ11石鉢A類出土状況

図版6



SB1.SB2掘立柱建物跡（手前南）

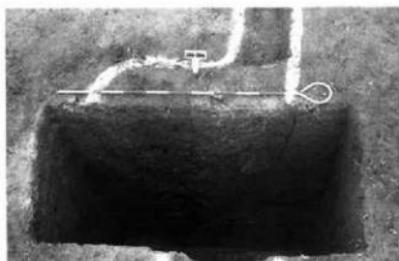


SB50掘立柱建物跡（南東から）

図版7



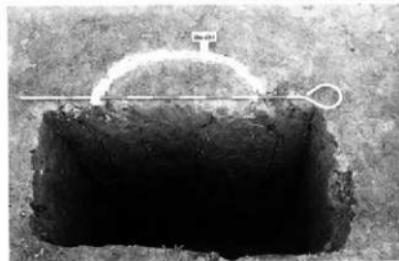
SB50 EB1~6 (北から)



SB50 EB1 (南から)



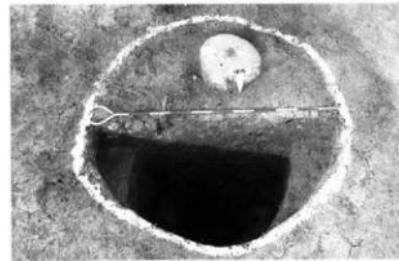
SB50 EB2 (南から)



SB50 EB3 (南から)



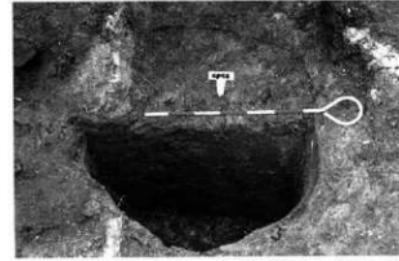
SB50 EB4 (南から)



SB50 EB15 (南から)



SB50 EB51 (南から)



SB50 EB56 (南から)

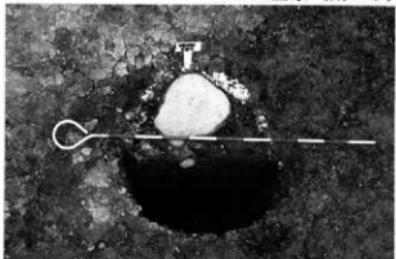
図版8



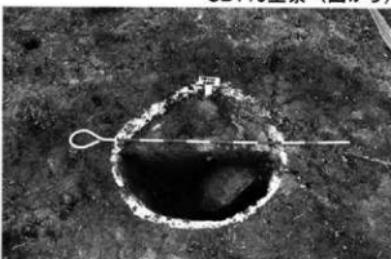
SB110全景（南から）



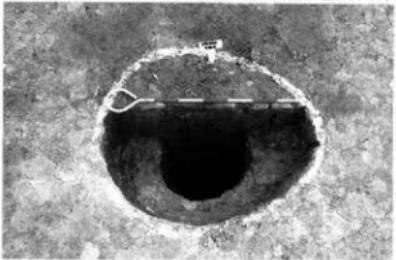
SB110全景（西から）



SB110 EB5（南から）



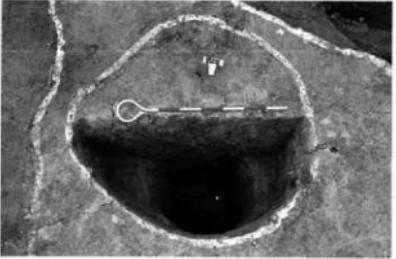
SB110 EB7（南から）



SB110 EB8（南から）



SB110 EB10（南から）



SB110 EB14（南から）



SB110 EB16（西から）



SB230検出状況（南から）



SB230完掘状況（北から）



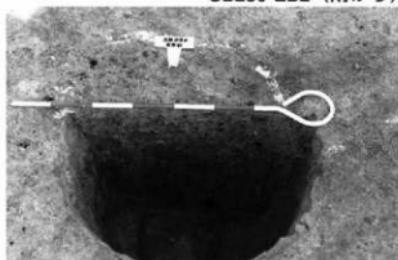
SB230-EB1（南から）



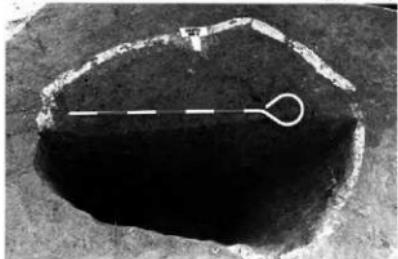
SB230-EB2（南から）



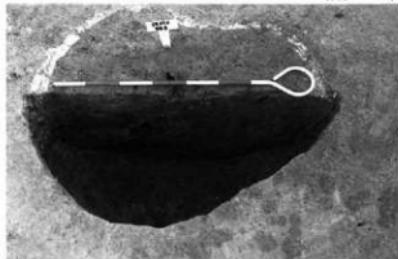
SB230-EB3（南から）



SB230-EB4（南から）



SB230-EB5（西から）

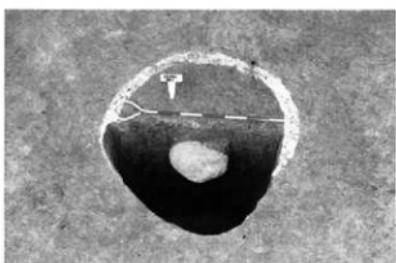


SB230-EB6（南から）

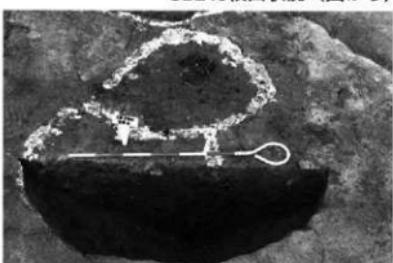
図版10



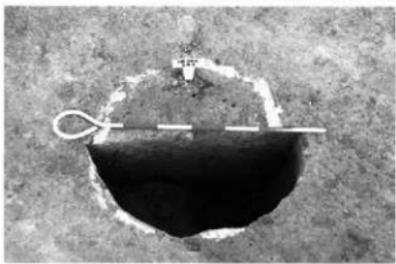
SB240検出状況（西から）



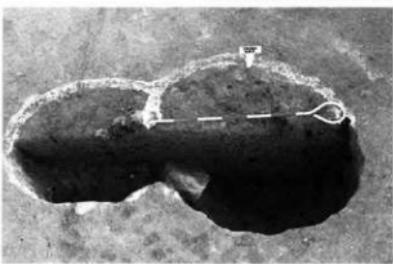
SB240-EB1（南から）



SB240-EB4（南から）



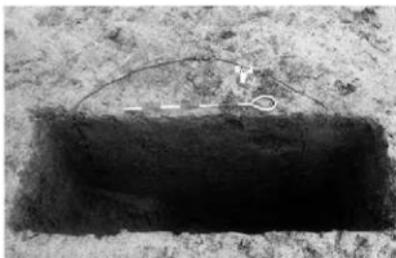
SB240-EB6（南から）



SB240-EB7（南から）



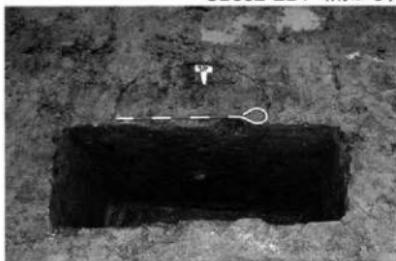
SB332検出状況（西から）



SB332-EB1（南から）



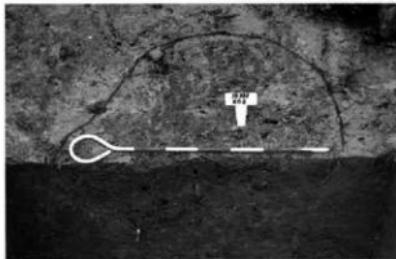
SB332-EB3（南西から）



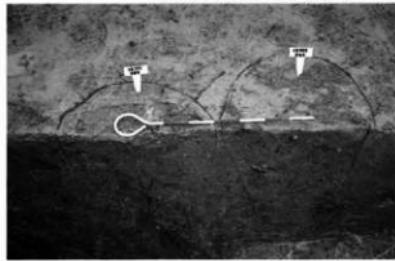
SB332-EB6（西から）



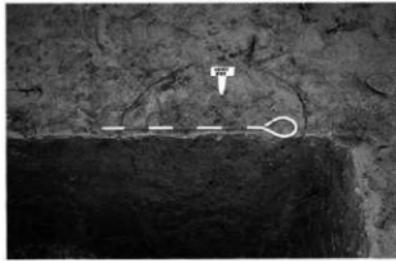
SB333完掘状況（北西から）



SB333-EB2（北西から）



SB332-EB3・4（東から）



SB332-EB5（西から）

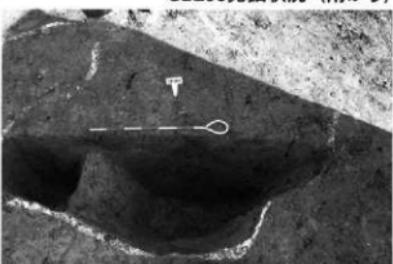
図版12



SB290完掘状況（南から）



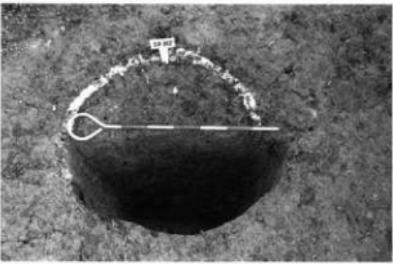
SB339半截状況（南から）



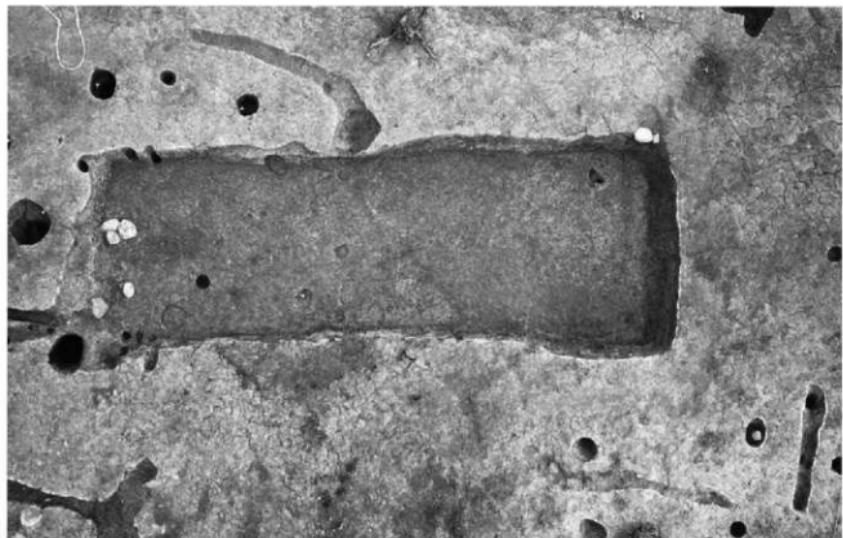
SB339-EP302（南西から）



SB339-EP304（西から）



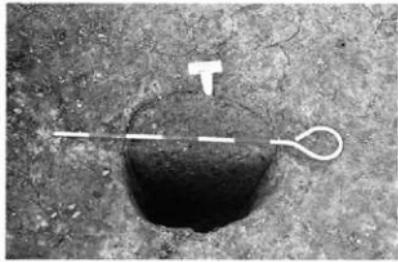
SB339-EP305（南西から）



ST234西面土層（北西から）



ST234南面土層（南東から）



ST234-EP1（南から）



RM8刀子出土状況（南から）

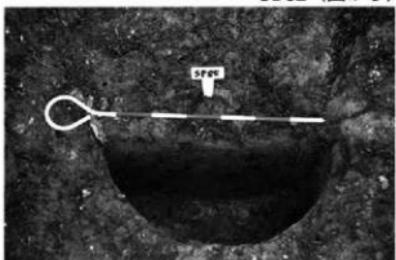
図版14



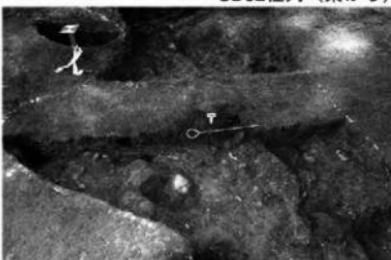
SD82（西から）



SD82柱列（東から）



SP85（西から）



SD83（南から）



SD86土層（西から）



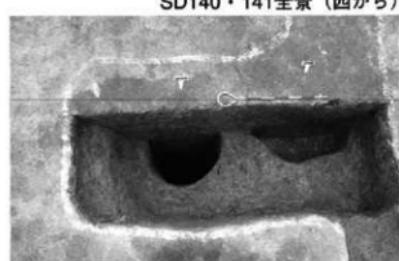
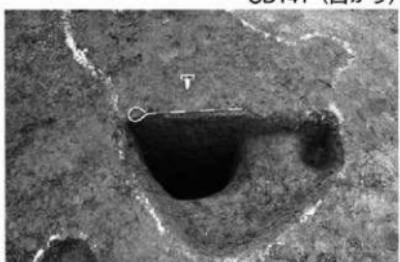
SD82・83・84・86完掘状況（南西から）



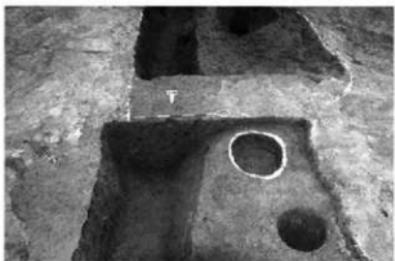
SD100・86（西から）



SP96墓石出土状況（北から）



図版16



SD283（西から）



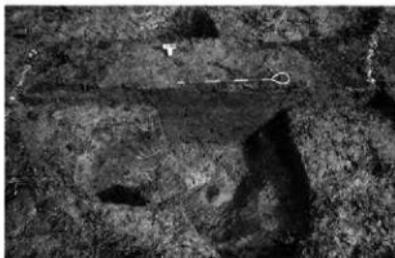
SD284（南から）



主郭南西部 20~24-18~24G空中写真（手前南）



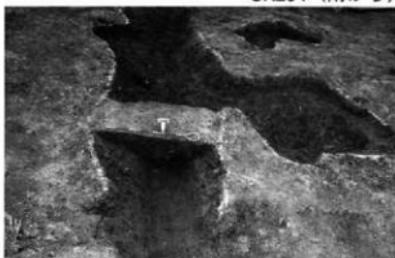
SD293 (南西から)



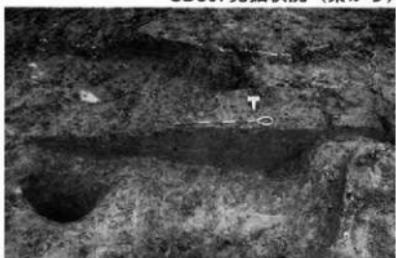
SK294 (南から)



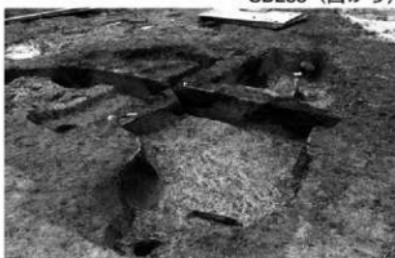
SD307完掘状況 (東から)



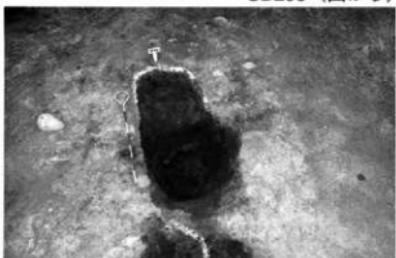
SD285 (西から)



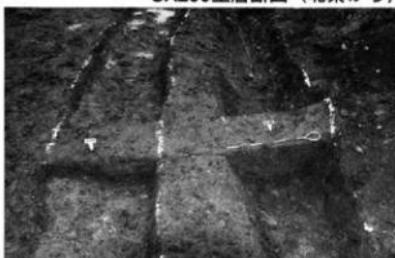
SD295 (西から)



SX299土層断面 (北東から)



SP286石鉢出土状況 (南から)



SD296・297 (南から)

図版18



SD209・210（南から）



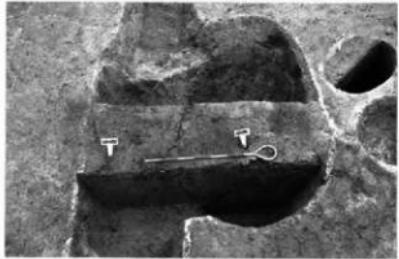
SD213（南から）



SD209・210・213完掘状況（東南から）



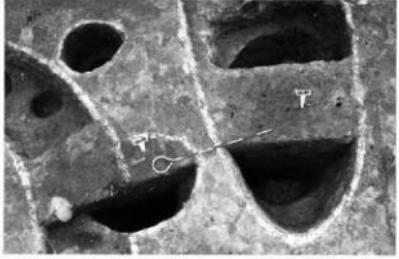
SD209・210・213完掘状況（南西から）



SD198・SP196（西から）



SP197（西から）



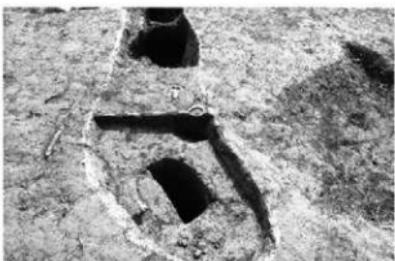
SP195（西から）



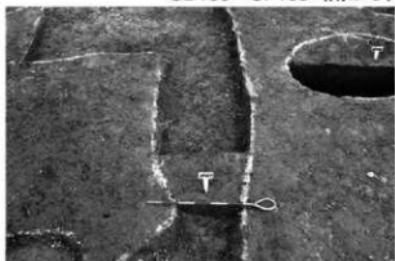
SD198内ピット列（東から）



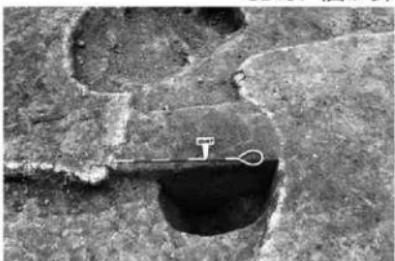
SD180・SP183 (南から)



SD181 (西から)



SD187 (南から)



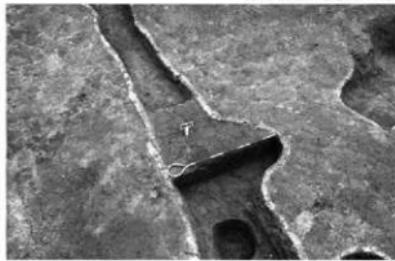
SD189 (北から)



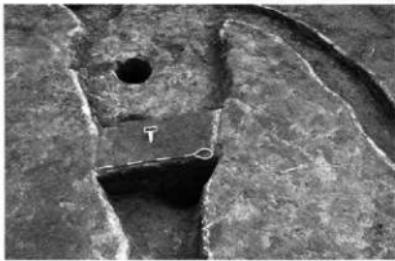
SD190 (東から)



SD191 (西から)



SD192 (南西から)



SD193 (南西から)

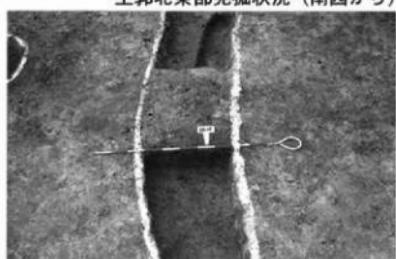
図版20



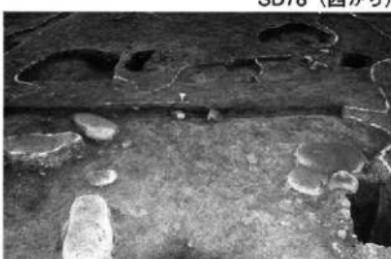
主郭北東部完掘状況（南西から）



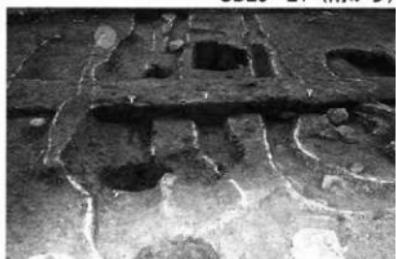
SD78（西から）



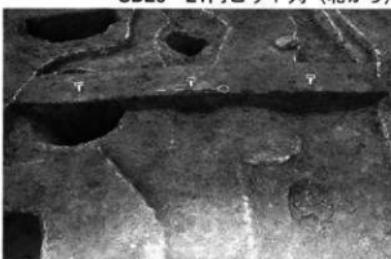
SD20・21（南から）



SD20・21内ピット列（北から）



SD66（西から）



SD66・SD25交差部分（北東から）



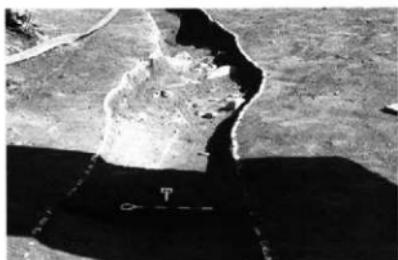
SD75（南西から）



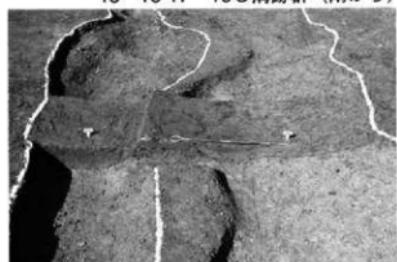
SD76（西から）



15~16-17~19G 溝跡群（南から）



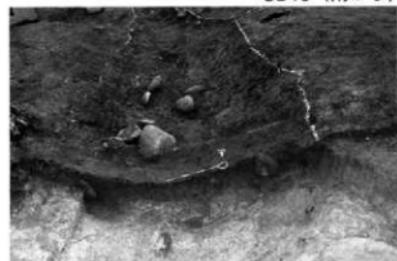
16-19~20G 溝跡群（南東から）



SD18（南から）



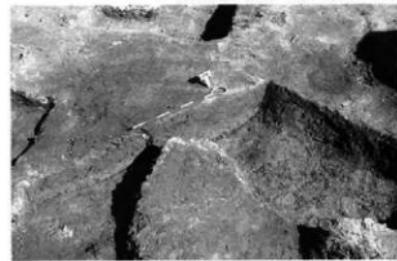
SD22（東から）



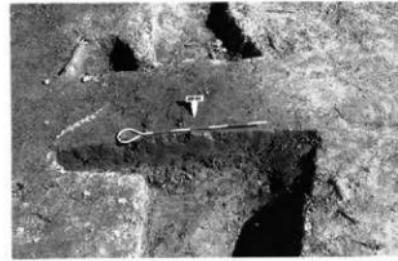
SD63・64・65（東から）



SD62・63・SP5（東から）



SD25（西から）



SD238（南から）

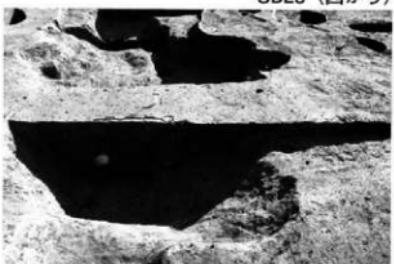
図版22



SD23 (西から)



SD24 (西から)



SD40 (西から)



SD48 (北から)



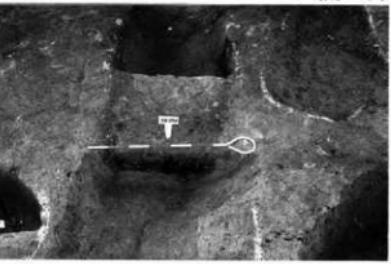
SD242 (南から)



SD239・240 (南から)



SD252・253 (南から)



SD270 (北から)

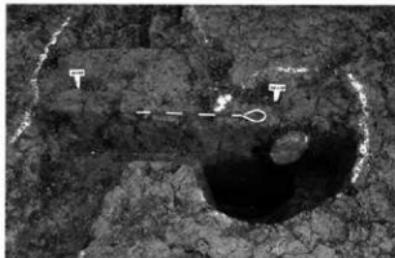


主郭北東部10~15-14~20G 完掘状況（手前南）

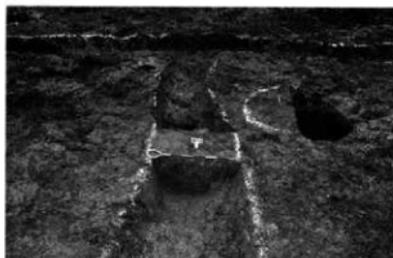


主郭中央部14~18-14~20G 完掘状況（手前南）

図版24



SD233・SP229（西から）



SD236（北から）



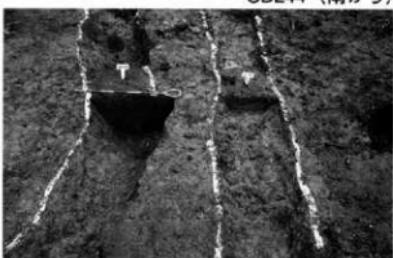
SD243・245・246（東から）



SD244（南から）



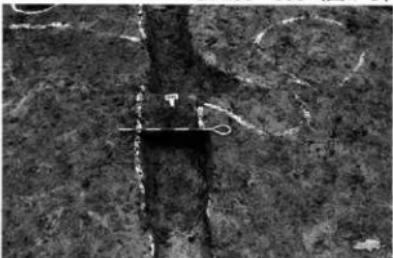
SD247（西から）



SD236・308（西から）



SD310（西から）



SD311（西から）



SD298戸車出土状況（北から）

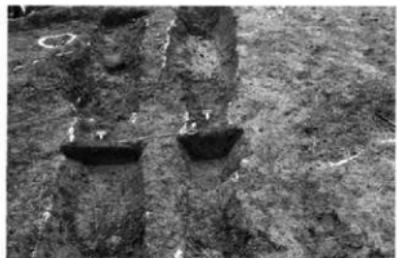


SD309（南から）

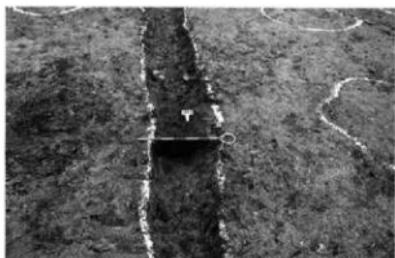


主郭西半部13~19-21~28G 空中写真（手前南）

図版26



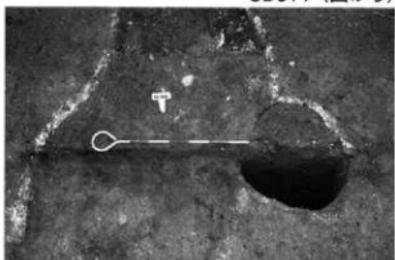
SD312・313 (南から)



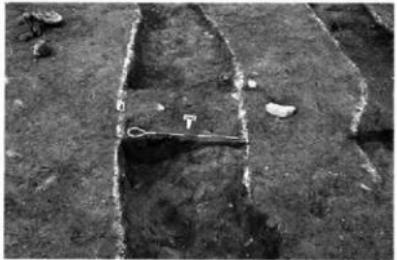
SD314 (西から)



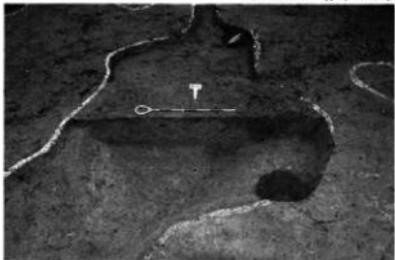
SD323 (南から)



SD324 (西から)



SD325 (西から)



SD316 (南から)



SD317 (西から)



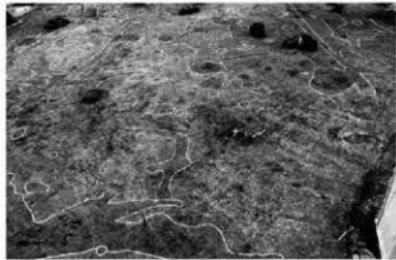
SD318 (西から)



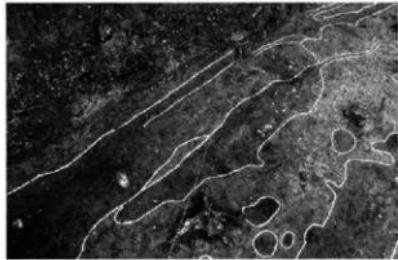
SD321 (南から)



SD322 (南から)



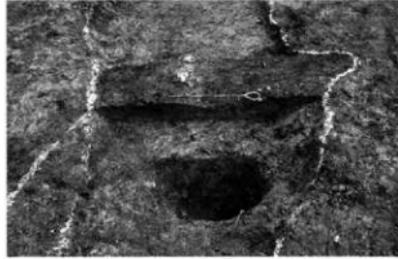
13~15-26~30G 遺構検出状況 (北から)



SD327・328検出状況 (南から)



SD319 (西から)



SD326 (西から)

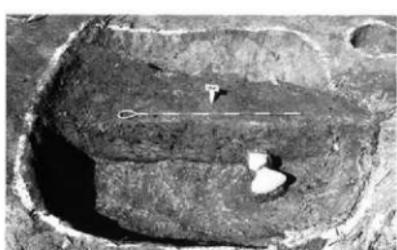


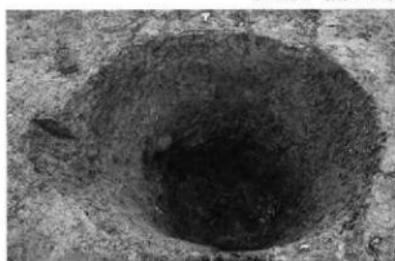
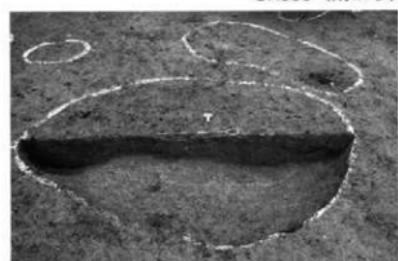
SD327 (西から)



SD328 (西から)

図版28





図版30



土塁と空堀（東から）



SF500（西から）



SF500（南から）



SF500・SD600と土橋（西から）



SF500・SD600（東から）



SF500・SD600 (西から)



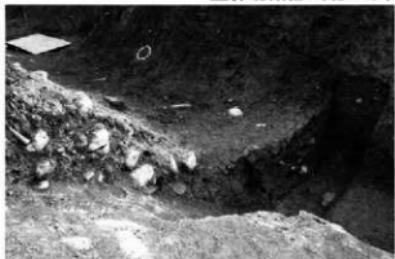
SF500・SD600 (北から)



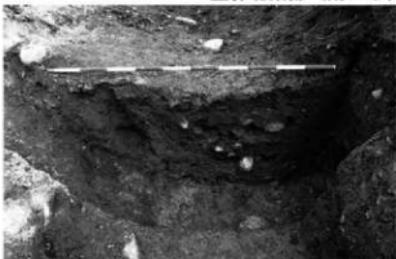
主郭北東部 (北から)



主郭北東部 (南から)



2トレンチ空掘 (北西から)



2トレンチ空掘 (西から)



1トレンチ空掘 (東から)



SE220 (東から)

図版32



3トレンチ全景（東から）



3トレンチ西面拡張部（南東から）



3トレンチ東面南半部（東から）



3トレンチ東面北半部（東から）



3トレンチ西面北半部（北西から）



3トレンチ西面中央部（南西から）



3トレンチ内造構検出柱穴（手前西）



RQ5石鉢出土状況（東から）



12トレンチ（南東から）



10トレンチ北（西から）



10トレンチ中央（西から）



10トレンチ南（南西から）



11トレンチ（西から）



11トレンチ（西から）



三重堀と土塁（西から）



三重堀と土塁（南東から）



1トレンチ土層（南東から）



2トレンチ土層（南西から）



2トレンチSF520（東から）



主郭北端整地層（中央3トレンチ）（手前南）



SX330完掘状況（東から）



SX330西半部（西から）



SX330土層（南東から）

図版36



SD250検出状況（西から）



SD250検出状況（南東から）



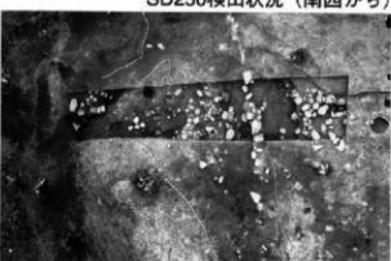
SD250検出状況（南から）



SD250検出状況（南西から）



9トレンチ土層（南西から）



8トレンチ（手前北）



8トレンチ西半部土層（北西から）



8トレンチ東半土層（北から）



図版38



SD250南端部 (南から)



SD250南端部 (西から)



RQ4石鉢出土状況 (西から)



8トレンチ出土石鉢出土状況 (北から)



SD250完掘状況 (北西から)



西曲輪群（北から）



南西曲輪群（西から）

図版40



4トレンチ（南東から）



5トレンチ（東から）



5トレンチ（東から）



6トレンチ（北東から）



6トレンチ（南東から）



郭340（南から）



郭340・350（東から）



郭350土留め石（南東から）



郭360（東から）



郭360と虎口（南西から）



郭370（南西から）



郭370（北東から）



郭370・390（北西から）

図版42



郭380（北東から）



郭380（西から）



郭390・400（南から）



郭390・400（北西から）



郭400（東から）



郭390・400（南東から）



郭410（北から）



郭420（南東から）



稻荷様が祠されていた場所（西から）



三重土壘西端部（南西から）



郭450と秋葉神社（南から）



郭460と小道（東から）



南西曲輪群小道（南から）



長流寺脇からの登り口（南から）

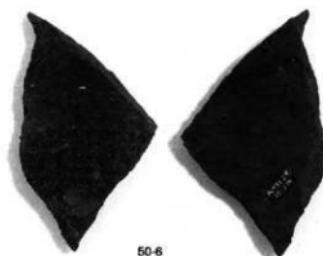
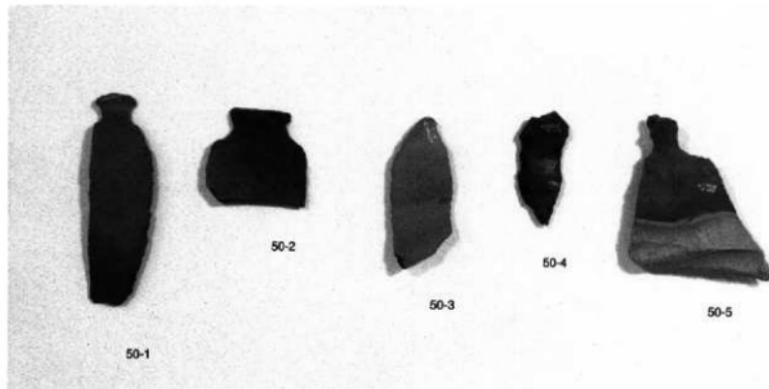


睦合館下の段差（東から）



睦合小脇の祠（南から）

図版44



石器・須恵器

図版45



図版46



瀬戸・美濃系陶器



唐津系陶器 他

図版48

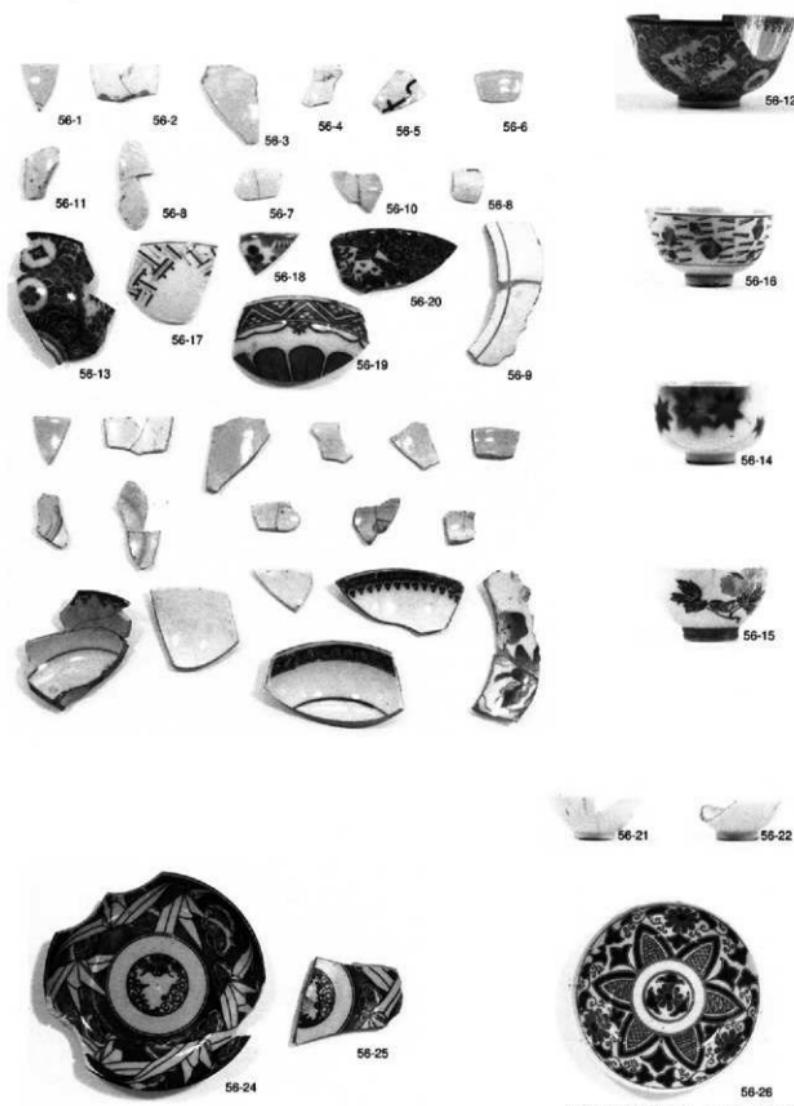


肥前系磁器(1)



肥前系磁器(2)

図版50



肥前系磁器(3)、産地不明磁器



57-2



57-3



57-4  
石鉢(1)

圖版52



58-3



58-2



58-4

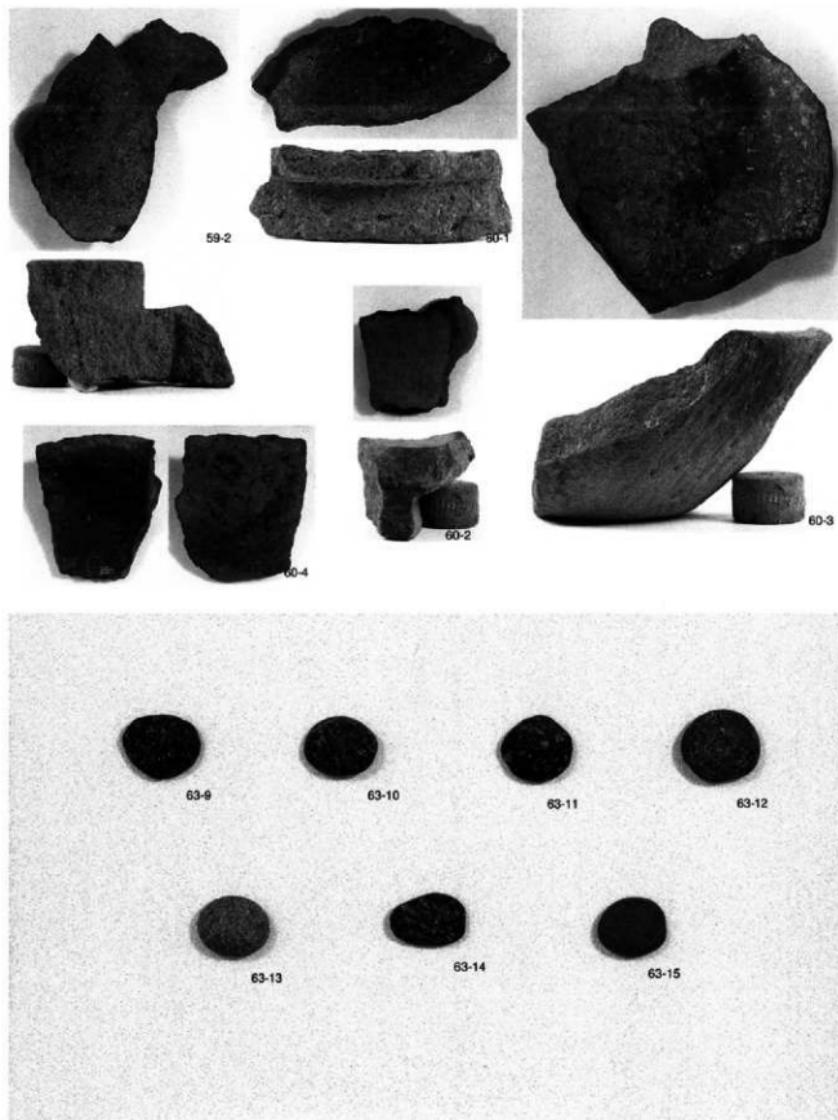


58-1



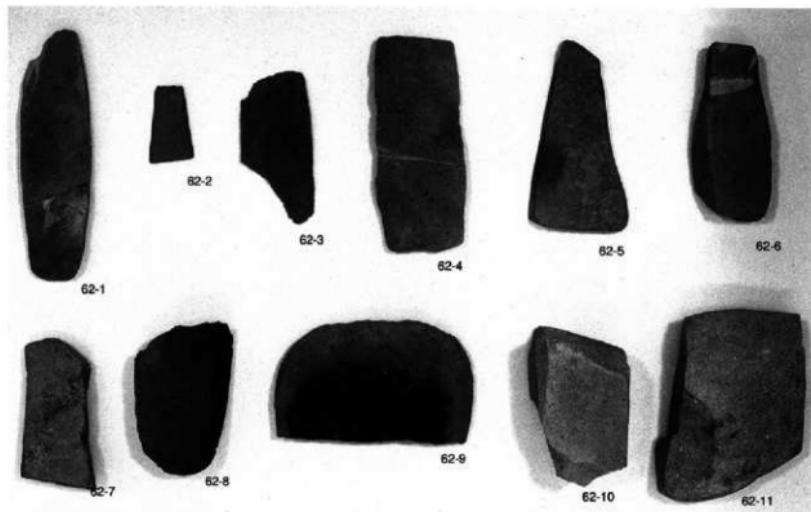
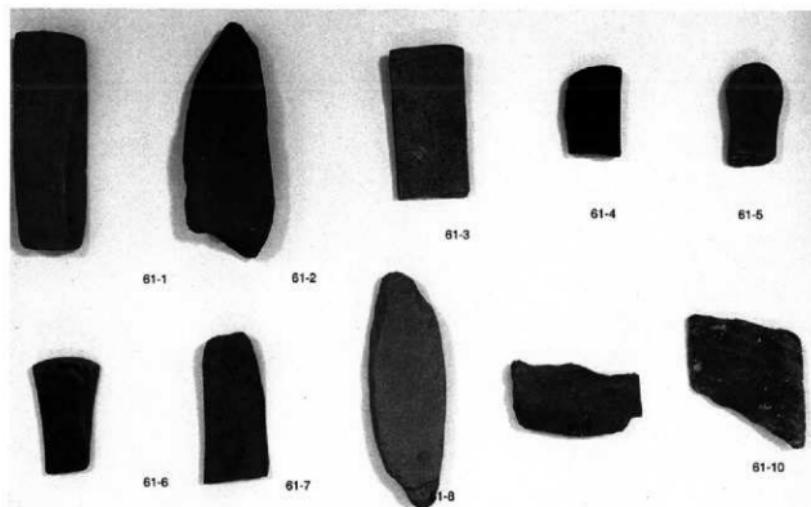
59-1

石鉢(2)、茶臼(1)

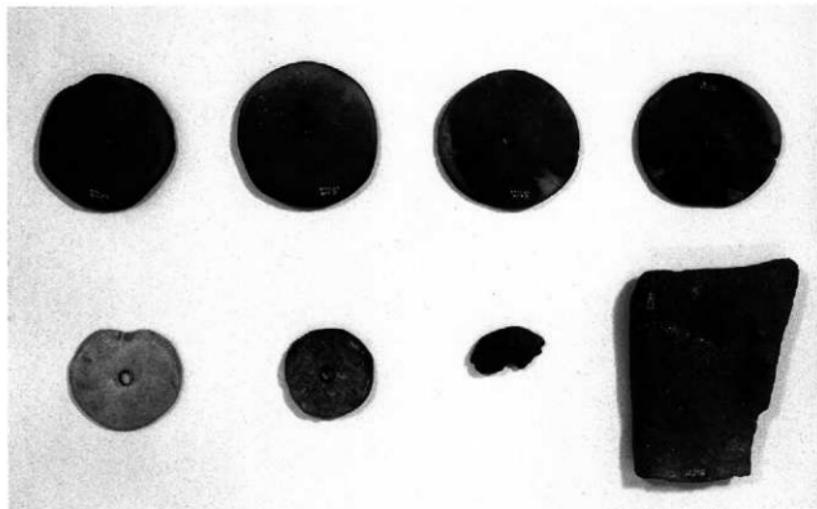
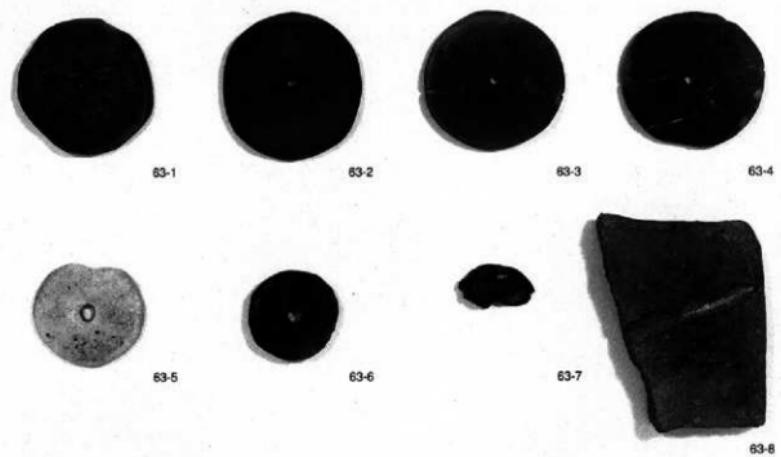


茶臼(2)・石鉢・基石

図版54

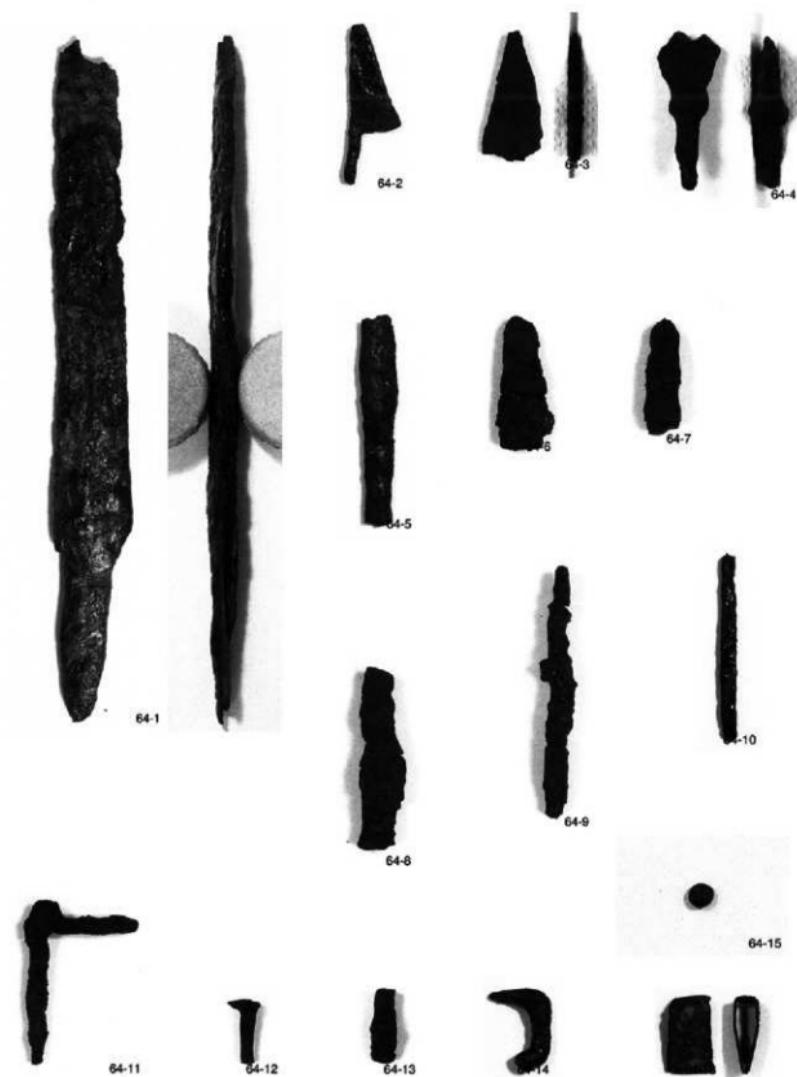


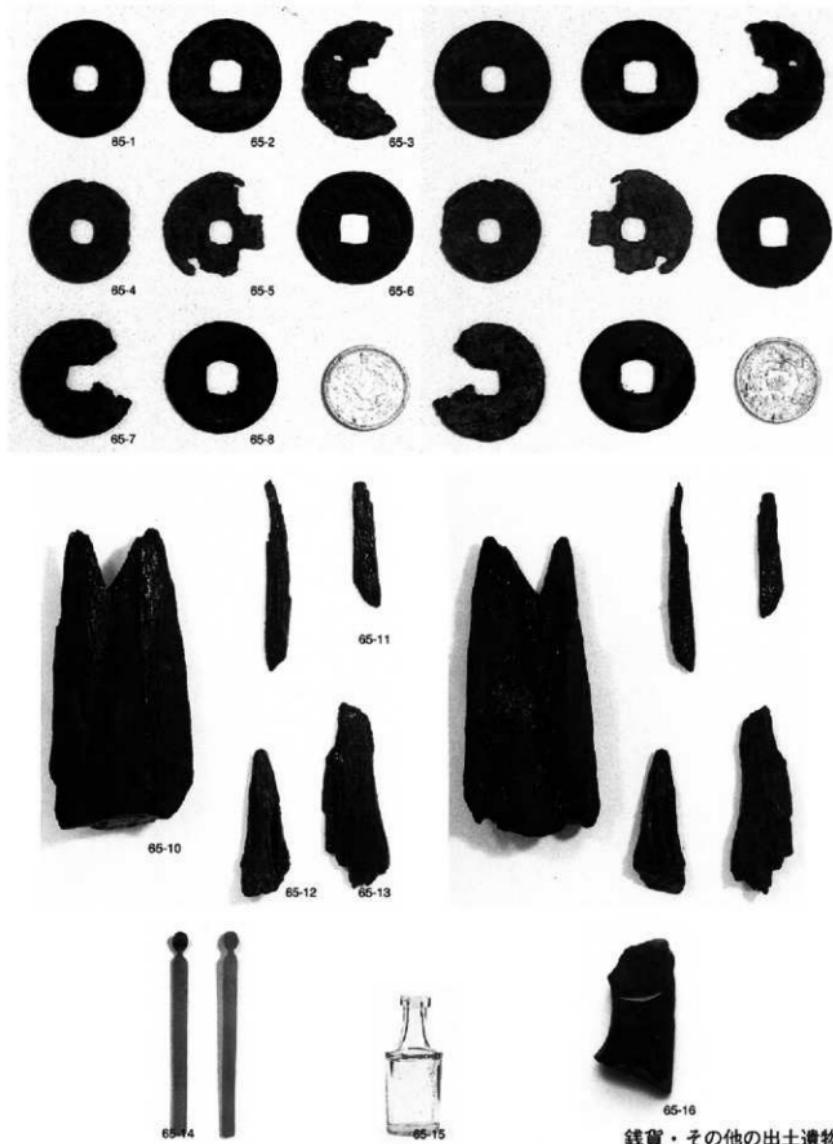
砥石



その他の土製品・石製品

図版56





銭貨・その他の出土遺物



付 編

## 睦合遺跡から出土した炭化材の年代と樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

### はじめに

睦合遺跡は、寒河江川左岸の台地上に位置する。発掘調査により中世の館跡が検出されている。このうち、土壘には炭化物層が認められ、倉庫の可能性がある竪穴や柱穴からも炭化材が検出されている。

本報告では、これらの炭化材の放射性炭素年代測定を行い、造構の構築時期に関する資料を得る。また、炭化材の樹種を明らかにし、用材に関する資料を得る。

### 1. 試料

試料は、各造構から出土した炭化材 4 点（試料番号 1 ~ 4）である。

### 2. 方法

#### (1) 放射性炭素年代測定

##### a) 前処理

乾燥、粉砕したものを水に入れて、浮上してきたものを除去した。次に水酸化ナトリウム溶液で煮沸した。室温まで冷却した後、水酸化ナトリウム溶液を傾斜法で除去した。この作業を除去した水酸化ナトリウム溶液の色が薄い褐色になるまで繰返した。次に濃硝酸を加えて煮沸した。室温まで冷却した後、傾斜法により除去した。充分水で洗浄した後、乾燥して蒸し焼き（無酸素状態で400℃に加熱）にした。蒸し焼きにした試料は純酸素中で燃焼して二酸化炭素を発生させた。発生した二酸化炭素は捕集後、純粋な炭酸カルシウムとして回収した。

##### b) 測定試料の調製

前処理で得られた炭酸カルシウムから真空状態で二酸化炭素、アセチレン、ベンゼンの順に合成した。最終的に得られた合成ベンゼン 3 mL（足りない場合は、市販の特級ベンゼンを足して 3 mL とした）にシンチレイターを含むベンゼン 2 mL を加えたものを測定資料とした。

##### c) 測定

測定は、1回の測定時間 50 分間を 20 回繰返す計 1,000 分間行った。未知試料の他に、値が知られているスタンダード試料と自然計数を測定するブランク試料と一緒に測定した。

##### d) 計算

放射性炭素の半減期として LIBBY の半減期 5,570 年を使用した。

#### (2) 樹主同定

木口（横断面）・柵目（放射断面）・板目（接線断面）の 3 断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

表1 放射性炭素年代測定結果および樹種同定結果

| 番号 | 試料名               | 性状  | 樹種        | 年代値           | 誤差      |         | Lab No  |
|----|-------------------|-----|-----------|---------------|---------|---------|---------|
|    |                   |     |           |               | +       | -       |         |
| 1  | 3トレンチ（土塁）炭化植物サンプル | 炭化材 | マツ属複維管束亜属 | 450           | 290     | 280     | PAL-169 |
| 2  | SX234炭化物サンプルNO.3  | 炭化材 | クリ        | 250           | 230     | 220     | PAL-170 |
| 3  | SX234炭化物サンプルNO.6  | 炭化材 | マツ属複維管束亜属 | MODERN(350)   | ( 810 ) | ( 740 ) | PAL-166 |
| 4  | SP151F1下          | 炭化材 | マツ属複維管束亜属 | MODERN(1,430) | (5760)  | (3320)  | PAL-167 |

注：(1) 年代値：1950年を基点とした値。基点との差が誤差 $2\sigma$ よりも小さいとき基点より小さいとしてMODERNと表示し、年代値を参考として()内に記した。

(2) 誤差：測定誤差 $2\sigma$ （測定値の95%が入る範囲）を年代値に換算した値。

### 3. 結果

放射性炭素年代測定結果および樹種同定結果を表1に示す。試料番号3と4は、測定結果と基点との差が $2\sigma$ よりも小さかったためMODERNと表示し、測定値を年代に換算した場合の値を参考値として示した。その他の試料は、試料番号1が450y.B.P.、試料番号2が250y.B.P.であった。また、炭化材は、針葉樹1種類（マツ属複維管束亜属）と広葉樹1種類（クリ）に同定された。各種類の解剖学的特徴などを以下に記す。

#### ・マツ属複維管束亜属 (*Pinus subgen. Diploxyylon*) マツ科

仮道管の早材部から晩材部への移行は急～やや緩やかで、晩材部の幅は広い。垂直樹脂道および水平樹脂道が認められる。放射柔細胞の分野壁孔は窓状、放射仮道管内壁には鋸歯状の突出が認められる。放射組織は、単列、1～15細胞高。

#### ・クリ (*Castanea crenata Sieb. et ZUCC.*) ブナ科クリ属

環孔材で孔圈部は1～4列、孔圈外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高。柔組織は周囲状および短接線状。

### 4. 考察

#### (1) 年代測定値について

炭化物が出土した遺構は、いずれも中世と考えられている。年代測定結果を見ると、試料番号1はいわゆる中世の年代に含まれており、発掘調査所見とも調和的である。しかし、試料番号2は、発掘調査所見よりも新しい近世の年代を示す。試料番号2は、試料中に多数の根が混入しており、前処理で全て除去することが困難であった。根によって新しい炭素が混入したために年代が新しくなった可能性もある。

また、試料番号3,4はMODERNであるため、その年代値はあくまでも参考値である。試料の状態も、試料番号2と同様に値が多く混入しており、その全てを除去することは困難であった。そのため、測定結果に対する検討は控えたい。

## (2) 用材について

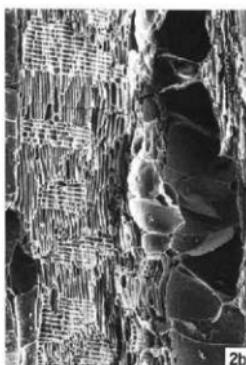
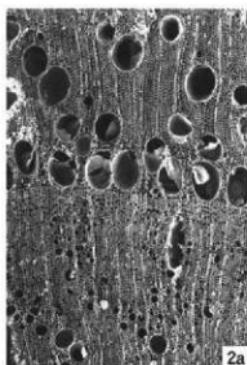
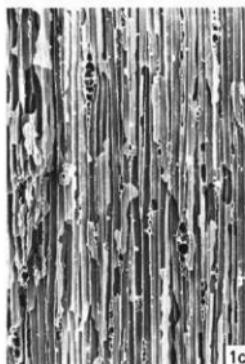
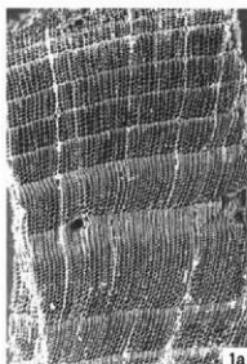
炭化材は、3点が複維管束亜属（いわゆるニヨウマツ類）、1点がクリであった。複維管束亜属は、松脂を多く含むために耐水性が高く、構築材・土木材などに広く利用される。またクリも強度および耐朽性が高いため、構築材や土木材に広く利用される。今回の結果は、構築材や土木材に適した木材を選択・利用している様子がうかがえる。

また、複維管束亜属は生長が早く、種が非常食ともなることから、城域などに植えられることもあった。今回利用されている複維管束亜属についても、館周辺に植えられていた可能性がある。今後花粉分析などによる古植生の変遷についても調査を行い、明らかにしたい。

## 引用文献

- 石河寛昭（1977）最新液体シンチレーション測定法. 189p., 南山堂.  
富樫茂子・松本英二（1983）ベンゼンー液体シンチレーションによる<sup>14</sup>C年代測定法.地質調査所月報, 34, p.513-527  
日本化学会編（1976）同位体年代測定.「新実験化学講座10 宇宙地球科学」, p.337-353, 丸善.

図版1 炭化材



1. マツ属複維管束亞属（試料番号3）

2. クリ（試料番号2）

a : 木口, b : 柄目, c : 板目

— 200  $\mu\text{m}$  : a  
— 200  $\mu\text{m}$  : b, c

---

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第62集

『くわいじゆ』  
睡合館跡発掘調査報告書

1999年3月31日発行

発行 財団法人 山形県埋蔵文化財センター  
〒999-3161 山形県上山市弁天二丁目15番1号  
電話 023-672-5301  
印刷 田宮印刷株式会社

---